

天神遺跡緊急発掘調査報告書  
山田屋敷遺跡

長野県上田市

1973年3月

上田市教育委員会  
長野県東信土地改良事務所

20

203

15-2

## 序にかえて

上田市教育長 山 極 真 平

上田市下之郷から富士山にかけての字山田屋敷及び天神は、北に他田塚古墳などの東山古墳群を望み、また周囲からは、多くの遺物が発見される埋蔵文化財にゆかりの深い地籍であります。

今回、この地籍について農業構造改善事業等によって耕地の再開発が行われるようとしておりました。

上田市教育委員会はこれを機に是非とも遺構、遺物の有無を確認すべく上田市文化財調査委員小林幹男先生を調査団長をお願いし、昭和49年2月24日から3月15日まで発掘調査を実施しましたところ、発見された遺構は弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が主なものでありましたが、こうした学術的成果にも増して、私たちの大きな喜びでありましたのは、降雪や厳寒の折にもかかわらず、終始この調査にあたたかいご理解とご協力を頂いた地元下之郷自治会の皆さんの発掘現場や報告会で示された郷土の文化財に対する関心の強さでありました。

現在、水田として新たに整備されたこの地域を眺めるにつけても、古代遺跡への愛情とともに、埋蔵文化財を将来に亘って保護してゆく使命とさらにこの古代文化遺産を包蔵する文化圏のより広い周知と活用を行政の上に展開せねばならない任務の重さを痛感するものであります。

終りに、積極的に調査にご尽力下さった小林先生ならびにご協力をいただいた下之郷自治会の皆さん、東信土地改良事業所の皆さん、そして各大学・高校の皆さんに、衷心より御礼申し上げます。

昭和50年2月1日

# 本文目次

序にかえて	教育長 山際真平	1
例 言		8
第Ⅰ章 発掘調査の経緯と概要	原 昌孝	19
1 発掘調査の経過		10
2 調査会の構成		11
3 調査日誌		12
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	小林幹男	14
1 地理的環境		15
2 歴史的環境		17
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	川上 元・小林幹男	19
1 天神遺跡		20
A 弥生時代の遺構と遺物		21
(1) Y第1号住居跡		21
(2) Y第2号住居跡		23
(3) Y第3号住居跡		26
(4) Y第4号住居跡		26
(5) Y第5号住居跡		27
(6) Y第6号住居跡		29
(7) Y第7号住居跡		29
(8) Y第8号住居跡		31
(9) Y第9号住居跡		33
(10) Y第10号住居跡		34
(11) Y第11号住居跡		37
(12) Y第12号住居跡		38
(13) Y第13号住居跡		38
(14) Y第14号住居跡		38
(15) Y第15号住居跡		39
(16) Y第16号住居跡		41
(17) Y第17号住居跡		42

18	Y 第18号住居跡	4 3
19	Y 第19号住居跡	4 6
20	Y 第20号住居跡	4 6
21	Y 第21号住居跡	4 7
22	Y 第22号住居跡	4 8
23	Y 第23号住居跡	4 8
B	古墳時代および歴史時代の遺構と遺物	5 0
(1)	H 第 1 号住居跡	5 0
(2)	H 第 2 号住居跡	5 0
(3)	H 第 3 号住居跡	5 1
(4)	H 第 4 号住居跡	5 4
(5)	H 第 5 号住居跡	5 4
(6)	H 第 6 号住居跡	5 4
(7)	H 第 7 号整穴遺構	5 6
(8)	H 第 8 号住居跡	5 6
(9)	H 第 9 号住居跡	5 6
10	H 第10号住居跡	5 7
11	H 第11号住居跡	5 9
12	H 第12号住居跡	6 1
13	H 第13号住居跡	6 2
14	H 第14号住居跡	6 2
15	H 第15号住居跡	6 2
16	H 第16号住居跡	6 4
17	H 第17号住居跡	6 5
18	H 第18号住居跡	6 6
19	H 第19号住居跡	6 6
20	H 第20号住居跡	6 8
21	H 第21号住居跡	6 8
22	H 第22号住居跡	7 0
23	H 第23号住居跡	7 0
24	H 第24号住居跡	7 0
25	H 第25号住居跡	7 1

C	その他の遺構と遺物	72
(1)	井戸跡	72
(2)	D-1土抔	74
(3)	D-2土抔	75
(4)	集石遺構	76
2	山田屋敷遺跡	77
A	弥生時代の遺構と遺物	77
(1)	Y-01号住居跡	77
B	古墳時代および歴史時代の遺構と遺物	77
(1)	H-01号住居跡	77
(2)	H-02号住居跡	78
第IV章	考 察	小林幹男 79
1	遺跡の立地条件と集落の遷移	80
2	弥生時代の遺構と遺物	83
3	古墳時代と歴史時代の遺構と遺物	84
4	その他の遺構と遺物	85
あ	と が き	87

## 図 版 目 次

図版 1	下之郷付近の自然と環境	90
図版 2	天神遺跡全景	91
図版 3	天神遺跡第 1 号土壇墓	92
図版 4	天神遺跡 I	93
図版 5	天神遺跡 II	94
図版 6	天神遺跡 III	95
図版 7	天神遺跡 IV	96
図版 8	天神遺跡 V	97
図版 9	天神遺跡 VI	98
図版 10	天神遺跡遺物の出土状態	99
図版 11	山田屋敷遺跡	100
図版 12	天神遺跡の土器 I	101
図版 13	天神遺跡の土器 II	102
図版 14	天神遺跡の土器 III	103
図版 15	天神遺跡の土器 IV	104
図版 16	天神遺跡の土器 V	105
図版 17	天神遺跡の土器 VI	106
図版 18	天神遺跡の土器 VII	107
図版 19	天神遺跡と山田屋敷遺跡の土器	108

## 挿 図 目 次

第1図 下之郷周辺の遺跡 .....	14
第2図 周辺の地形と航空写真 .....	16
第3図 天神遺跡全景と器台付礎 .....	19
第4図 天神遺跡ツ13東壁断面図 .....	20
第5図 天神遺跡の住居跡群(1)(折込) .....	21
第6図 天神遺跡の住居跡群(2) .....	21
第7図 山田屋敷遺跡調査グリッド .....	21
第8図 天神遺跡Y-1・2号住居跡実測図 .....	22
第9図 天神遺跡Y-2号住居跡出土遺物実測図 .....	24
第10図 天神遺跡Y-3・5号住居跡出土遺物実測図 .....	25
第11図 天神遺跡Y-5・6・7号住居跡出土遺物実測図 .....	27
第12図 天神遺跡Y-5号住居跡実測図 .....	28
第13図 天神遺跡Y-6号住居跡実測図 .....	29
第14図 天神遺跡Y-7・16・17・19号住居跡実測図 .....	30
第15図 天神遺跡Y-8号住居跡実測図 .....	31
第16図 天神遺跡Y-8・9・11号住居跡出土遺物実測図 .....	32
第17図 天神遺跡Y-9・11号住居跡実測図 .....	33
第18図 天神遺跡Y-10号住居跡実測図 .....	34
第19図 天神遺跡Y-10号住居跡出土遺物実測図 .....	35
第20図 天神遺跡Y-10・12・15・16・17・20号住居跡出土遺物実測図 .....	36
第21図 天神遺跡Y-12号住居跡実測図 .....	37
第22図 天神遺跡Y-13、H-11号住居跡実測図 .....	39
第23図 天神遺跡Y-14号住居跡、D-1土坑実測図 .....	40
第24図 天神遺跡Y-14・21・23号住居跡出土遺物実測図 .....	41
第25図 天神遺跡Y-15、H-6号住居跡、D-2土坑実測図 .....	42
第26図 天神遺跡Y-18号住居跡実測図 .....	43
第27図 天神遺跡Y-18・19号住居跡出土遺物実測図 .....	44
第28図 天神遺跡Y-19号住居跡出土遺物実測図 .....	45
第29図 天神遺跡Y-6・20、H-13・19・20号住居跡実測図 .....	47
第30図 天神遺跡Y-21号住居跡実測図 .....	48
第31図 天神遺跡Y-22号住居跡実測図 .....	48

第32图	天神遺跡Y-23号住居跡実測図	49
第33图	天神遺跡H-1・2号住居跡実測図	51
第34图	天神遺跡H-1・3・4・5・6・8号住居跡出土遺物実測図	52
第35图	天神遺跡Y-3・4、H-3・4号住居跡実測図	53
第36图	天神遺跡H-5・10号住居跡実測図	55
第37图	天神遺跡H-7号竪穴遺構実測図	56
第38图	天神遺跡H-8・9号住居跡実測図	57
第39图	天神遺跡H-7遺構・H-10・12住居跡出土遺物実測図	58
第40图	天神遺跡H-11・19・21・23・24号住居跡出土遺物実測図	60
第41图	天神遺跡H-12号住居跡実測図	61
第42图	天神遺跡H-13・15・16・17号住居跡出土遺物実測図	63
第43图	天神遺跡H-15号住居跡実測図	64
第44图	天神遺物H-16号住居跡実測図	65
第45图	天神遺跡H-17号住居跡実測図	66
第46图	天神遺跡H-18号住居跡実測図	66
第47图	天神遺跡H-12・19・20号住居跡実測図	67
第48图	天神遺跡H-21・22・23号住居跡実測図	69
第49图	天神遺跡H-24号住居跡実測図	71
第50图	天神遺跡H-25号住居跡実測図	71
第51图	天神遺跡井戸跡実測図	73
第52图	天神遺跡井戸跡、D-1・2土坑出土遺物実測図	74
第53图	天神遺跡D-1土坑実測図	75
第54图	天神遺跡D-2土坑実測図	76
第55图	天神遺跡集石遺構実測図	76
第56图	山田屋敷遺跡H-01住居跡実測図	77
第57图	山田屋敷遺跡出土遺物実測図	78
第58图	天神遺跡A区全区	81

## 例 言

1 本書は、昭和49年2月24日から3月15日まで、長野県上田市大字富士山宇天神所在の天神遺跡、および同字山田屋敷1402番地-1所在の山田屋敷遺跡で行なった発掘調査、ならびに出土遺物に関する報告書である。

2 この調査は、当該地籍が長野県東信土地改良事務所の実施する圃場整備事業のため、現状を変更し遺跡破壊の危険が予知されたので、長野県教育委員会文化課と連絡をとりながら、上田市教育委員会が主体となって実施したものである。

3 本書の執筆は、各調査員が分担して行なった。各章・節の分担は下記のとおりである。

第I章 発掘調査の経緯と概要	原 昌孝
第II章 遺跡の立地と環境	小林 幹男
第III章 発見された遺構と遺物	遺構…川上 元 遺物…小林 幹男
第IV章 考察	小林 幹男

4 本書に使用した実測図は、住居跡実測図の縮尺については、すべて60分の1、その他の遺構の縮尺は30分の1、出土遺物実測図の縮尺は、すべて3分の1に統一してある。

実測図の調製は、遺構関係を川上 元、出土遺物関係を小林幹男が担当した。

5 本書は、便宜上下記の略号、番号を用いて記述した。

○弥生時代-Y、古墳時代と歴史時代(土師期)-H、須恵器-S 土壇-D

○遺構番号は、発見された順序に付している。

○出土遺物の整理番号は、時代・遺構番号一遺物番号(遺構別)の順に表記した。

例 Y2-1……(弥生期・第2号住居址-遺物番号1)

H1-1S……(土師期・第1号住居址-遺物番号1須恵器)

6 本書の編集は、上田市教育委員会と協議しながら、小林幹男が担当した。

7 今回の調査には、工事主体である長野県東信土地改良事務所をはじめ、調査主体である上田市教育委員会の皆さんから絶大なご協力をいただいた。また、調査は初春の厳寒の中で行なわれたが、地元の下之郷自治会の皆さんや信州大学など10大学におよぶ大学生諸君、上田高校・上田染谷丘高校・丸子実業高校などの高校生諸君、そして地元の上田市立東塩田小学校の先生方など、多くの皆さんの献身的なご努力をいただいた。

ここに報告書を執筆するにあたり、これらの多くの皆さんに、心から敬意を表し、感謝申し上げるしだいである。

昭和49年8月 小林 幹男

第1章 発掘調査の経緯と概要



調査前の遺跡全景



圃場整備の下之郷  
(紅平山山頂より)



## 1 発掘調査の経過

山田屋敷、天神岡遺跡は文化庁の作製した全国遺跡地図もしくは郷土の史料である信濃史料などにも記載がなく、上田市が独自に小林幹男上田市文化財調査委員を主任として、昭和46年度より48年度までの3ヶ年において行った埋蔵文化財分布調査により初めて確認された包蔵地である。

これは、南北約200メートル、東西約50メートルにわたる弥生後期の箱濠水式あるいは前期から晩期にかけての土師器、後期の須恵器など多くの埋蔵文化財の散布が見られる遺跡であった。

ところで塩田地区は水田耕作の適地として広範囲にわたる構造改善事業が展開されていたがおりしもこの両遺跡にかかる地区が東信土地改良事務所の手によって耕地改革されることになり、埋蔵する文化財は存亡の危機にひんすることになったのである。

しかし、この耕地の再開発を前に上田市教育委員会と東信土地改良事務所との話し合いが県教育委員会文化課の行政指導のもとで、1月下旬に行なわれ、埋蔵文化財の記録保存を主たる目的とする緊急発掘調査を実施することになった。

そして両者においてその日程、予算、調査の方法など具体的な事項について打ち合せをし、当該地域9000㎡について昭和49年3月25日までに終了させること、報告書作成は昭和50年度中に行うことなど総予算210万円で実施する内容の委託契約が2月1日結ばれた。

これをうけて上田市教育委員会ではただちに教育長を会長とするほ場整備にかかわる山田屋敷遺跡の発掘調査会を結成し、調査の準備を開始した。

まず、昭和48年2月18日調査の対象となる区域の下之郷自治会の役員の方々にお集りいただき調査の趣旨を説明するとともに、作業人夫の手配を依頼したところ環境的にも比較的文化財愛護思想に恵まれているこの地域の方々には日常より埋蔵文化財に対する関心も深く、多忙なかにもかかわらず、この手配に尽力され、関係者に強い希望を与えた。

こうして、着手の体制は次第に整い、昭和49年2月24日(日)、この遺跡の発見者である小林幹男先生を団長とする調査団を結成、その後すぐ現地天神遺跡のグリッド作りが行なわれた。

なお、グリッドは4m×4mで217設定し、その面積は3472㎡に及んだ。

しかしながら、着手の段階にはいった時点で翌25日は生憎の雪降りやむなく調査の開始は延期されることになった。

そして、3日後の2月28日(木)朝8時30分より多くの地元、協力者の方々を中心とし

て雪の溶けたドロコだらけの悪条件について発掘作業が開始され、天神遺跡から遺物や遺構の検出が早くも続出し、関係者の感興は高まりをみせた。

この後、山田屋敷遺跡についても4m×4mのグリッドが3520㎡にわたり220設けられ、作業にも着手されたが、予想に反してこの遺跡での遺物・遺構の発見は少なく、意外であった。

ところで、この調査期間中多くの見学者がこの現場を訪れたが、発掘した198グリッドから発見された古代の住居址は約50にも達し、他に土拵墓、井戸跡、築石跡などに興味を示していたようである。

こうして3月25日予定面積を大はばに上回る3168㎡について発掘を終了し調査は完了した。

なお、発見された遺物は弥生後期箱清水Ⅰ・Ⅱ期から土師期の五領・国分期、にわたるかめ・環・埴・高環・つばなどを主体としてほとんどが破片ではあったが、若干復元できるものもあった。

このようにして得られた学術的成果は、2月23日地元の下之郷公民館において報告会をもち、団長から報告されて、調査の意義をいっそう深めながら実質的なしめくりとなった次第である。(原 昌孝)

## 2 調査団の構成

調査団長	小林 幹男	日本考古学協会々員	上田市文化財調査委員
		上田染谷丘高校教諭	
調査員	川上 元	日本考古学協会々員	
		上田市博物館学芸員	
◇	岩佐今朝人	長野県考古学会々員	
		東部町祇津小学校教諭	
◇	原 昌孝	長野県考古学会々員	
		上田市文化財係長	

### 調査補助員

林 和男 (東洋大)・青木 幸男 (明治大)・林 幸彦 (国学院大)  
高村 博文 (信大)・大橋 広行 (国学院大)・川島 雅人 (国学院大)  
杉田 浩子 (国学院大)・堀内登美子 (信大)・清水久美子 (実践女大)  
若林美奈子 (学習院大)・小野沢祐子 (立正大)・小宮山いづみ (東京家政大)  
中村 明子 (日本女大)・坂口百合子 (青山学院大)・古畑 悦子 (玉川大)

協力者地元 下之郷自治会の皆さん・上田市立東塩田小学校の先生方  
高校生 長野県上田染谷丘高等学校歴史班・長野県上田高等学校郷土研究班  
長野県丸子実業高等学校地歴班

### 3 調査日誌

2月24日 (日) 晴

調査員が協議し、天神遺跡の西北端を基点とし、南北方向にイ・ロ・ハ…、東西方向に1・2・3…の記号および番号を付し、4m×4mのグリッド217(3,472㎡)を設定する。その後、結団式を行なう。

2月25日 (月)～27日 (水)

大雪のため発掘作業不能となる。

2月28日 (木) 晴

残雪の消えやらぬ泥土の中で、比較的状態のよい天神遺跡の南東部分から、発掘作業を開始する。全員泥にまみれて、夕刻までに28グリッドを発掘し、多量の遺物を発見する。

3月1日 (金) 晴

前日の作業を継続し、新たに18グリッドを発掘する。本日も遺物を多量に検出する。

3月2日 (土) 晴

前日の作業を継続する班と、発掘を終了したグリッドを精査・拡張する班に分かれて調査を行なう。検出した遺構は、弥生期12、土師期7、発掘したグリッド数27である。

3月3日 (日) 晴

グリッドの発掘班と遺構の掘り下げ実測班に分かれて、前日の作業を続行する。

3月4日 (月) 晴

前日の作業を継続する。検出した遺構は、弥生期15、土師期13となる。山田屋敷遺跡にグリッドを設定、天神遺跡の記号・番号を同一間隔で延長し、一連のものとする。

3月5日 (火) 曇後晴

Y5-13号跡、H1-8・I I-13号跡の計20遺構の発掘、清掃作業終了。Y5-12号跡の実測・写真の撮影を完了する。新たにY-16-19号跡を検出、精査を行なう。

3月6日 (水) 曇時々雨

前日の作業を継続し、Y6・7・10・14号跡とH I I-13号跡の実測・精査。

3月7日 (木) 雨

作業中止

3月8日 (金) 曇後晴

Y-4号跡、H9・10号跡の精査と各班の前日の作業継続。Y6・9-11号跡、I

H5・6・10・13号跡の調査完了。本日までの出土遺物は、段ボール箱7個になる。

3月9日（土）曇

前日の作業を継続し、同時にY16号跡、H17・18号跡の精査を行なう。

3月10日（日）雨後晴

作業を中止する。

3月11日（月）曇時々晴

天神遺跡の遺構の追求・実測と山田屋敷遺跡の発掘作業を行なう。山田屋敷遺跡では、近世の遺物を含めた各期の遺物が混在し、相当な攪拌が予想される。

3月12日（火）晴後曇

Y17-19号跡の実測とY20・21号跡、H19・20号跡の掘り下げ、および各班とも前日の作業を継続する。

3月13日（水）小雷後晴

井戸跡の追求・実測を残して、天神遺跡A地点（第5図）の全調査を終了、B地点（第6図）と山田屋敷遺跡の発掘、遺構の追求・精査に努める。

3月14日（木）晴

天神遺跡B地点の遺構（第6図）の追求と実測、一部を残して終了。山田屋敷遺跡（第7図）の遺構の追求は、かなり難行したが、掘り下げが進む。

3月15日（金）晴

天神遺跡の井戸跡とB地点、山田屋敷遺跡の遺構の追求・掘り下げ・実測などの作業を行ない、夕刻までに全作業を終了する。初春とはいいながら、厳しい寒さと泥土、あるいは春の農作業に対応しての急ピッチな耕地整備のブルドーザーの音に悩まされながら、破壊される遺跡の調査を行なうことは、わびしく重苦しい。

3月23日（土）晴

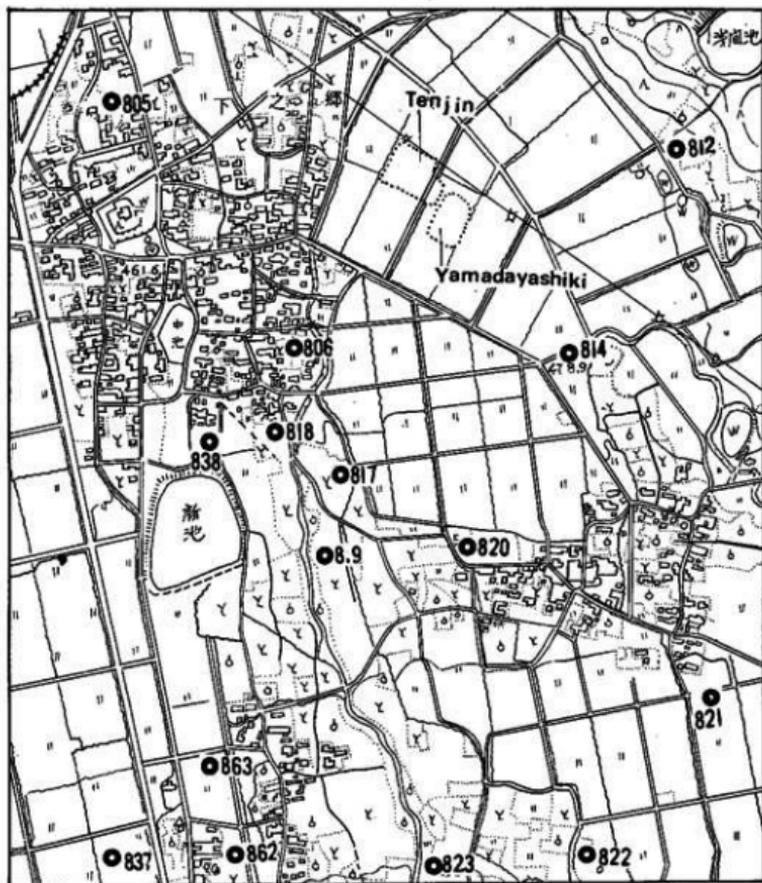
下之郷公民館において、天神・山田屋敷両遺跡の発掘調査報告会を行なう。調査に参加されたばかりでなく、小学生から老人まで、会場いっぱいの聴衆となる。地元の方々の文化財に対する深い関心を示すもので、関係者としてたいへんありがたいと思う。

昭和50年1月15日（水）晴

工事の完了した遺跡を訪れ、写真を撮影する。流れが変わり、丘が一面の水田となって、いま塩田平は、大きく姿をかえようとしているのに驚く。

註 調査日誌の内容は、報告書の紙数の関係で、要約して概要を記述した。（原 晶季）

第II章 遺跡の立地と環境



第1図 下之郷周辺の遺跡（遺跡番号は「上田市の原始・古代文化」上田市教委による）1:10,000

## 1 地理的環境 (第1・2図・図版1～2)

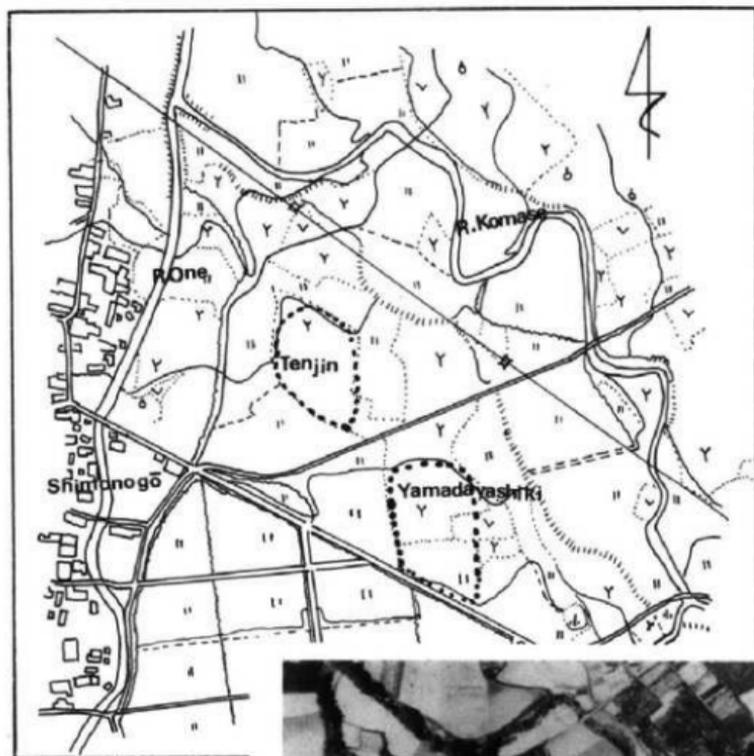
天神遺跡と山田屋敷遺跡は、塩田平の東山麓を蛇行しながら西北流する駒背川の西岸微高地上にあり、およそ南北200m、東西50mの範囲に、北北西から南南東の方向に隣接して所在する。北北西の天神遺跡は、南北に長い楕円状を呈し、上田市大字富士山宇天神地籍の南北およそ80m、東西およそ60mの範囲に、かなり濃密に分布していた。今回の調査は、この天神遺跡に主力をおき、ほぼ全面に4m×4mのグリッド217を設定し、このうち156グリッド(2,496㎡)を発掘して、およそ遺跡の全容を知ることができた。

また、山田屋敷遺跡は、上田市大字富士山宇山田屋敷1402番地-1地籍にあり、天神遺跡の南南東に、わずかな間隔をおいて、南北に長く分布し、南の水田地帯までのびていたものと思われる。今回の調査は、この遺跡の北半にあたる畑地のほぼ全域に、4m×4mのグリッドを設定して調査したが、発見された遺構は、調査区の南端部に限られ、遺跡の中心が南の水田地帯にあることを示唆していた。しかし、この区域は、調査時すでに掘削整備事業が完了し、精査・確認のできる状態になかった。この点からも、水田地帯における文化財保護、あるいは記録保存の問題点、困難さを示している。

塩田平は、この地方の代表的な穀倉地帯であり、歴史的にも、かなり古くから開かれていた。周囲には、南に富士山(1,029.4m)・独鈷山(1,266.3m)・富士嶽(1,034m)などの鋭歯状を呈する独鈷山脈が、荒々しい壮年期の山脈を連ね、西には夫神嶽(1,250m)・女神嶽(926m)・大明神嶽(1,232.2m)などの西部山地が、ピラミッド状に、あるいは丘陵状に続いている。そして、東には、松茸山で知られる紅平山や東山の丘陵性の小牧山塊が、上田盆地の中央にのびる岬のようにそびえている。このように周囲を山脈に囲まれた塩田平は、全国的にも知られた寡雨地帯で、<sup>(2)</sup>大小100ほどの溜池がつくられている。

しかし、塩田平には、多くの流れがあって、大地を潤し、文化を育んできた。大明神嶽と富士山に発して、塩田平の中央を東北流する産川を軸とし、東山麓には尾根川、西山麓には湯川、その下流の縫合線を東には尻無川、西には追開沢川が流れ、更に上流にも大小の流れが北流し、あるいは東北流し、あるいは西北流してこれらに合流している。

両遺跡のある地籍は、塩田平の東端部に位置し、独鈷の山裾に発して北流する尾根川と、東山麓を蛇行する駒瀬川の合流点に形成された複合扇状地で、三角形の微高地となっている。微地形は、西北方の合流点に向って、およそ0.5°ほど緩傾斜し、標高は北端が474.22m、南端が476.18mである。また、東方の駒瀬川に向っては、およそ2



第 2 図 周辺の地形と航空写真  
1 : 5,000

の傾斜があり、先端部は段丘崖状に段落して、低湿な泥濘原に続いている。このあたりの土壌は、砂礫質の壤土で、尾根川や駒瀬川の河床礫が、多く壤土に混入して、産川系の砂質壤土、湯川系の強粘土質の土壌と対比されている。南方の地形は、緩い上り傾斜面となり、近くを県道塩田仁古田線と別所丸子線を短絡する道路が東西に走って、依田窪に通じている。そして、山田屋敷遺跡の南限は、およそこの道路のあたりまでのびていたものと推考される。今回調査した区域は、周囲よりやや高く、桑畑に利用されていたが、現在は圃場整備事業によって大きく削られ、ほとんど以前の面影をとどめていない。

## 2 歴 史 的 環 境 (第1図)

塩田平の地形は、段丘が削られ、窪地を埋め、歴史を映した流れまでが、いまや大きく姿を変ようとしている。

(3)  
塩田平は、「信州の鎌倉」などとも呼ばれ、古いお寺や社が多く、全国的にも知られた堂塔や仏像、年中行事などが数多く残っている。このような文化遺産は、歴史時代にとどまらない。先土器時代の遺跡は、今のところ発見されていないが、縄文文化は、湯川上流の塩水(茅山期)と比叡樹(繊維土器)遺跡の早期文化にはじまり、前期には湯川流域の北浦(南大原期)や産川流域の神戸(有尾期)遺跡など、大きな広がりを見せている。そして、中期には、塩田平のほぼ全域にわたって、縄文文化の華を開かせるが、遺跡数でも、縄文全時期の遺跡数の約半数におよんでいる。富士山地籍でも、縄文文化は、この中期初頭ごろにはじまり、尾根川と雨吹川に囲まれた郷土田・下大郷・中村・三門寺付近に中心があり、縄文中期初頭型式から勝坂式・加曾利E式、そして後期の加曾利B式文化へと受継がれている。しかし、後・晩期の縄文文化の様相は、十分明らかにされていない。

むしろ塩田平で特筆されるのは、これに続く弥生期の文化であろう。昭和46年からの分布調査で確認された市内の弥生期の遺跡数は、183箇所を数えるが、塩田平には、その約半数の遺跡(91箇所)が分布している。塩田平の弥生文化は、市内の神川流域から(7)園分寺周辺を経て、信大繊維学部敷地におよぶ地域や、佐久の岩村田付近と並んで、東信地方の一大中心地をなしている。塩田平における弥生期の遺跡分布は、大部分が産川の流域に集中し、尾根川・雨吹川・駒瀬川の中流地域にも、かなりの遺跡が分布している。

古墳時代から歴史時代にわたる遺跡は、一層その数を増しながら、ほとんどが弥生期の遺跡に複合し、あるいはその周辺に点在している。また、これらの集落の経済的・文化的発達を基盤として形成された政治権力の象徴たる古墳は、南西面する小牧山塊の東山を中(8)心に、東信地方でも最大級の古墳群がつくられている。

天神遺跡と山田屋敷遺跡周辺の遺跡は、尾根川流域の一本木（806）・西又（817）・東村（818）・下大吹（819）・中池東（838）の5遺跡が、いずれも後・晩期の土師器と後期の須恵器を出土し、尾根川と雨吹川の中間地点にある源方遺跡（820）からは、縄文期の打製石斧、弥生後期の箱清水式、後期の土師・須恵器が検出されている。また、駒瀬川流域の中雲雀（812）と下川原（814）の2遺跡からは、後期の土師・須恵器が採掘されている。しかし、その規模は小さく、天神遺跡や山田屋敷遺跡とともに、一時期数戸程度の小集落が、比較的近い距離に点在していたものと思われる。

塩田平の遺跡は、このように各時期の遺構が複合して検出される場合が多く、河川に沿った段丘に、あるいは自然堤防や複合扇状地の微高地上に、かなり稠密に分布している。そして、好しい現象ではないが、平坦地の圃場整備事業に伴う緊急発掘調査等によって、<sup>19)</sup>しだいにその発展の様相が解明されてきた。しかし、古代史上解明されなければならない塩田平と他田氏との関係、生嶋足鳴神社の総合調査など、今後に残された課題も多い。

註1 竜野常重 「上小地方の土壌の実態（塩田平地区）」上田・小県誌第四巻  
昭和38年 上田・小県誌刊行会

註2 小林一忠 「塩田平の気象」註1に同じ

註3 塩田町 「信州の鎌倉」塩田」昭和42年 塩田町  
南原公平 「信州のまほろば 塩田平とその周辺」昭和47年 令文社

註4 信濃毎日新聞 「塩田平の美」昭和49年 信濃毎日新聞社

註5 箱山寅太郎 「まつり」昭和46年 上田市立博物館

註6 小林幹男 「上田市の原始・古代文化」昭和49年 上田市教育委員会

註7 五十嵐幹雄 「信州大学繊維学部保存の弥生式土器」信濃Ⅲ 2-12  
小林幹男・川上 元 「長野県上田市信大繊維学部敷地遺跡  
調査概報」考古学会誌9 昭和45年 長野県考古学会

註8 小林幹男 「他田塚古墳発掘調査報告書」昭和48年 上田市教育委員会

註9 諏訪畑遺跡（昭30）、榊木遺跡（昭45）、西光坊遺跡・向田Ⅱ遺跡・石原遺跡・内堀遺跡、この年から市内全域の埋蔵文化財分布調査に着手（以上昭和46年）、他田塚古墳（昭47年）、天神遺跡・山田屋敷遺跡・皇子塚古墳（昭49年）などの調査が行なわれた。このうち、榊木・西光坊・向田Ⅱ・石原・天神・山田屋敷の調査は、緊急発掘である。（小林幹男）

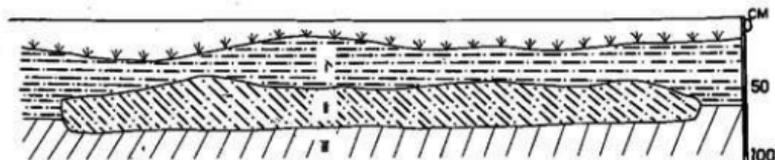
### 第Ⅲ章 発見された遺構と遺物



第3図 天神遺跡全景と器台付甕

## 1 天神遺跡

天神遺跡は、上田市大字富士山字天神地籍に所在し、弥生後期の箱清水期から土師晩期の国分期にわたる集落址である。遺構は、尾根川東岸の微高地上に帯状に分布し、範囲は比較的狭く、一時期数戸程度の小集落が分布したものと考えられる。尾根川沿いの地層は、茶褐色を呈する埴壤土の表土層の下層に、厚い砂礫の推積層を認めるが、遺跡面は、25 cm～50 cmの表土層の下層に、30 cm前後の黒褐色を呈する砂質の壤土層が続き、さらにその下層、あるいは直接表土層の下層に、茶褐色の粘質の壤土層が認められる（第4図）。しかし遺跡面の末端には、川沿いと同様に、表土層の下層に砂礫層があり、部分的に遺跡面にも、砂礫層が流入している。これは遺跡面が、氾濫原の中州に、自然堤防状に形成された微高地であることを示すものであろう。



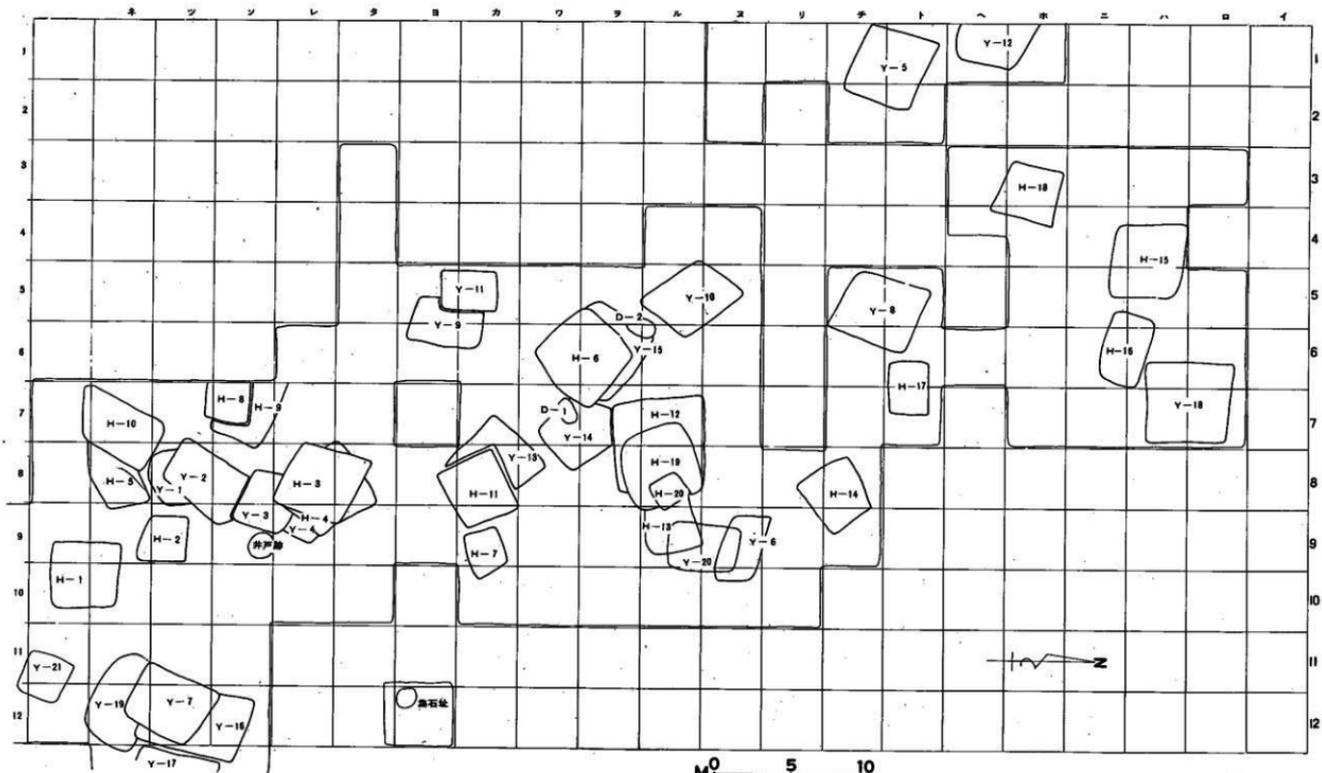
第4図 天神遺跡ツ13東壁断面図

- I層 茶褐色埴壤土層
- II層 黒褐色壤土層
- III層 茶褐色粘質壤土層

今回の発掘調査によって確認された遺構をみると、天神遺跡では、弥生後期の住居跡が23、土師期の住居跡が25、その他井戸跡1、土壇墓2、築石遺構1であった（第5・6図）。また、山田屋敷遺跡では、弥生期の住居跡1、土師期の住居跡2と前者に比してかなり少なかった（第7図）。

天神遺跡の住居跡群は、狭い地域に集中して検出され、かなりの重複がみられた点で、この遺跡の性格をあらわしているものと思われる。弥生後期の住居跡のプランは、隅丸の長方形が多いのに対して、土師期のそれは、方形に近いものをその特徴としていた。

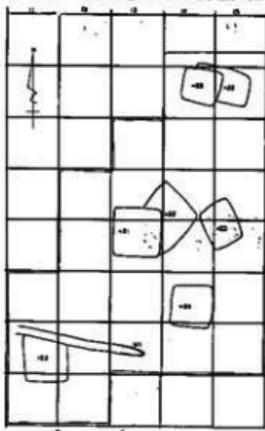
また、この埴田平における弥生期から土師期にかけての従来の調査所見では、柱穴と思われるピットが、内部からの発見はほとんどなかった。今回の発掘調査では、内部からも柱穴と思われるピットが確認された。遺構の複合状態から推定すれば、弥生後期箱清水I期のものが、他地域と同様な住居跡の構築法、すなわち柱穴を住居跡内部にもつ方法をとる、これに続く時期のものが、住居跡内部と外縁の両方に柱穴をつくり（例第8・10・



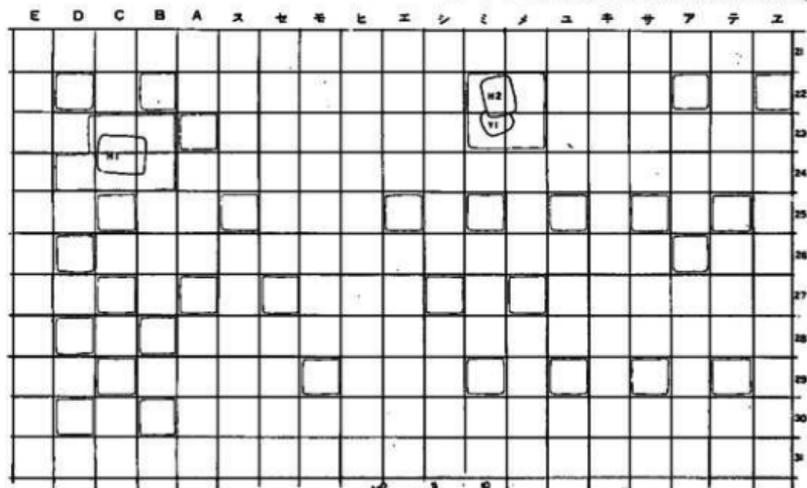
第5図 天神遺跡の住居跡群(1) (1:300)

18号住居跡)、さらに時期が下ると、古墳時代にみられる外縁に柱穴をつくる方法(例第12・13号住居跡)へと変化していったようである。

山田屋敷遺跡に関しては、表探の結果では、むしろ天神遺跡に比して、遺物の出土量が多かったのですが、われわれはこの遺跡に期待をかけたのであったが、いよいよ発掘されると、それとは逆の現象を呈した。このことは、天神遺跡の方がむしろプライマリーな層位を残していたといえる(第4図)。いずれにしても、両遺跡は隣接した地域であるので、山田屋敷遺跡では、その範囲が前述のとおり、南方の水田地帯に中心をもち、調査がゆきとどかなかったこともいえない。(川上 元・小林幹男)



第6図 天神遺跡の住居跡群(2) (1:500)



第7図 山田屋敷遺跡調査グリッド (1:600)

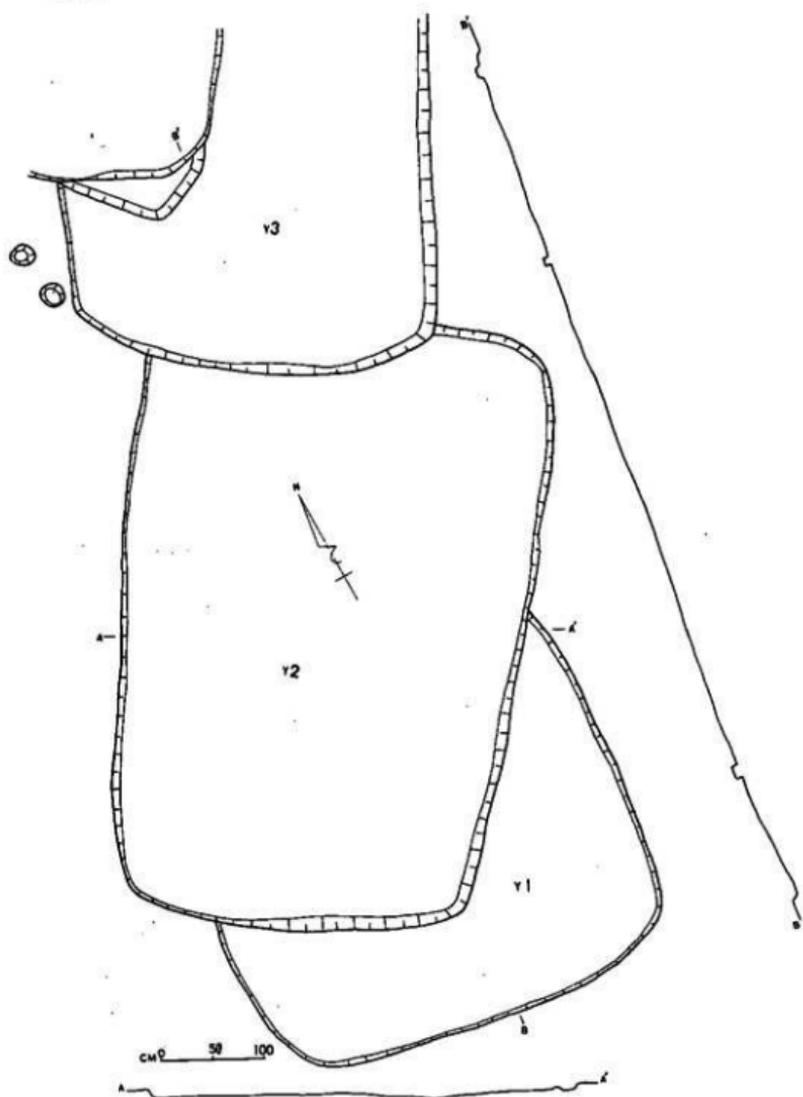
## A 弥生時代の遺構と遺物

### (1) Y第1号住居跡

#### 1 遺構 (第8図)

グリッド・ツー-8に検出された本住居跡は、その北側大半をY2号住居跡によって切られているため、完全な平面プランを確認するに至らなかった。しかし、南側部分のわずか

に残された遺構から推定すると、そのプランは、東西4.2m、南北約5.0mぐらいあり、南北に長い隅丸長方形を呈していたものと思われる。(川上 元)



第8図 天神遺跡Y-1・2・3号住居跡実測図(1:60)

## 2 出土遺物

遺物は、ほとんど燻滅して、検出されたのは、弥生後期箱清水Ⅰ式の甕・壺・高環の小破片のみで、器形が判別できるものはなかった。甕形土器の破片は、茶褐色を呈し、櫛描波状文と頸部に粟状文が施文され、櫛目は比較的細かい。甕形土器片と高環形土器片は、いずれも丹彩があり、焼質はもろく、器面がヘラ磨き調整されている。(小林幹男)

### (2) Y 第2号住居跡

#### 1 遺構 (第8図)

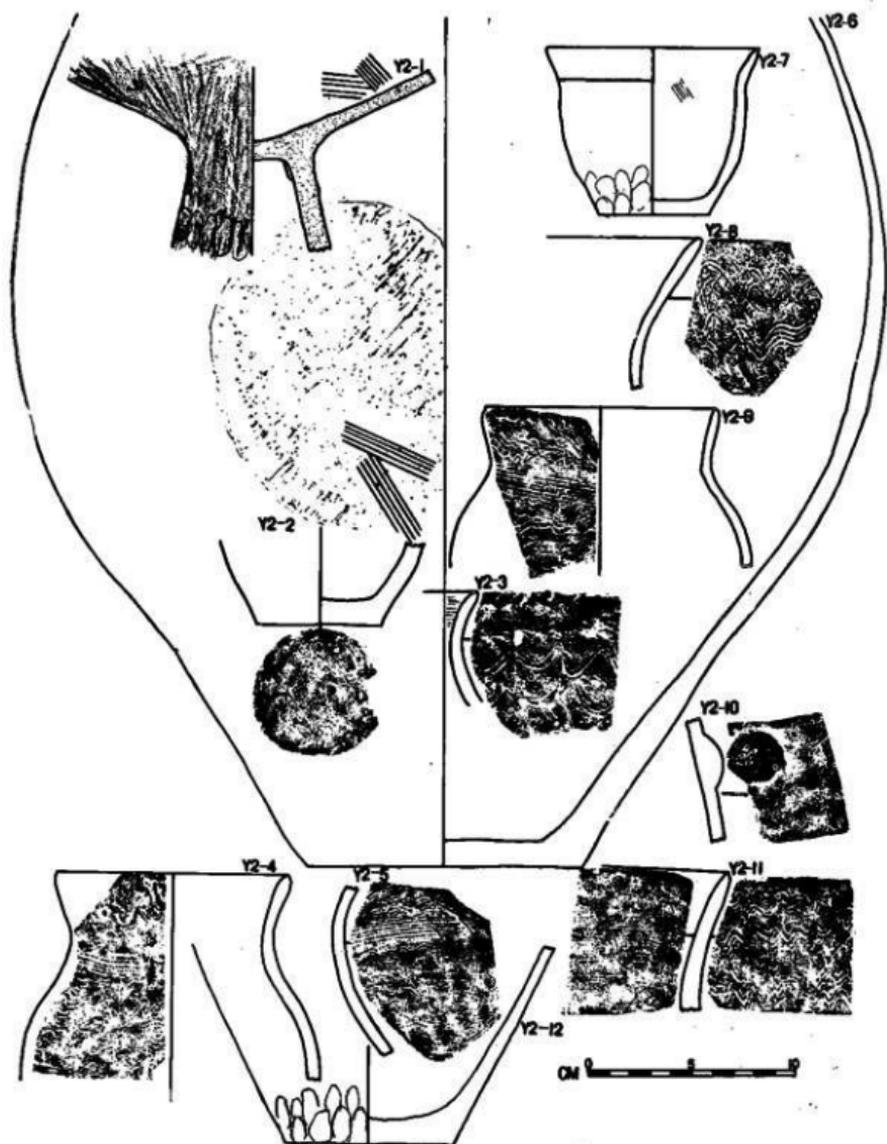
Y-1号住居跡を切って構築した住居跡である。プランのほぼ全容をみることができるが、北壁の3分の2をY-3号住居跡によって切断されている。南北が5.9m、東西が3.9mの隅丸長方形を呈している。(川上 元)

#### 2 出土遺物 (第9図・図版10)

甕形土器が主体をなし、若干の高環・甕形土器の破片を伴出している。甕形土器の器形には、頸部のカーブが弱くなだらかなもの(以下Ⅰ型とする-Y 2-3・4・5・8・)と、やや強く「く」の字形を呈するもの(以下Ⅱ型とする-Y 2-9)、そして、きわめて弱くわずかにくびれるもの(以下Ⅲ型とする-Y 2-7)の3類型があり、さらにⅠの類型には、口辺部の長いもの(1型-以下同じ)と短いもの(2型)がある。底部の器形は、完形のものがないので、口辺・胴部との関係を把握し難いが、下胴の張るもの(a型-Y 2-2・7)と直斜状のもの(b型-Y 2-12)の2類型があり、さらに底部の整形にヘラ削りと粗いハケ状の手法の2類型を認めることができる。器面はいずれも茶褐色を呈し、頸部に櫛描波状文のあるもの(A)と、口辺部から胴部にかけて、一連の櫛描波状文を描くもの(B)、さらにBの口縁に、ヘラ状の工具で「きざみ」をつけたもの(B'-Y 2-3)がある。器面の整形は、ヘラ削りが多く、さらにその上をハケ状のもので仕上げ、櫛描きで右下がり、あるいは右上がりで施文している。また、内面は概して明るい茶褐色を呈し、櫛状の工具で右下がり、あるいは水平に調整した痕跡のあるものと、ないものの2手法が知られる。

甕形土器は、口辺部を欠くが、推定器高60cm前後(現器高40.6cm)、最大幅(上胴部)42cmを計測するきわめて大型のもの(Y 2-6)と、いずれも破片であるが、通常の規模のものが、後者には胴部にボタン状の粘土円板をつけるものがある。(Y 2-10)。器面はいずれも明るくつやのある淡橙色を呈し、ヘラ磨き調整されている。また、Y 2-6の内面は、櫛目で削り調整している。

高環形土器は、ほとんど小破片で、胎土に細砂が混り、およそ器形が知られるのは、1点のみである(Y 2-1)。しかし、これも環部の口辺と脚部の裾部を欠き、全形は判然



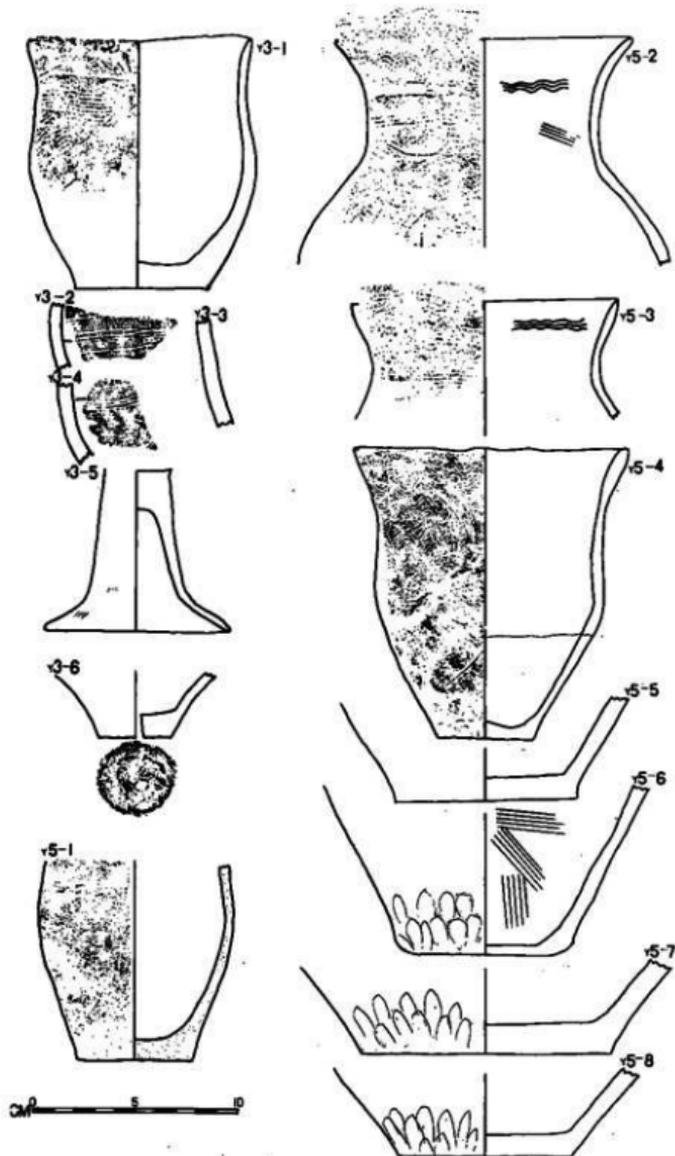
第9図 天神遺跡Y-2号住居跡出土遺物実測図(1:3)

としない。器面は丹彩があり、ヘラ調整され、内面は暗茶褐色で、櫛目調整によっている。

[2]

この住居跡から検出された土器の所見は、先に同じ塩田平の上本郷西光坊遺跡の第4号

住居跡で検出した土器群と類似し、時期的にも同期のものと推定してよからう。(小林幹男)



第10図 天神遺跡 Y-3・5号住居跡出土土物実測図 (1:3)

### (3) Y 第3号住居跡

#### 1 遺構 (第8・35図)

本住居跡は、南側でY 2号住居跡を切り、北側では、Y 4号住居跡を切っている。さらに北西隅では、H 3号住居跡によって切断されているため、かなり複雑な前後関係を示している。

本住居跡の平面プランは、一辺3.6mの隅丸方形を呈するものと思われ、前述のY 1、Y 2号住居跡とは異なっていた。また、住居跡内部より、完形の変形土器なども検出されている。(川上 元)

#### 2 出土遺物 (第10図)

甕・壺・高坏瓶形の4器形の土器を出土しているが、ある程度器形が把握できるのは、甕・高坏の脚部・瓶の底部のみである。

変形土器のうち、Y 3-1は完形品で、A-III 2a型に属し、下胴は無文でへら削りが行なわれ、口縁は粗製で波状を呈している。器面は茶褐色で、粗い梅揃波状文がやや右上がりに施文され、内面もへら調整が行なわれている。

壺形土器は、いずれも小破片で、器形は判然としませんが、頸部に幅広い梅揃波状文が施文され、器面に丹彩がある。(Y 3-2~4)。

高坏形土器の脚部は、土師器の器形に似るが、焼成・出土地点、層位からみて、この住居跡に伴出したものとみてよからう。胴部は直立して、暗茶褐色を呈し、底部で広く開き、底部径：脚部高さの比は、1：3である(Y 3-5)。器面はハケ目で調整し、胎土は粗く、細砂を含んでいる。

瓶形土器の底部は、茶褐色を呈し、下胴が張り、上がり底気味で、径が3.5cm、中央よりややはずれて、径5mmほどの穿孔がある(Y 3-6)。この住居跡は、弥生後期の箱清水Ⅱ式の終末に比定されるものと推考する。(小林幹男)

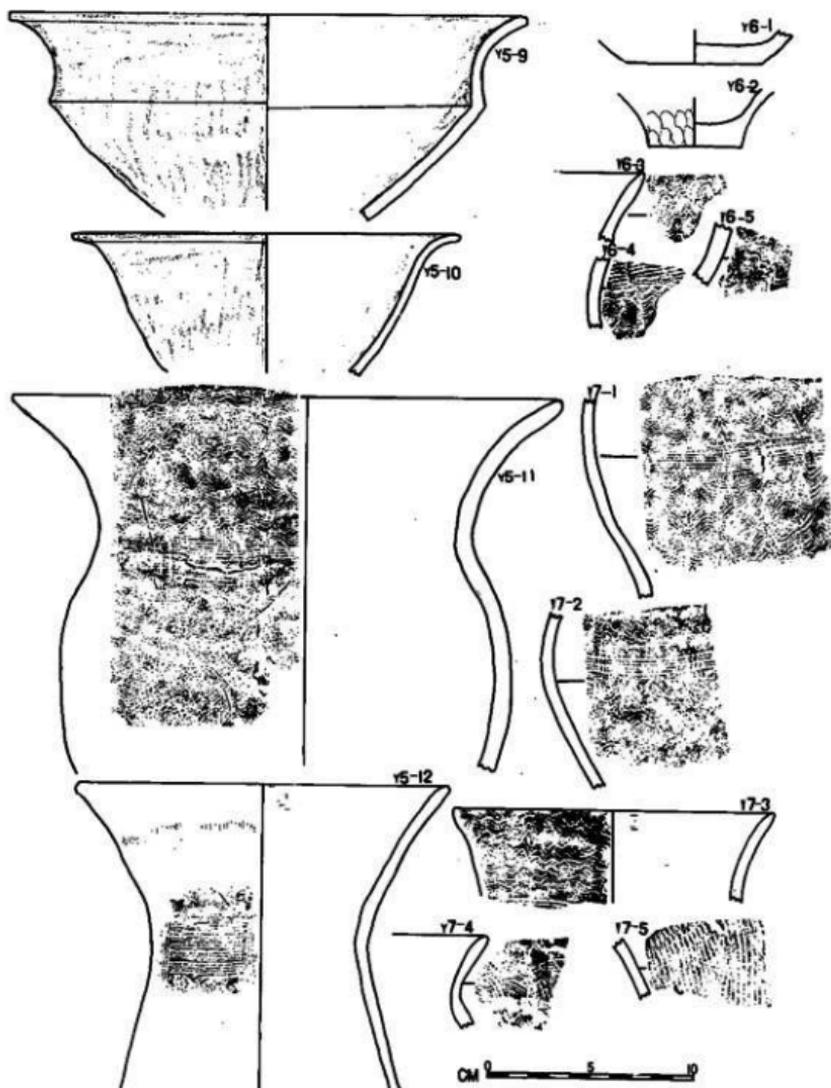
### (4) Y 第4号住居跡

#### 1 遺構 (第35図)

本住居跡は、Y 3号住居跡によって、南側部分を切られ、さらにH 3号住居跡が、ほぼ直上に構築されたため、遺構の主要部分が不明となってしまった。したがって、平面プランをとらえるにはかなりむずかしかった。しかし、わずかに残された部分から推定すると、Y 3号跡とその平面プランが似ていると思われる。(川上 元)

#### 2 出土遺物

検出された遺物は、いずれも小破片で、器形を明らかにできるものはない。しかし、わずかな小破片から推定すれば、Y 3号住居跡と時期的に大差のない弥生後期箱清水Ⅱ式の住居跡と考える。(小林幹男)



第11图 天神遺跡Y-5・6・7号住居跡出土遺物実測図(1:3)

(5) Y第5号住居跡

1 遺構 (第12図・図版4)

グリッド・トー1、チー1の周辺に検出された遺構で、東西5.3m、南北5.0mを有する隅丸方形のプランです。 。

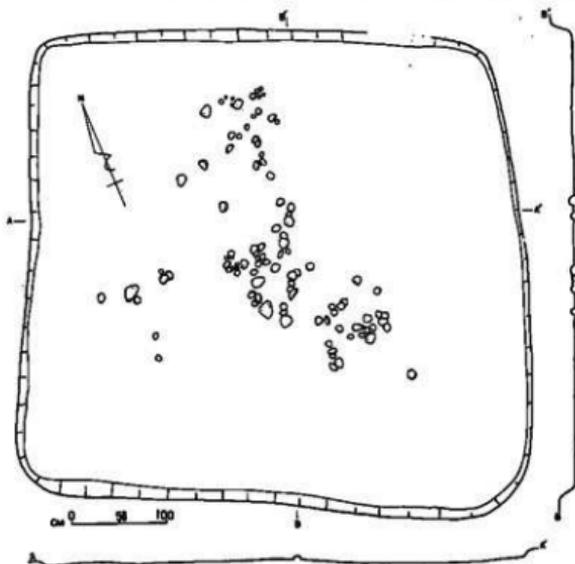
住居跡には、多量の礫群が混入しており、遺物もこの中に含まれていた。 なお遺物の出土量は、他と比較してかなり多いといえる。 (川上 元)

## 2 出土遺物 (第10・11図・図版4・5)

検出された遺物は、壺・甕・高坏の3器形である。完形できるものは少ないが、住居跡内のやや南寄りを中心にして、相当量の遺物が検出された。

壺形土器は口唇が丸味をおび、頸部でなだらかに「く」の字形にカーブし、肩の張りがなく、無花果形状を呈している(Y5-9)。完形できるものがないので、下胴の器形は明らかでないが、最大幅は下腹部にあり、ヘラ調整の後に丹彩を施し、頸部に梅描簾状文を描いている。また、口辺部にはハケ目による調整痕も認められ、内面を梅目で整形しているのがある。

甕形土器は、口辺部から頸部がⅠ-1型とⅢ-2型の他に、大きく漏斗状に開き、胴部が小肥りに張るやや大型のものがある。器面の色調は、茶褐色あるいは暗茶褐色を呈し、施文はA(Y5-2・3・11)とB(Y5-1・4)の2手法があり、Bの器形はⅢ-



第12図 天神遺跡Y-5号住居跡実測図(1:60)

2型である。これは尾崎式土器の手法を受け継ぐものであろう。

高坏形土器は、いずれも脚部を欠いているが、坏部の器形に、口辺部が「く」の字形に大きく外反りし、肩部で稜角をつくって、下胴に向ってなだらかに縮約するものと（Y 5-9）、外反り口縁からなだらかなカーブを描いて下胴に縮約するものの2類型があり、いずれも内・外面に丹彩を施している。

上述の所見を総合すれば、この住居跡の時期は、弥生後期の箱清水I 式期と考えられる。

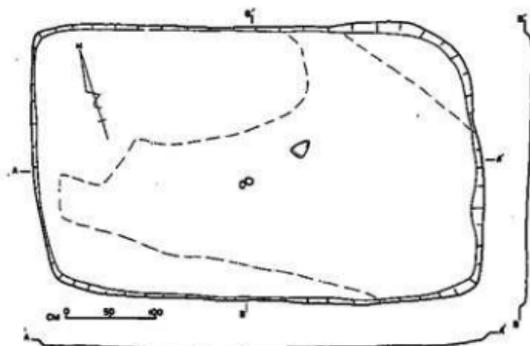
(6) Y 第6号住居跡

(小林幹男)

1 遺構 (第13図・29図)

グリッド・ヌー9を中心とした部分に検出された本住居跡は、南壁中央部でY 20号跡を切っている。プランは、東西5.0m、南北3.1mの隅丸長方形である。

住居跡内部からは、南東から南西にかけて、多量の礫群の散布がみられた。(川上 元)



第13図 天神遺跡Y-6号住居跡実測図(1:60)

2 出土遺物

(第11図)

出土遺物の量は少なく、いずれも小破片である。器形はA I 2型、あるいはBの襷形土器片で、弥生後期の箱清水II 式期末と考えられる。

(小林幹男)

(7) Y 7第7号住居跡

1 遺構 (第14図)

グリッド・ツー12を中心とした周辺に検出された住居跡で、後述Y 16・19号住居跡を切って構築されたものである。

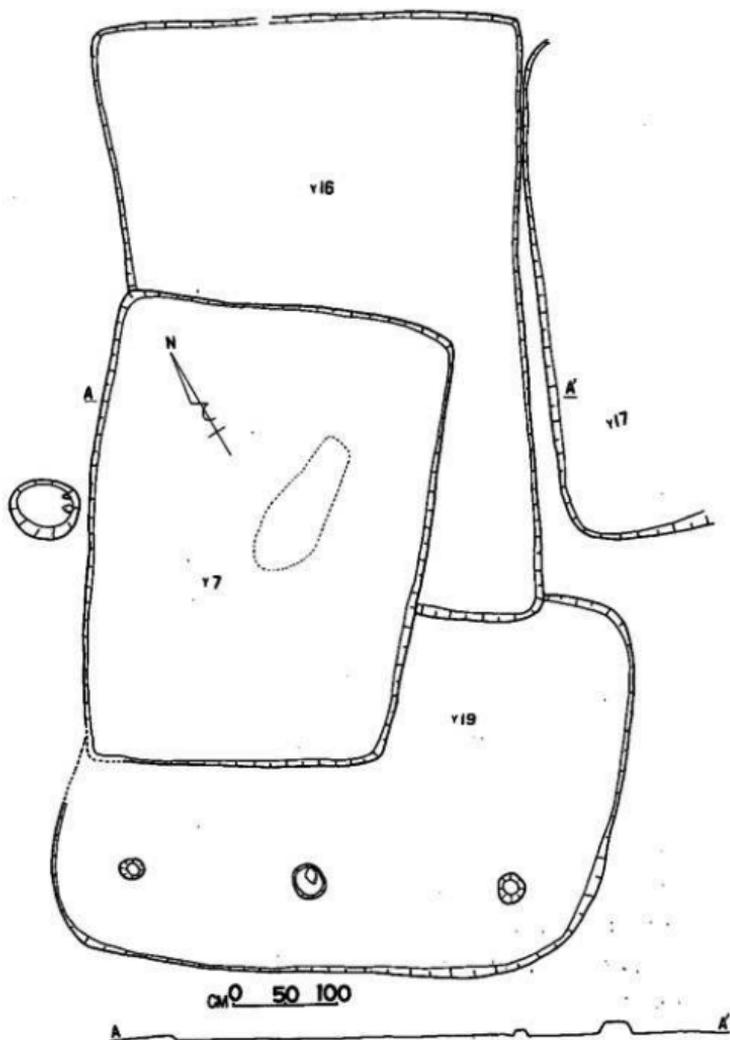
平面プランは、東西4.8m、南北3.5mをもつ隅丸長方形で、中央部に焼土(炉址)が確認された。

2 出土遺物 (第11図)

およそ器形の推考できるのは、襷形土器の破片で、いずれもA I-1a、あるいはb 型に

属するものである。焼質は硬く節描波状文が右上がり、あるいはおよそ水平に施文されている。また、少数ではあるが、綾杉状に櫛状工具で沈線文を施した弥生後期終末期の土器片が認められた。

(小林幹男)



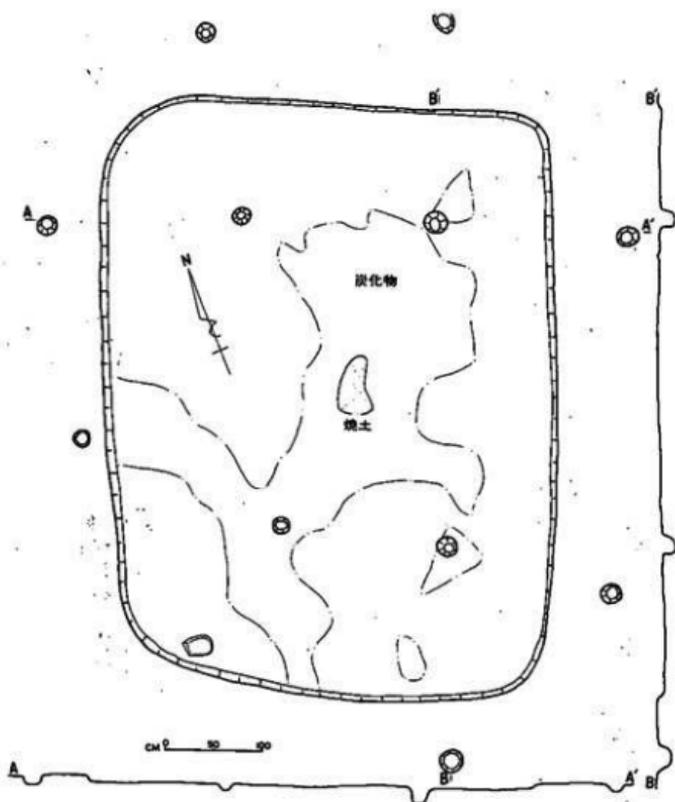
第14図 天神遺跡 Y-7・16・17・19号住居跡実測図 (1:60)

(8) Y第8号住居跡

1 遺構 (第15図・図版6)

グリッド・トー5、チー5周辺に検出した遺構である。本住居跡は、一面に炭化物が覆い、明らかに火災にあったことをあらわしている。

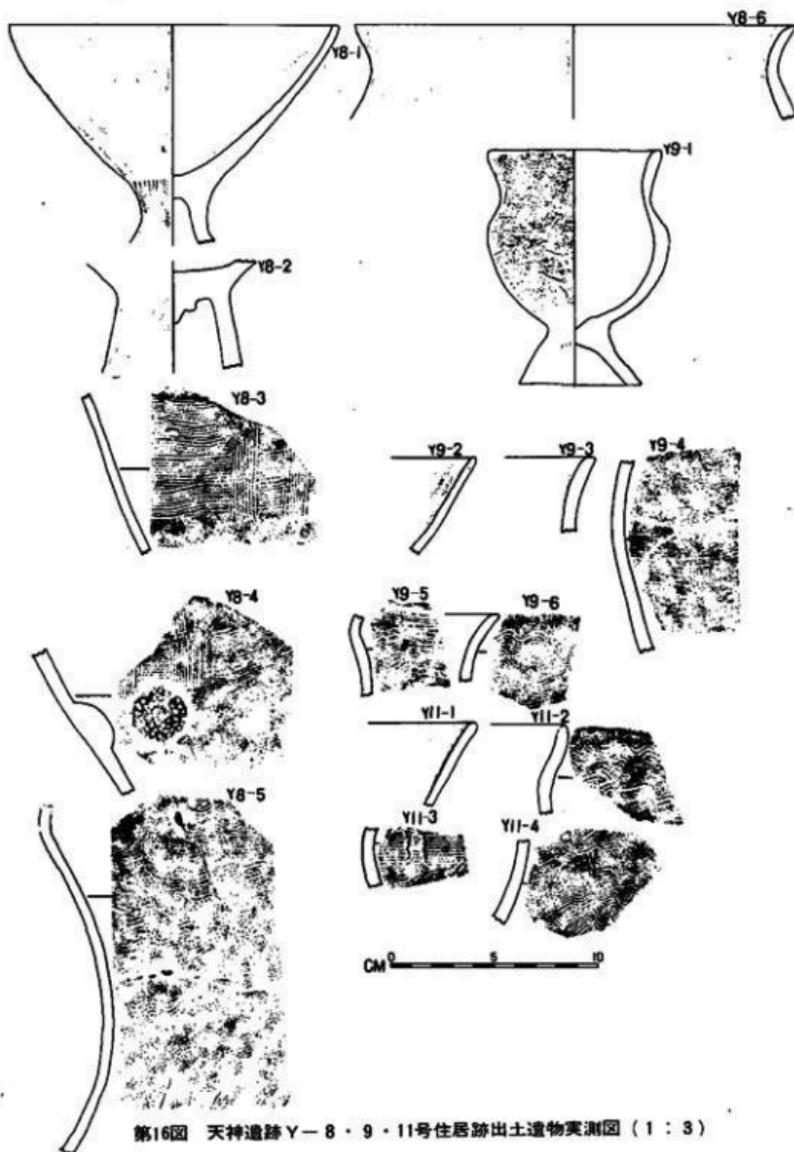
プランは東西4.75m、南北6.1mの隅丸長方形で、柱穴と思われるピットも内部に4か所、外縁に住居をとりまいて7か所発見された。内部のものは概して浅く、小さいピットであった。



第15図 天神遺跡Y-8号住居跡実測図(1:60)

2 出土遺物 (第16図・図版6)

検出された遺物は、釜・甕・高坏形土器などで、完形品はないが、およそ器形を知ることができる。



第16図 天神遺跡Y-8・9・11号住居跡出土遺物実測図(1:3)

壺形土器は、いずれも破片で、頸部に幅広く櫛描簾状文が施文され、丹彩があり、焼質もよく、ボタン状の粘土円板をつけているものがある。(Y 8-4)。

甕形土器は、BI-2型が多く、器面をハケ目で調整した後に、水平あるいは右下がり(3)に櫛描波状文を施文している。また、信大繊維学部敷地から出土したものと同様に、丹彩の施されたものがある。(Y-86)。

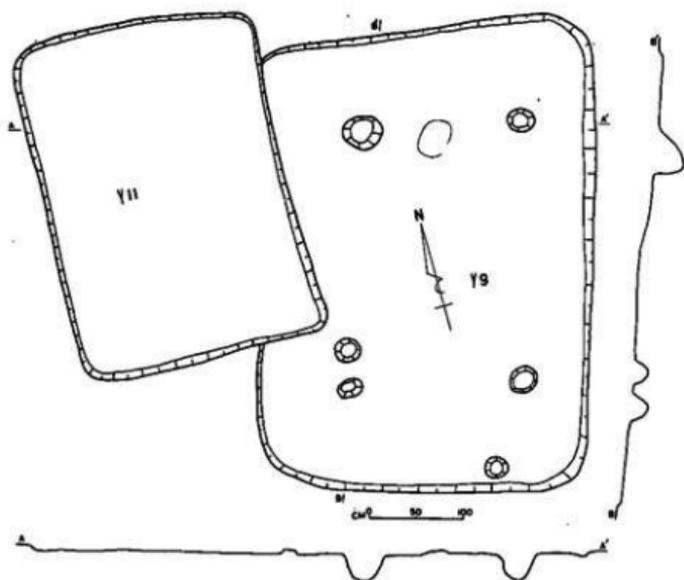
高環形土器は、口辺部のわずかに内弯するものと外反り口縁があり、前者は丸味のあるカーブを描いて小さな脚部に続き、後者は肩部で稜角をつくって、大型の脚部に接合されている。

これらの器形は、いずれも弥生後期箱濠水Ⅱ式の終末期に比定される土器の特徴といえる。(小林幹男)

(9) Y 第9号住居跡

### 1 遺構 (第17図)

東西3.5m。南北5.0mをもつ隅丸長方形のプランである。西壁の3分の2ほどをY 11号住居跡によって切られており不明である。住居跡内には、一様に焼材と思われる



第17図 天神遺跡Y-9・11号住居跡実測図(1:60)

炭化物がみわれた。

(川上 元)

## 2 出土遺物 (第16図)

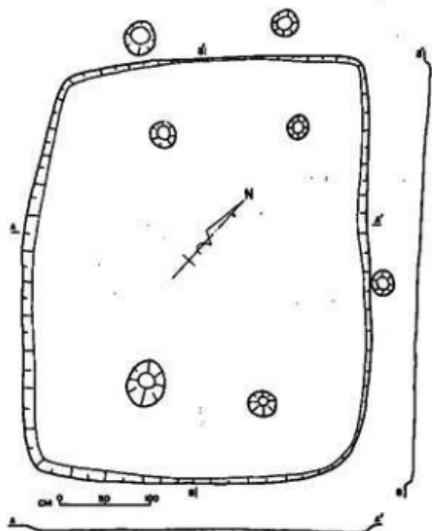
検出された遺物は、壺・甕・台付甕・高環形土器などで、台付甕形土器(Y9-1・第3図・図版13)は、ほぼ完形品である。

壺・甕・高環形土器は、いずれも小破片で、器形は判然としないが、弥生後期箱溝水Ⅱ式の終末期に比定されるものである。

台付甕形土器は、唇状の厚い外反り口縁から頸部で緩く「く」の字形にくびれ、胴部には張りがあり、甕の底部で強く縮約し、断面梯形の小さな器台に接合している。器面は茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに悪く、梅播波状文の施文は摩耗して、拓影も判然としない。

器形は小型で、口径8.4cm、器高11.3cm、器台底部径5.9cmである。

(小林幹男)



第18図 天神遺跡Y-10号住居跡実測図(1:60)

## (10) Y第10号住居跡

### 1 遺構 (第18図・図版7)

グリッド・ルー5およびヌー5にわたる住居跡で、長径4.65m、短径3.8mを計る隅丸長方形プランである。内部に4か所と外側周縁に3か所の柱穴と思われるピットが確認された。また、南側部分に焼材と思われる炭化物が散布しているのが認められた。

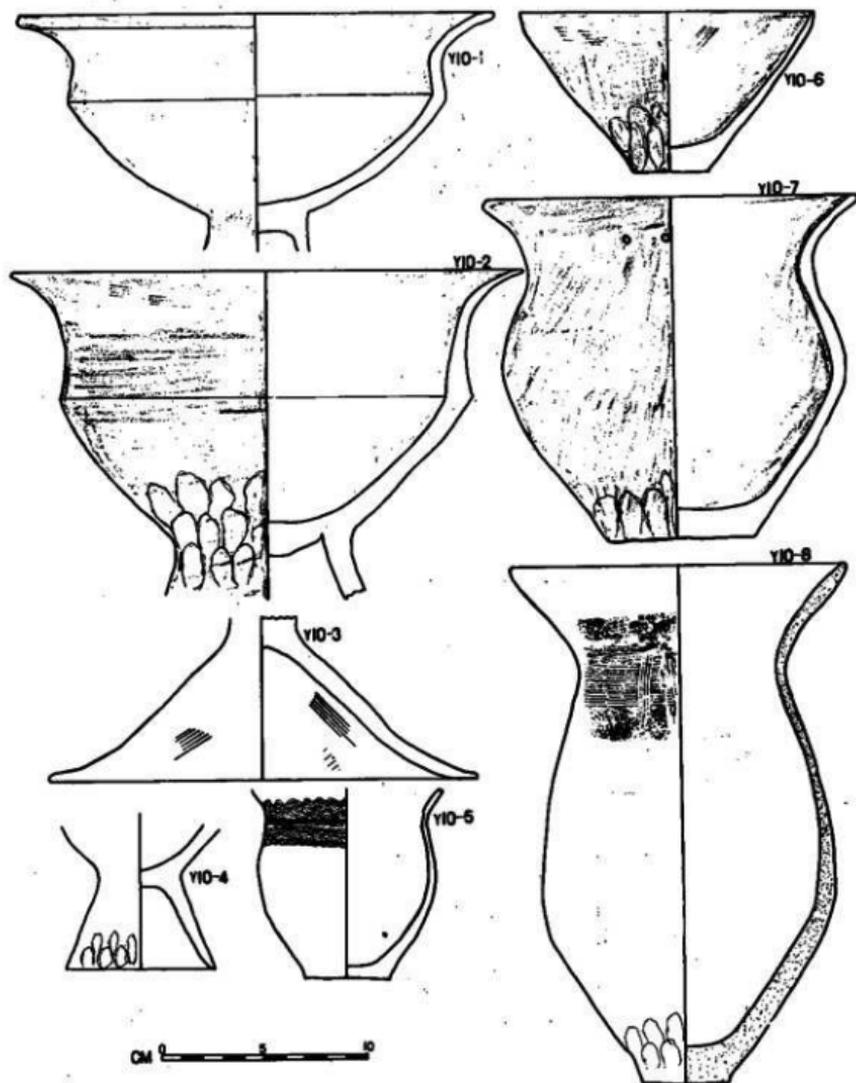
(川上 元)

### 2 出土遺物 (第19・20図)

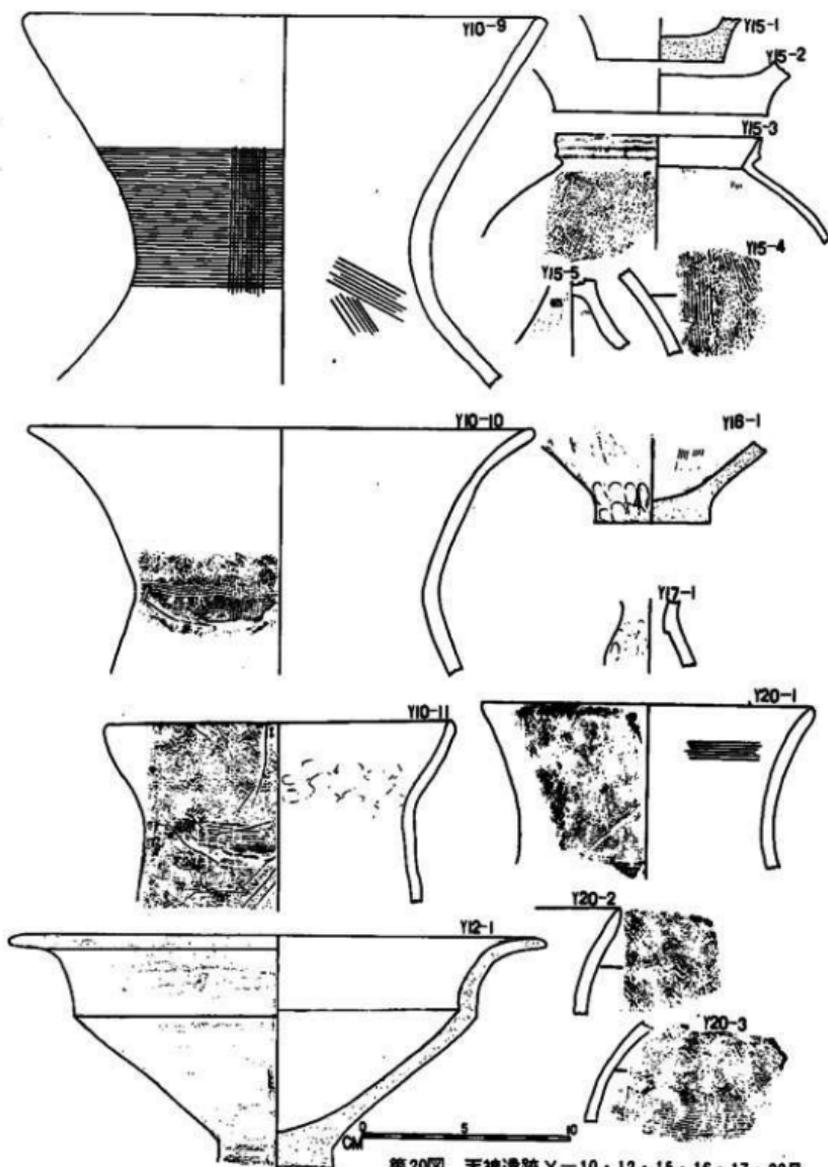
この住居跡は、天神遺跡の弥生期住居跡23戸のうち、最も豊富な遺物を出土した遺構であり、床面の炭化物の所見から、Y8・9号住居跡とともに、同じ火災で焼失した同期

のものと推考される。

検出された遺物は、壺・甕・台付甕の器台部・高坏・鉢形土器などで、器形もかなりバ



第19図 天神遺跡 Y-10号住居跡出土遺物実測図 (1:60)



第20図 天神遺跡 Y-10・12・15・16・17・20号  
住居跡出土遺物実測図 (1:3)

ラエティーに富んでいる。

壺形土器の器形は、口径が大きく、頸部の緊約度がやや大きいものと小さいもの、肩部

に張りがある、丸味のある胴部をつくるものと無花果形状に下胴へ続くものなどに分類できる。いずれもつやのある淡茶褐色を呈し、頸部に幅の広い櫛描篋状文を施している。

甕形土器は、A I-1 型と無文丹彩の II 1 a 型などがあり、後者はまた、口縁の近くに 2 孔一対の緊迫孔を穿っている。

台付甕形土器は、器台と甕の底部のみであるが、Y-91 (第16図) よりも、底部径：器高の比が大きい断面梯形状である。

高坏形土器は、弓なりの外反り口縁から肩部で稜角をつくり、下胴に向って縮約するが、やや立ち上がりの大きいもの(深いもの・Y10-2)と浅いもの(Y10-1)の2器形がある。脚部はいずれも失われているが、前者の接合部は太く、後者は細い。これは甕の安定度に対する考慮からつくられた器形であろう。Y10-3は脚部のみであるが、器

高は底部径に対して小さく(器高1：底部径2.65)ラップ状に大きく開いて、末端がやや反っている。この器

形は、市川市の殿台遺跡などにみられる前野町式土器と類似している。

鉢形土器は(Y10-6)

は、器高：口径の比が1：1.83につくられ、口径の割合に深い逆梯形状を呈し、口縁がわずかに内弯して、ほとんど胴部は直斜状にのびて小さな底部に絞れている。器面の内・外は丹彩が施され、つやがある。

(小林幹男)

(11) Y第11号住居跡

1 遺構 (第17図)

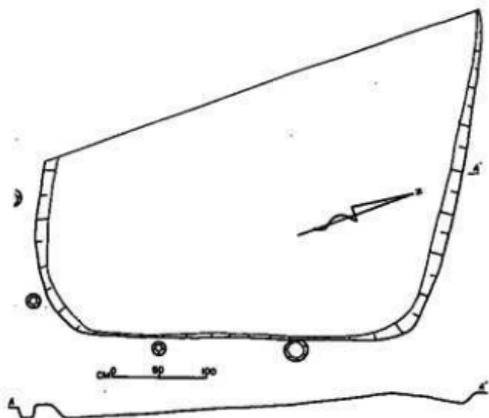
前述のY9号住居跡の西隣りにあり、しかもY9号跡の一部を切りこんで構築した住居跡である。東西2.55m、南北3.75mとかなり小型の隅丸長方形プランをもった住居跡であった。

(川上元)

2 出土遺物 (第16図)

壺と甕形土器の小破片が検出されている。甕形土器は、A IあるいはB III 2型で、弥生後期箱清水II式に属するものである。

(小林幹男)



第21図 天神道跡Y-12号住居跡実測図(1:60)

(12) Y第12号住居跡

1 遺構 (第21図)

グリッド・ヘー1、ホー1の部分に検出されたもので、Y5号住居跡の北に位置している。本住居跡の西側は、旧畦畔のために切断され、プランのほぼ半分が確認されたのみである。したがって、その規模は明確でなかったが、南北4.4m、東西およそ5.0mぐらいであろうか。柱穴と思われるピットは、住居跡の外側局縁をとりかこんでいる。

(川上 元)

2 出土遺物 (第20図)

検出された遺物は、高坏の坏部と甕形土器の小破片である。高坏形土器は、口辺部が大きく弓なりに外反りし、肩部で稜角をつくって、直斜状に縮約している。この器形は、Y10の高坏形土器より口辺部の反りが強く、浅いのが特色である。また、色調も赤褐色でひび割れがあり、この形式の高坏は、1個のみであるが、弥生後期箱清水Ⅱ式に属するものであろう。

(小林幹男)

(13) Y第13号住居跡

1 遺構 (第22図)

グリッド・カー8を中心にした部分より検出されたが、本住居跡もH11号住居跡によって、その東側部分を切られて、プランのほぼ半分が不明である。隅丸方形に近いプランで、一辺約4.4mを計ることができる。

西側壁近くの床面の一部に礫が多く散布しているのがみられる。

(川上 元)

2 出土遺物

検出された遺物は、壺・甕などの小破片で、器形を判別できるものは出土していない。甕形土器片から推定すれば、弥生後期箱清水Ⅱ式期に属するものである。(小林幹男)

(14) Y第14号住居跡

1 遺構 (第23図)

グリッド・ラー7、ワー7の部分にある。北側はH12号住居跡に、西側はH6号住居跡、およびD1土壇によって切られている。一辺が約4.85mから4.9mあるほぼ隅丸方形のプランである。

本住居跡内の北西部分に焼土がわずかにみられた。また、遺物としては壺・甕片等が検出されたが、Y14号跡の床面と思われる面よりさらに下部レベルからの遺物も認められた。したがって、これらの遺物の中には、Y15号住居跡に關係するものが含まれていたものと思われる。

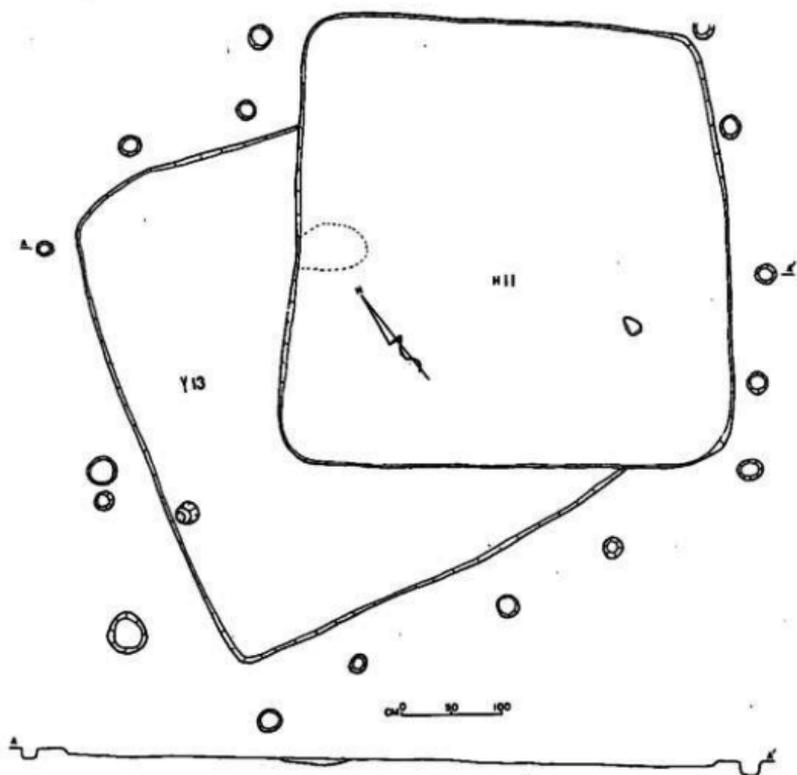
(川上 元)

## 2 出土遺物 (第24図)

検出された遺物は、壺・甕形土器の破片で、完形に復元できるものはない。

壺形土器は、口径がやや小さく、口縁は弓なりに外反りし、肩の張りがなく、無花果形である。頸部には幅広く柳描波状文が施文され、器面は丹彩である。(Y14-1)

甕形土器には丹彩のやや大型の土器と、柳描波状文のa型が検出されている。前者はI 2a型に属し(Y14-3)、弥生後期箱濠水Ⅱ式に分類されるものである。(小林幹男)



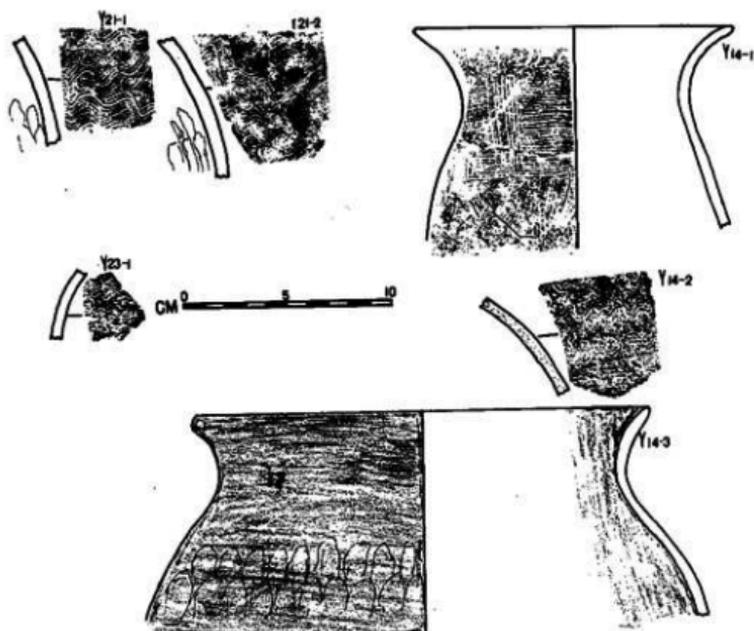
第22図 天神遺跡 Y-13、H-11号住居跡実測図(1:60)

### (15). Y第15号住居跡

#### 1 遺構 (第25図)

グリッド・ラー6を中心とした部分に検出されたものである。住居跡の南側大半をH6号住居跡によって切れ、さらに北西部分をD-2土城によって切断されている。5.5m × 5.0mのほぼ隅丸方形のプランをもつ住居跡である。





第24図 Y-14-21・23号住居跡出土遺物実測図(1:3)

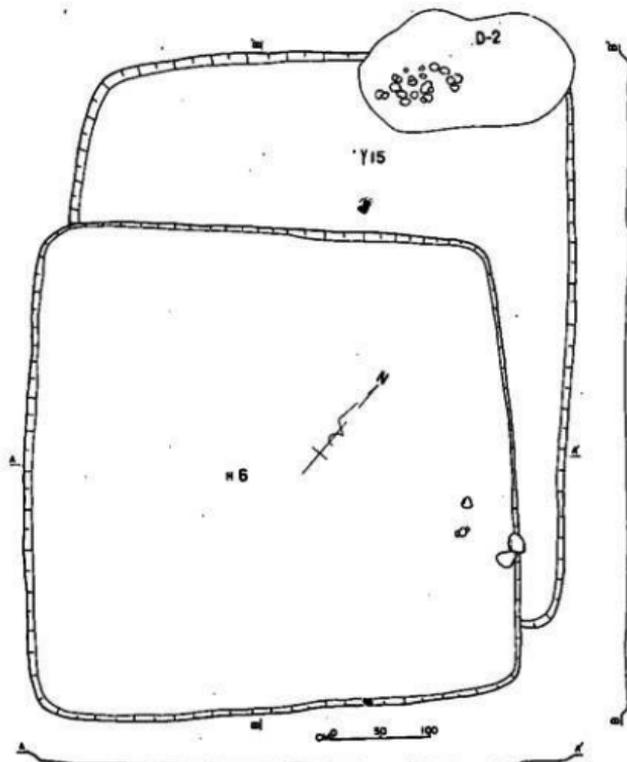
(16) Y第16号住居跡

1 遺構 (第14図)

グリッド・ゾーン12、ゾーン12周辺に検出された住居跡である。本住居跡は、Y19号住居跡の北側を切って構築されたが、またY7号住居跡によって切断されている。さらにその東には、Y17号住居跡が隣接している。東西3.8m、南北5.8mを計り、南北に長い隅丸長方形のプランである。 (川上 元)

2 出土遺物 (第20図)

壺形土器の底部破片と甕形土器の小破片が検出されている。壺形土器の底部は、断面長方形を呈し、そこから大きく下胴に向かって開いているが、恐らく無花果形の胴部に続くものと思われる。Y19号住居跡の出土遺物などとも考量して、弥生後期箱溝水Ⅱ式に属するものとする。 (小林幹男)



第25図 天神遺跡 Y-15、H-6号住居跡、D-2土採実測図 (1:60)

(17) Y第17号住居跡

1 遺構 (第14図)

Y16号住居跡に接する住居跡であるが、グリッド設定外のプランのため、精査に至らなかった。南北の長径約5m前後の隅丸長方形プランをもつ住居跡と思われるが、明確な規模はつかめなかった。

(川上 元)

2 出土遺物 (第20図)

検出されたのは、小型の器台形土器脚部と甕形土器の小破片のみである。器台形土器の脚部は、断面釣鐘状を呈し、器面がへら調整されている。弥生後期箱清水Ⅱ式に属するものと考えられる。

(小林幹男)

(18) Y第18号住居跡

1 遺構 (第26図・図版7)

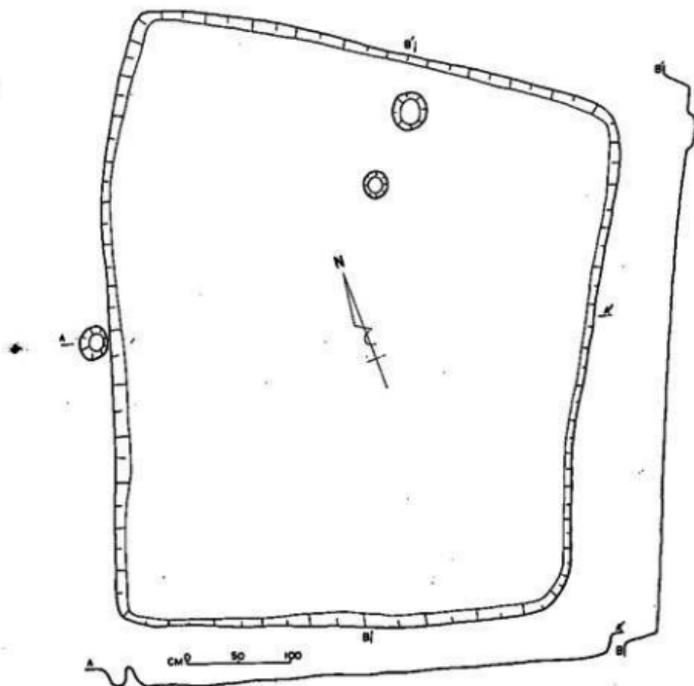
グリッド・ロー7、ハー7に検出された住居跡である。東西4.6m、南北5.7mを計るが、北壁に対して西壁径がやや短縮な変形プランである。(川上 元)

2 出土遺物 (第27図)

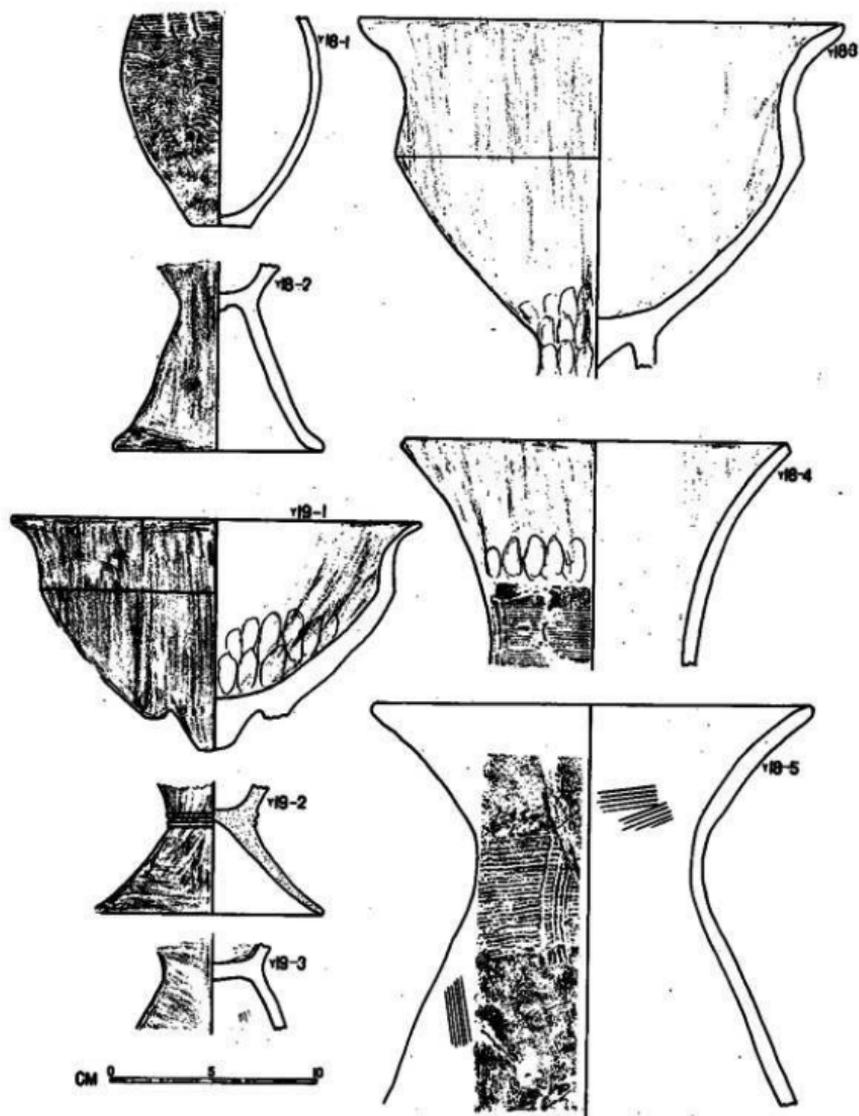
検出された遺物は、壺・高坏・甕形土器などで、いずれも一部を欠損し、完形できるものはない。

甕形土器は、比較的大型で、広口の口縁から外反りの弓なりのカーブを描いて、張りのない肩に続き、胴部は下腹部に最大幅のある無花果形である。頸部には幅広い帯描菱状文を施し、器面の内外に丹彩が施されている。

高坏形土器は、緩い外反り口縁から、肩部に弱い稜角をつくって、わずかに丸味のある



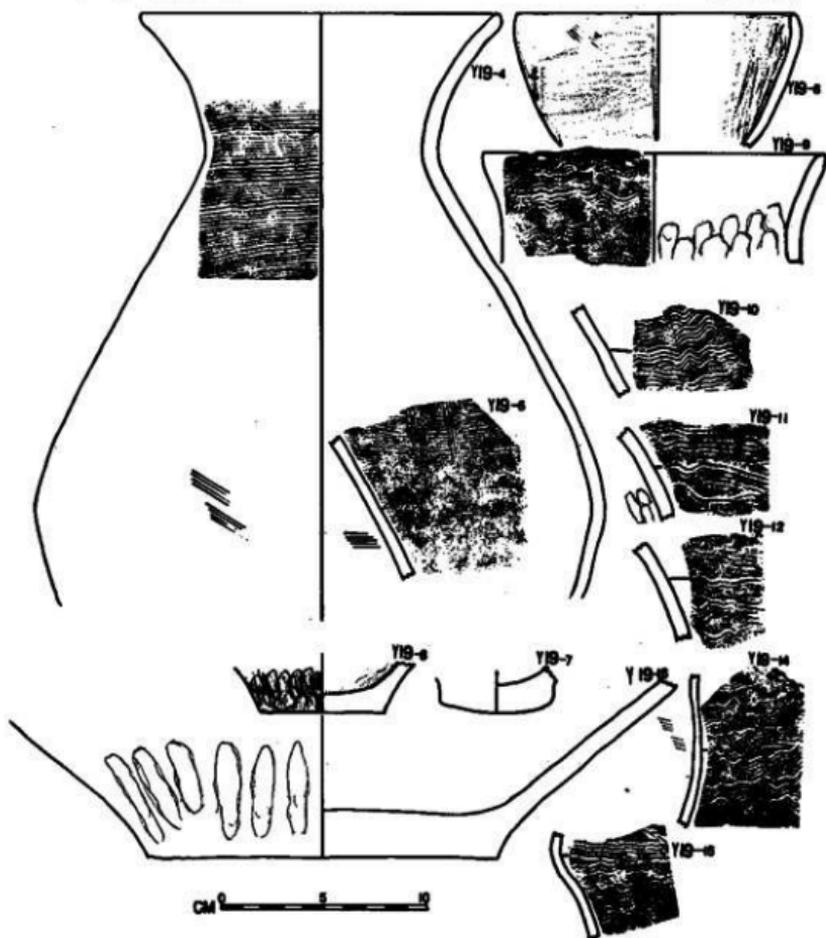
第26図 天神遺跡 Y-18号住居跡実測図 (1:60)



第27图 天神遺跡Y-18・19号住居跡出土遺物実測図(1:3)

内寄カーブを描いて接着部に縮約している。器面はへら調整され、内・外面に丹彩が施されている。脚部（Y18-2）は、直斜状を呈し、裾部が唇状にわずかに反っている。菱形土器は、小破片と口辺部を欠く小型の土器が検出されている。小型の土器は、胎土・焼成がよく、暗茶褐色を呈し、A I型で、最大幅は上胴部にある。

並・高環形土器の特色から、Y-10号住居跡よりやや古い弥生後期箱清水Ⅱ式期に属するものと考えられる。（小林幹男）



第28図 天神遺跡 Y-19号住居跡出土遺物実測図（1：3）

(19) Y第19号住居跡

1 遺構 (第14図)

グリッド・ネー12に検出されたものである。本住居跡は、北側でY16号住居跡と、さらにY7号住居跡によって切断されているため、明確なプランはつかめなかった。

東西5.4m、南北3.7mほどの隅丸長方形プランをもつものと思われる。住居跡内の南側に一列に3つのピットが確認された。(川上 元)

2 出土遺物 (第27・28図)

検出された遺物は、壺・高環・甕・鉢形土器などで、Y10号住居跡と並んで出土量が多い。

壺形土器(Y19-4)は、胴部に比して、やや口径が小さく、頸部は弓なりにカーブしてくびれてほぼ直斜状に下胴の最大幅部に続き、ここで丸味のある張りをつくって、底部に続いている。器面は明るい淡褐色を呈し、頸に幅広い梅描簾状文を施文している。その他、壺形土器には、底部径16.9cm、下腹部径34cm余におよぶかなり大型の底部破片が検出されている(Y19-16)。

高環形土器は、環部完形品(Y19-1)と脚部が別個体として検出されている。環部は薄い唇状の外反り口縁かや頸部で弱いカーブを描いて、肩部にかなやかな稜角をつくり、さらに丸味のあるカーブを描きながら接着部に縮約している。脚部はラッパ状に底部が開き、頸部に2本の水平な隆帯をつけ、いずれも丹彩が施されている。

甕形土器は、いずれも破片で、A・BのI1型が主体のようである。

鉢形土器は、底部を欠損しているが、口縁は内弯し緩やかなカーブを描いて、底部にわずかに縮約している。

各器形の特徴を総合すれば、この住居跡の遺物は、弥生後期の箱清水Ⅱ式に属するものであろう。(小林幹男)

(20) Y第20号住居跡

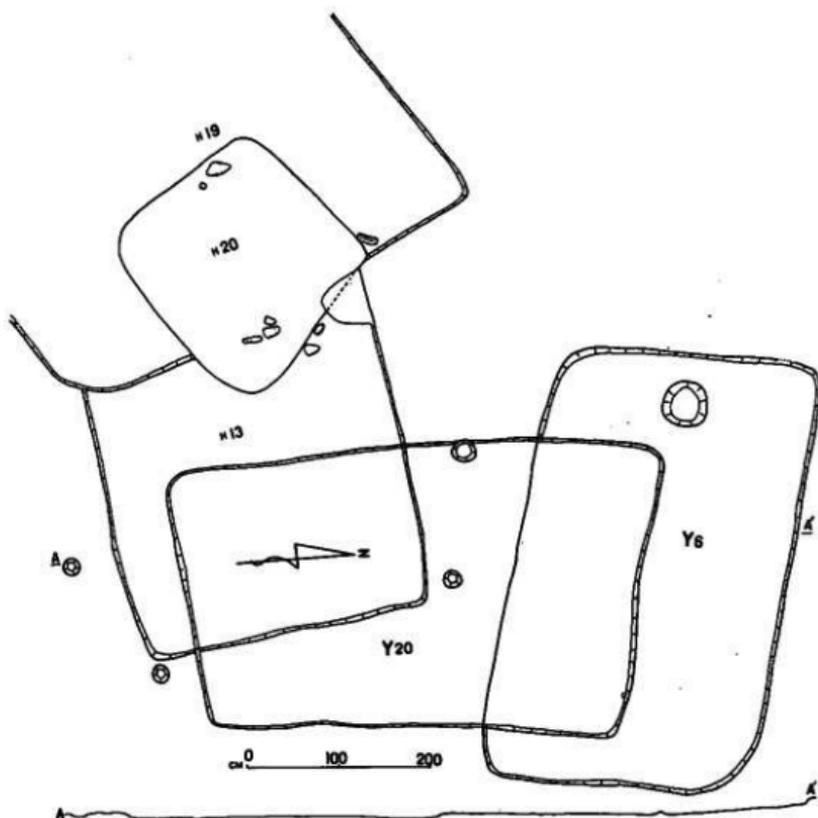
1 遺構 (第29図)

本住居跡は、Y6号住居跡を切って構築されたものであるが、後にH13号住居跡構築の際に、本住居跡はその西南部を切断されている。長径5.0m、短径3.1mの長方形プランである。(川上 元)

2 出土遺物 (第20図)

およそ器形が判然とするのは、甕形土器のみで、壺・高環形土器は、小破片のみである。

甕形土器は、A I1型を主体とし、器面を粗いハケ目で調整し、その上に細かい梅描波状文を施文している(Y20-1)のが特徴である。弥生後期箱清水Ⅱ式期に属するものであろう。(小林幹男)



第29図 天神遺跡 Y-6・20、H-13・19・20号住居跡実測図 (1:60)

(21) Y第21号住居跡

1 遺構 (第30図)

東西2.7m、南北3.7mと比較的小規模なプランをもつ住居跡である。ブルドーザによる削平の際に、一部壁を削ったが、東側はノーマルな壁を残している。

本住居跡内からの遺物の出土量はきわめて多かったが、これらの土器には接合されるものがなく、いくつかの個体で構成されていた。このことからみて、この土器群は、住居跡

腐絶後、時間をへたてず投棄されたものと考えられる。(川上 元)

## 2 出土遺物 (第24図)

器形が判然とするものはなく、壺・高坏・甕形土器の小破片のみである。甕形土器は、胴部が丸味のあるカーブを描き、やや粗い櫛描波状文が施文されている。弥生後期の箱清水Ⅱ式期に属するものである。(小林幹男)

### (22) Y第22号住居跡

#### 1 遺構 (第31図)

H25号住居跡によって、その西側部分を切断されている。東西4.5m、南北2.7mを計る隅丸長方形を呈するプランである。なお、本住居跡とH25号住居跡の床面はほぼ同一レベルであった。(川上 元)

## 2 出土遺物

検出された遺物は、甕形土器の小破片で、AⅠ1型が主体であり、胴部は丸味のあるカーブを描いている。弥生後期箱清水Ⅱ式に属するものである。(小林幹男)

### (23) Y第23号住居跡

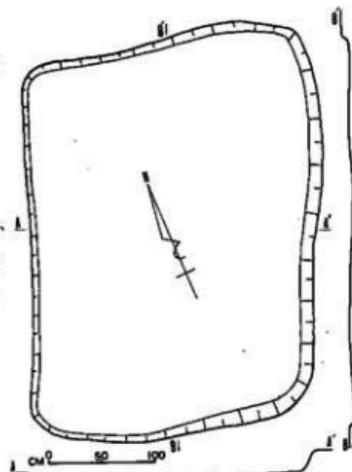
#### 1 遺構 (第32図)

東西3.5m、南北3.9mを計る隅丸長方形プランを有する住居跡である。住居跡内の床面の中央部に、礫群の分布が多い。さらに外側北に溝状掘り込み遺構を検出した。

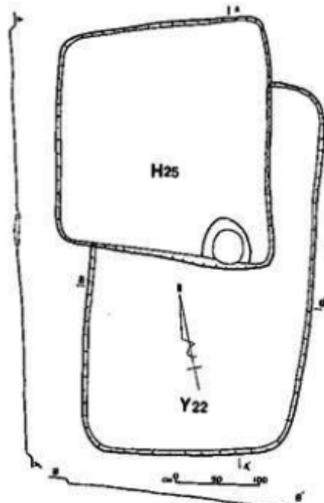
(川上 元)

## 2 出土遺物 (第24図)

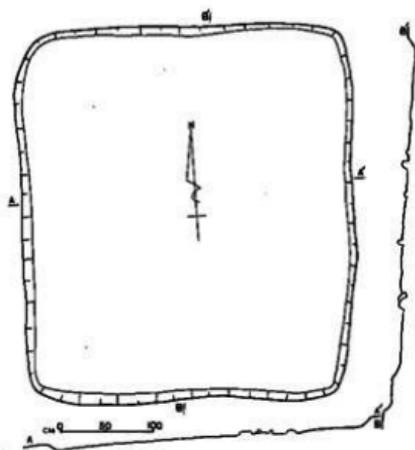
検出された遺物は、きわめて微量で、すべて小破片である。甕形土器は、AⅠ1型に属し、弥生後期箱清水Ⅱ式期に属するものと考えられる。



第30図 天神遺跡Y-21号住居跡実測図(1:60)



第31図 天神遺跡Y-22, H-25号住居跡実測図(1:60)



第32図 天神遺跡Y-23号住居跡実測図(1:60)

- 註1 川上 元・小林幹男「長野県小県郡塩田町神木遺跡緊急発掘調査報告書」  
信濃22-8
- 註2 小林幹男・川上 元「長野県上田市西光坊・向田Ⅱ・石原遺跡緊急発掘調査報告書」  
昭和47年 上田市教育委員会
- 註3 信濃史料刊行会 「信濃考古綜覧上巻」 昭和31年 信濃史料刊行会
- 註4 熊野正也「殿台遺跡」(市川市文化財調査報告書第二集) 昭和45年
- 註5 註1に同じ
- 註6 註2に同じ

## B 古墳時代および歴史時代の遺構と遺物

### (1) H第1号住居跡

#### 1 遺構 (第33図)

グリッド・ナー10周辺に検出したもので、東西4.2m、南北4.3mを計る隅丸方形に近い平面プランである。

住居内の南西隅には、礫群の散布がみられたし、北壁のやや西寄り部分に、カマド(焼土)が検出された。この焼土部分は、上面のわずか2~3cmであり、その下部は礫を多量に含んでいた。(川上 元)

#### 2 出土遺物 (第34図)

##### a 土師器 (H I-1~3・9)

坏および甕の破片が検出されている。坏の器形には、二つのタイプがあり、第一のタイプは、嘴状の口縁からおそ直斜状に胴部をつくり、底部をへら削りて整形しているものである。(以下これをA-直斜状、I-へら削り・とする)。第二のタイプは、嘴状の口縁からやや内弯気味にカーブして、丸味のある胴部をつくり(B型とする)、底部を糸切りによって成形(2手法とする)しているものである。また、器高:口径の比(以下A比と略記する)は、Iが1:3.55、2が1:3.31、3が1:2.95であり、器高:底部径の比(以下B比と略記する)は、1が1:1.94、2が1:1.57、3が1:1.39で、成形上の統一性は認められない。

甕形土器は、口辺部の破片で、唇状の口縁から弓なりのカーブを描いて外反りし(以下C型と略記する)、なだらかに上胴部に続いている。器面は茶褐色を呈し、ハケ調整(3手法とする)により、一部が煮炊のため、酸化し、焼けただれている。

##### b 須恵器 (H I-4~8)

坏・台付皿・甕付坏(蓋)などが検出されている。坏は嘴状の強い外反り(以下D型とする)から、胴部でやや丸味のあるカーブを描き、底部がわずかに上げ底気味の糸切り手法によるもの(4・6)と、B1の坵形に近いもの(5)があ。A比は4が1:3.8、5が1:3.04、B比は4が1:2.07、5が1:1.12である。

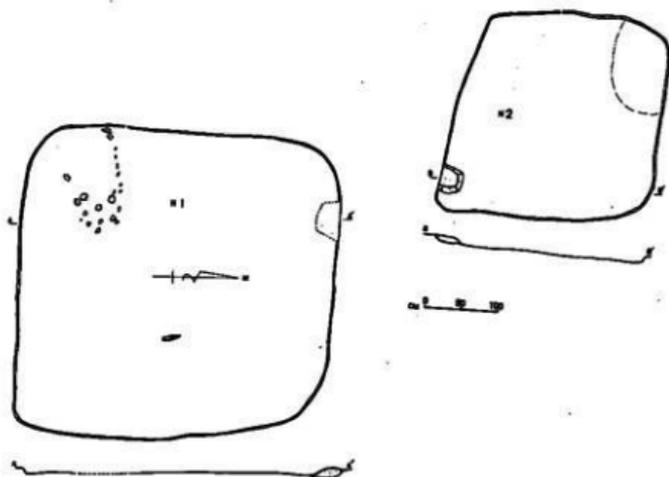
台付皿は、底部のみで、器台が断面梯形状につくられている。

坏の蓋は、裾部が嘴状で内曲し、下胴がやや外反りにカーブしている。

出土遺物の所見と遺構の構造から、土師国分期のものと考えられる。(小林幹男)

### (2) H第2号住居跡

#### 1 遺構 (第33図)



第33図 天神遺跡H-1・2号住居跡実測図(1:60)

H 1号住居跡の北西部分に位置するもので、東西2.8m、南北2.9mの方形プランで、周辺の住居跡よりも一まわり規模が小さい。住居跡内部の北西隅には、礫が散布し、南東隅には、礫を多く含んだ焼土が確認された。(川上 元)

## 2 出土遺物

検出された遺物は、国分期の土師器(坏)と須恵器であるが、いずれも小破片で、出土量も少なく、器形を伺いうるものはない。H I号住居跡と同期の遺構と考えられる。

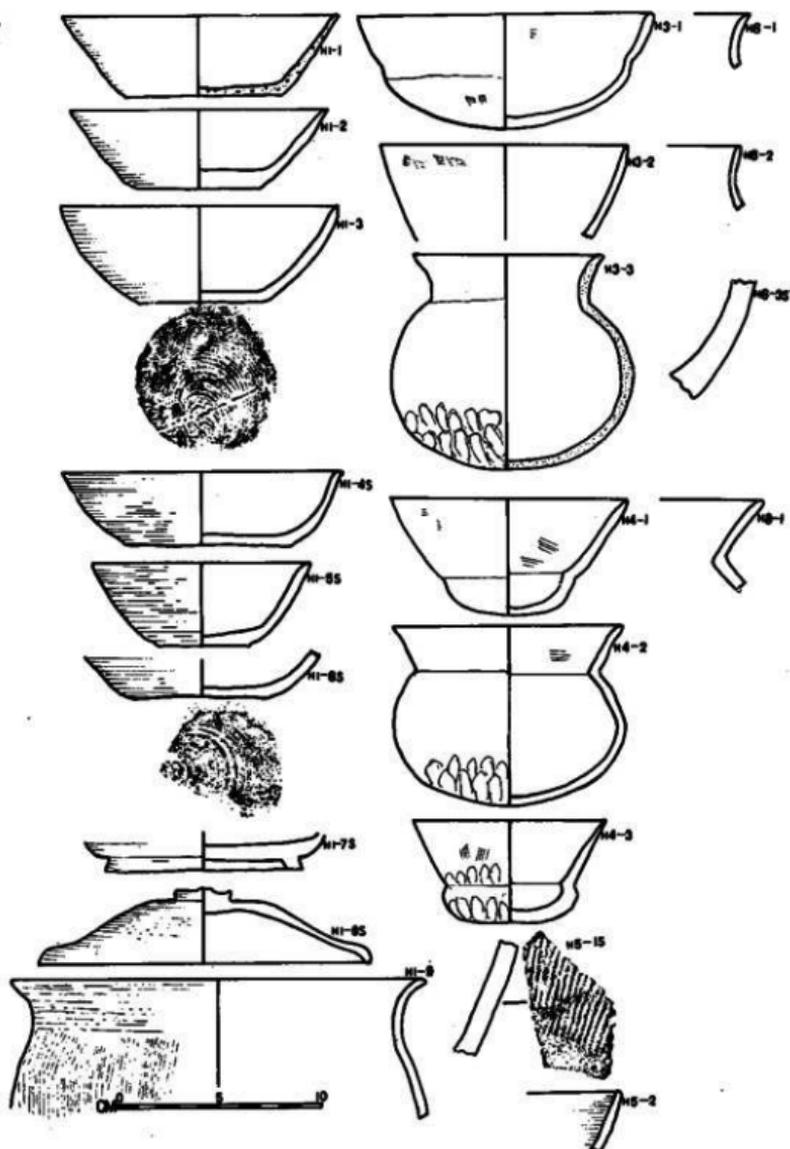
(小林幹男)

## (3) H第3号住居跡

### 1 遺構 (第35図・図版8)

東西4.4m、南北5.2mの長方形プランで、この部分の重複した住居跡の最後に構築されたものである。

住居跡内中央の東壁寄りに焼土の跡がみられる。検出された遺物としては、土師器の完形品もあり、破片もかなり多かった。(川上 元)



第34図 天神遺跡H-1・3・3・5・6・8号住居跡出土遺物実測図(1:3)

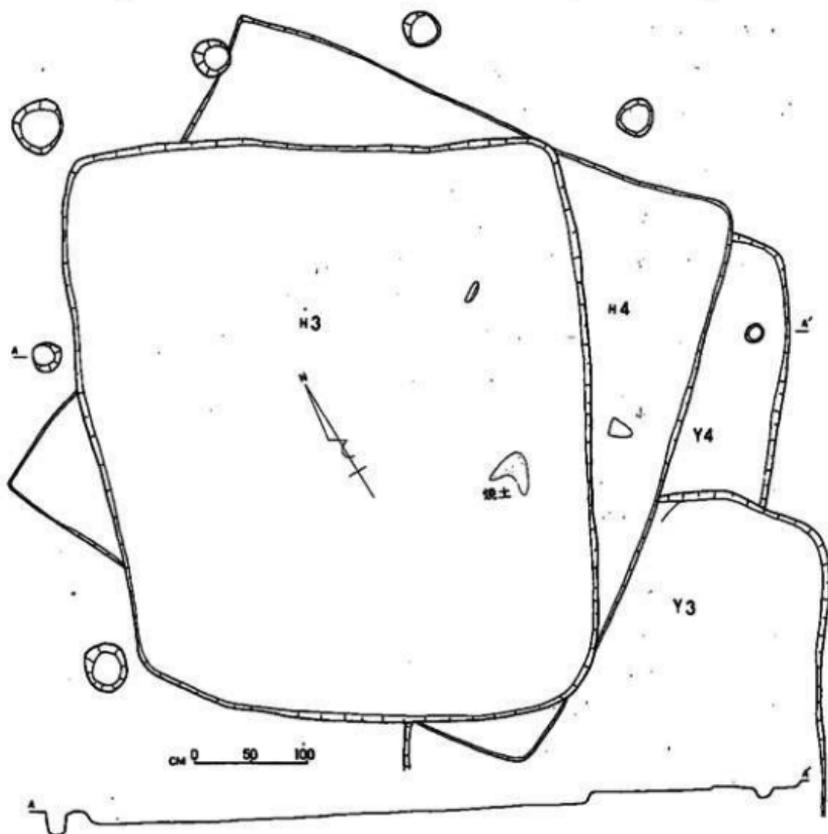
2 出土遺物 (第34図・図版8)

環と埴形土器のほぼ完形品をはじめ、土師器の小破片がかなり出土している。

坏は外傾内弯気味の口辺部と舟底状に緩くカーブし丸底をつくる胴部との間でわずかに屈折して反りカーブを描いている。器面は明るい茶褐色を呈し、ハケ調整によっている。A比は1：2.6である。

埴形土器は、嘴状外反りの口縁から頸部で「く」の字形を描き、丸く張りのある胴部に続き、底部は丸底である。県内では、この形式の土器が、海戸遺跡<sup>(1)</sup>と平出遺跡<sup>(2)</sup>から出土しており、東京・和泉遺跡を標式とする中期のいわゆる和泉式に相当するものである。<sup>(3)</sup>

(小林幹男)



第35図 天神遺跡Y-3・4、H-3・4号住居跡実測図(1:60)

#### (4) H第4号住居跡

##### 1 遺構 (第35図・図版8)

前述のH3号住居跡の下部に検出された遺構で、本住居跡は、H3号住居跡がほとんど重複して構築されたため、わずかに壁の隅部がプランとしてわかるだけである。

H3号住居跡よりもひとまわり大きい規模で、一辺約5m近くの方形プランと思われる。

(川上 元)

##### 2 出土遺物 (第34図・図版8)

土師期の遺構の中では、最も古い時期に属するもので、Y15号住居跡に接続する五領期のものである。遺物は坏・広口壺・埴形土器の完形品などが検出されている。

埴形土器は、嘴状の口縁からわずかな内弯カーブを描いて、下胴で弱い「く」の字形に屈折し、やや張り気味に丸底に続いている。器面は明るい茶褐色を呈し、ハケ調整されている。A比は1:2.05で、ほぼ同器形のもので、堂垣外遺跡から出土している。<sup>(4)</sup>

広口壺形土器は、口縁が外反りして頸部で「く」の字形を描き、胴部は張りのある扁球形となり、丸底の底部に続いている。器面は明るい淡茶褐色を呈し、ヘラ研磨が行なわれている。およそ同器形の土器が、県内では下蟹河原遺跡から出土している。<sup>(5)</sup>

埴形土器は、口辺部が先端に向かってしだいに薄くなり断面ラッパ状に開口し、胴部で「く」の字形にくびれ、半扁球形の下胴から底部に続いている。器面の口辺部はハケ調整により、胴部はヘラ研磨によっている。この器形の土器は、関東近県の五領期の土器にも認められるが、天神遺跡の土器は、それらより概して下胴の扁球形が扁平である。

(小林幹男)

#### (5) 第5号住居跡

##### 1 遺構 (第36図)

H10号住居跡によって、西側を切断されているため、その規模は不明である。ただし、南北の径が3.0mあることはわかる。国分期のほぼ方形プランを有するものと思われる。

住居跡内南壁中央にカマド(焼土)がある。また、東壁に礫のブロックもみられた。さらに住居跡外側には、柱穴と思われるピットも確認された。

(川上 元)

##### 2 出土遺物 (第34図)

検出された遺物は、土師器の坏形土器や須恵器の変形土器などであるが、いずれも小破片で、出土量が少なく、年代の確定は困難であった。坏形土器はB型で、ロクロによる擦痕が認められる。変形土器は厚手で、器面にタタキ目があり、焼質もよい。おおよそ国分期前半のものと考えてよさそう。

(小林幹男)

#### (6) H第6号住居跡

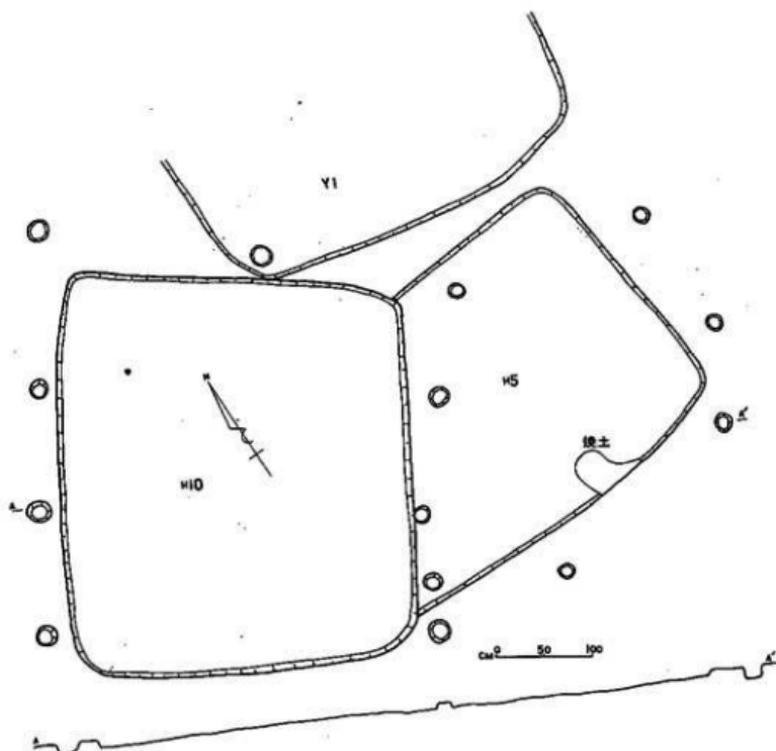
##### 1 遺構 (第25図)

Y15号住居跡を切って構築した住居跡で、東西5.0m、南北4.9mを計る隅丸方形のプランである。住居跡内より検出された遺物は、土師器（内面黒色研磨土器）、須恵器などであった。（川上 元）

## 2 出土遺物（第34図）

出土遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の厚手の変形土器などであるが、いずれも小破片で、器形が判然とするものは少ない。坏には内黒B型のもが多く、須恵器の甕は、器面にタタキ目があり、良質・厚手である。これらの所見から園分期のものと考ええる。

（小林幹男）



第36図 天神遺跡H5・10号住居跡実測図（1：60）

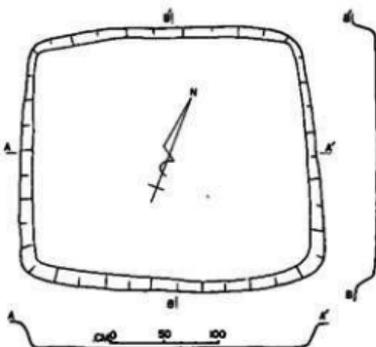
(7) H第7号住居跡 竪穴遺構

1 遺構 (第37図)

グリッド・カー9に検出された竪穴遺構で、西側でH11号住居跡と隣接する。

東西2.8m、南北2.4mを計り隅丸方形プランをもつ遺構である。遺構内の北東隅部分に、自然礫の堆積がみられた。

(川上 元)



第37図 天神遺跡H-7号竪穴遺構実測図 (1:60)

2 出土遺構 (第39図)

国分期の竪穴遺構と考えられる。

出土遺物は、覆土中に微量認められたが、この遺構の時期を確定すべき遺物はない。

恐らく、隣接するH11号住居跡(国分期後半)に伴う遺構であろう。覆土中から検出された土器は、鬼高期の甕形土器片(H7-1)で、口辺部はわずかに外反り 胴部にわずかにふくらみが残っている。(小林幹男)

(8) H第8号住居跡

1 遺構 (第38図・図版9)

西側部分は土手で、本住居跡のプランは、その半分が確認されたのみであった。北側に重複したH9号住居跡を切って構築されたものである。

南北の径約4mであり、東西径は明らかでないが、隅丸方形のプランを有するものと思われる。住居跡内部には、柱穴とみられるピットが2か所あり、さらに外側にもピットが確認された。(川上 元)

2 出土遺物 (第34図)

この住居跡の時期を決定すべき遺物はきわめて少ないが、土師甕形土器の口縁は、強く外反りして、頸部で「く」の字形にくびれ、反転してかなり張りのある肩部の器形をつくっている。この形態から推定すれば、胴部は張りのある扁球形となり、焼成などからして、和泉期の住居跡と考える。(小林幹男)

(9) H第9号住居跡

1 遺構 (第37図)

前述のH8号住居跡によって、その南側を切断され、西側も土手であるので、正確なプランはつかめなかった。南北径4.8m前後で、東西の径は不明であるが、およそ隅丸方形のプランを呈するものと思われる。(川上 元)

## 2 出土遺物

遺物はほとんど滅失して、わずかに小破片が検出されたのみである。遺物の中には一部弥生後期箱清水Ⅱ式の土器片なども混入していたが、主体は五領Ⅰ式期の甕・坏形土器の小破片であった。

(小林幹男)

### (10) H第10号住居跡

#### 1 遺構 (第36図・図版9)

グリッド・ネー7を中心とし部分に確認された遺構で、H5号住居跡の西側を切って構築された住居跡である。

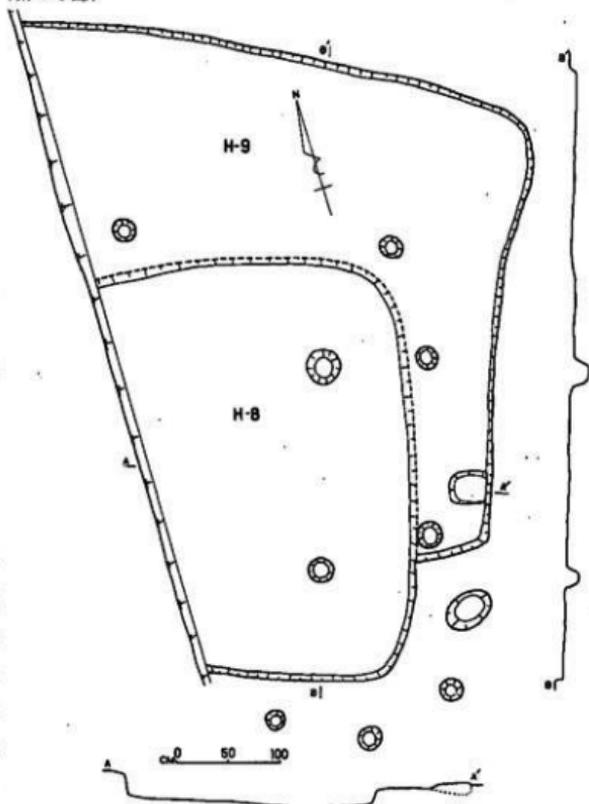
東西3.7m、南北4.2mを計る隅丸長方形プランを有するもので、外側に柱穴と思われるピットをめぐらせている。

#### 2 出土遺物 (第39図)

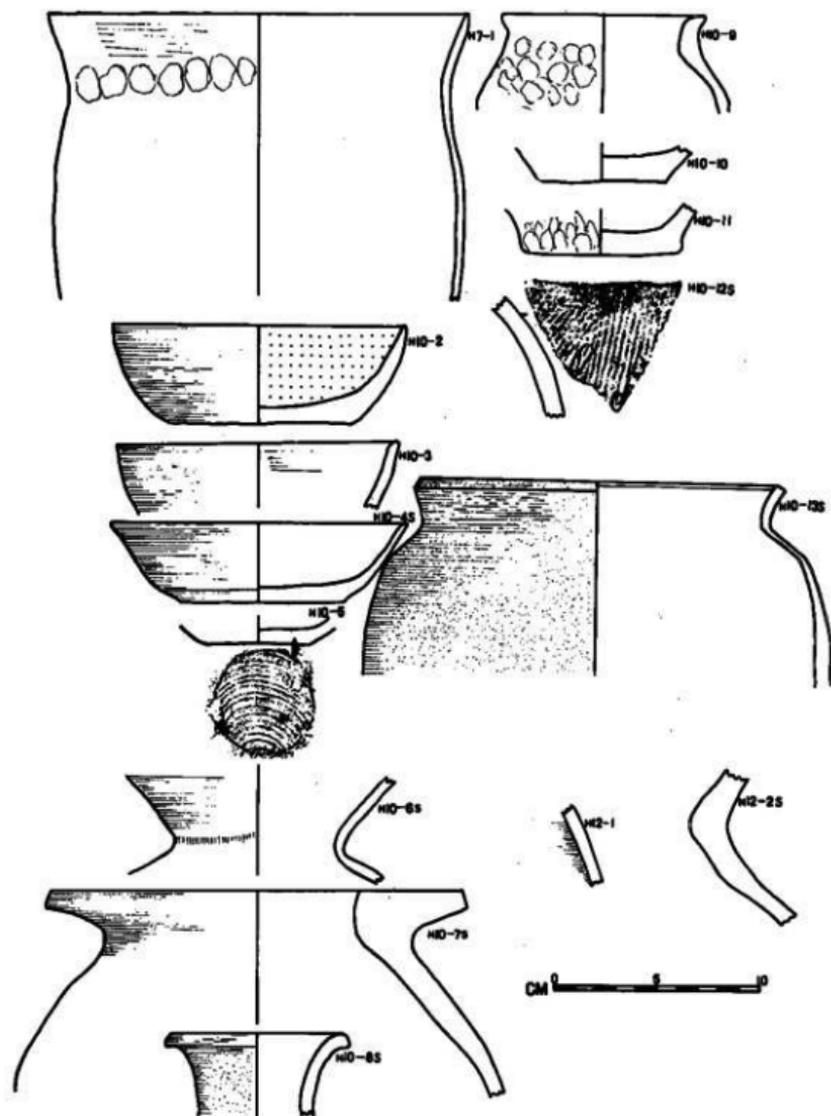
a 土師器 (H10-2・3・5・9~11) 国分期の坏形土器と甕形土器の口辺部、および底部が検出されている。

坏形土器は、やや厚手・内黒のB2型(2)とD型(3)がある。2のA比は1:3.04、B比は1:1.89である。

甕形土器は、やや厚手の唇状外反り口縁から、なだらかに肩部でカーブし、手づくねで成形している。底部は平底で、ヘラ削りしている。



第38図 天神遺跡H-8・9号住居跡実測図(1:60)



第39図 H-7遺構、H-10・12住居跡出土遺物実測図(1:3)

b 須恵器 (H10-4・6~8・12・13)

坏・甕・甕形土器が出土している。

坏形土器(4)は、B 1型で、下腹部にややふくらみがあり、底部との間にわずかな反りカーブをつくっている。A比は1:3.81、B比は1:2.34である。

甕形土器は、広口で強く外反りし、頸部で「く」の字をつくる6と、細頸の8、平らで幅広い口縁部から、強い「く」の字のカーブを描く異形の7などがあり、いずれもロクロ痕がよく残り、8は器面に自然釉がかかっている。

甕形土器は、小さい口辺部が強く外反りし、わずかに肩部で張って、緩やかに胴部に続く13と、厚手大型の破片が出土している。前者はロクロ整形によっているが、後者はタキ目が認められる。  
(小林幹男)

(11) H第11号住居跡

1 遺構 (第22図)

Y13号住居跡を切って構築された住居跡である。東西4.4m、南北4.5を計り、ほぼ隅丸方形を呈する平面プランである。住居跡内の西壁中央部にカマドの痕跡(焼土)が認められた。  
(川上 元)

2 出土遺物 (第40図・図版10)

a 土師器 (H11-4)

この住居跡から検出されたのは、ほとんど須恵器で、土師器はわずかに内黒の坏形土器片だけである。4の坏形土器片は、口辺部のみで、器形はB型である。

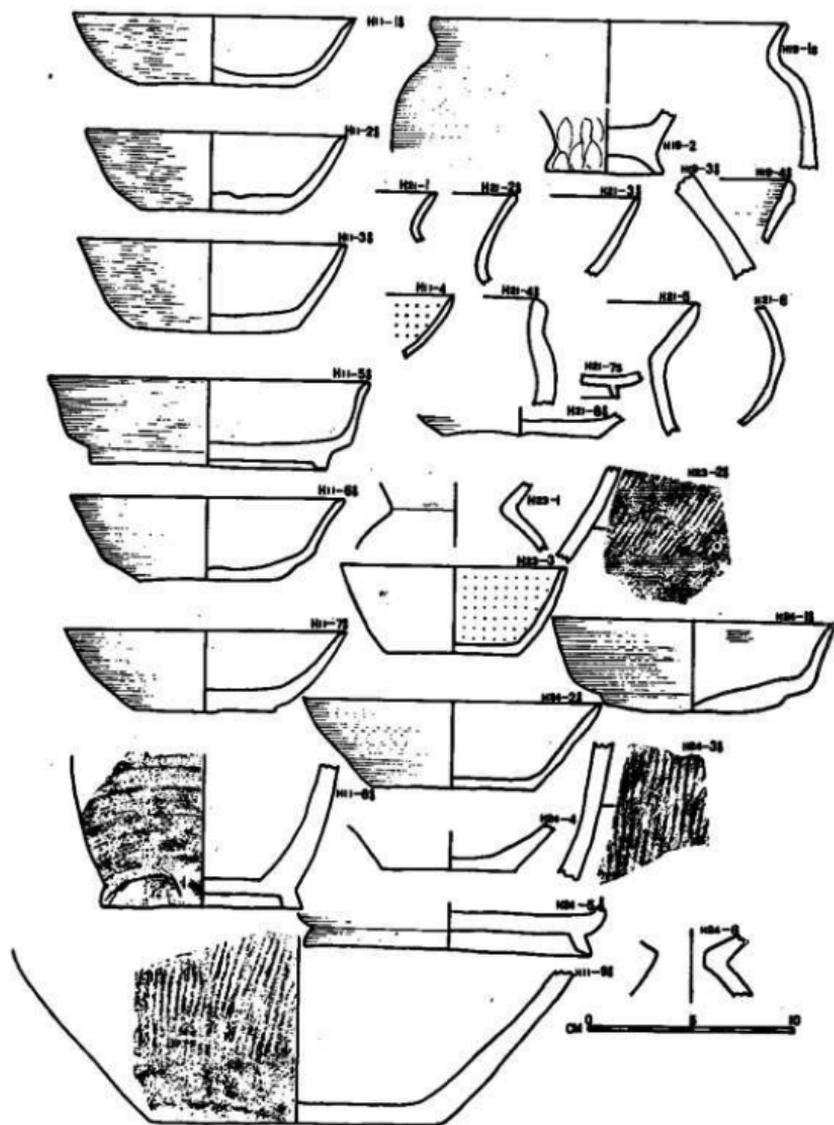
b 須恵器 (H11-~3・5~9)

坏・台付皿・台付臺・甕形土器などが出土し、坏と台付皿形土器は、ほとんどが完形品である。

坏形土器はB 1型(1~3・7)とD 1型(6)があり、器面はロクロ整形している。6は下腹部がわずかに張り、反り気味に底部へ続いている。A・B比は、下表のとおりである。

記測比	資料NOHII-					
	1	2	3	5	6	7
A比 1:	4.2	3.4	3.95	2.78	3.32	3.42
B比 1:	2.3	1.86	1.8	2.73	1.72	1.7

形態的には1・2・3が類似し、6・7はやや異形であるが、B比では2・3および6・7が類似値を示している。こうした器形上の変化は、施釉陶器について、すでに楢崎彰一氏が発表されている。筆者も信濃国分寺跡との関係で、明神前遺跡の出土資料について、  
(6)  
(7)



第40図 天神遺跡H-11・19・21・23・24号住居跡出土遺物実測図(1:3)

若干の里察を試みたが、結果はB比の数値がより器形の特徴を示唆しているようである。

台付四形土器(5)は、唇状口縁でD 2型である。下腹部がやや張り、断面長方形の器台を

接着している。各比は上表のとおりである。

台付蓋形土器(8)は、口辺部と上胴部を欠いているが、腹部に張りがなく、器形は断面梯形につくられている。

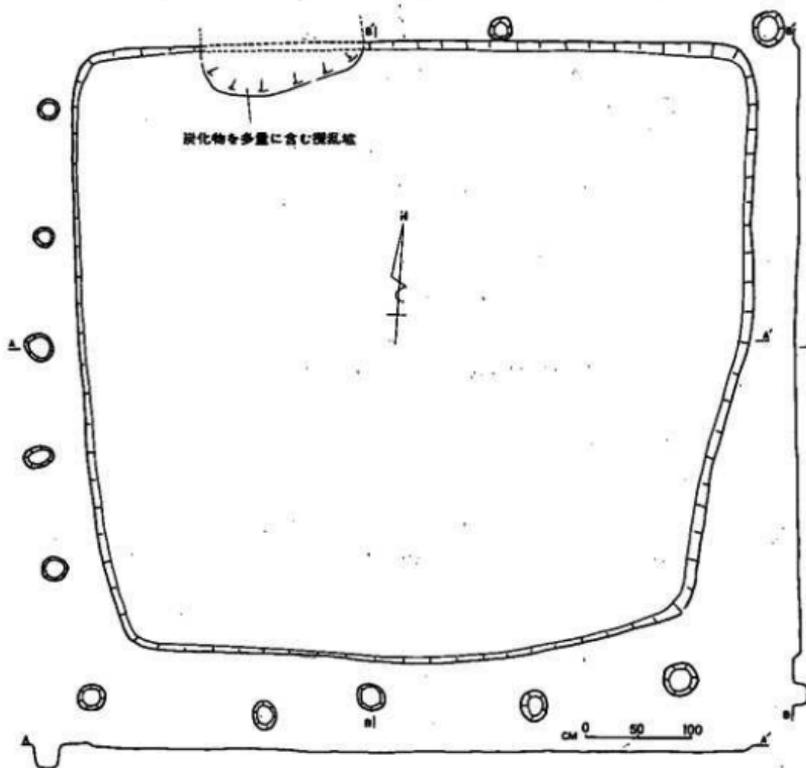
甕形土器(9)は、下胴と底部の破片であるが、底部径1.4mを計るかなり大型の土器で、下胴が強く張り、器面はタタキ目が顕著である。

土師器の出土例は少ないが、園分期に比定される住居跡と考える。(小林幹男)

(12) H第12号住居跡

1 遺構 (第41図)

グリッド・ルー7・8を中心として検出された遺構で、東西6.5m、南北6.1mを



第41図 天神遺跡H-12号住居跡実測図 (1:60)

計るほぼ方形の大型プランである。

住居跡の外側周縁には、柱穴と思われる多数のピットが確認された。また、北壁の一部に、炭化物を多量に含んだ後の攪乱域も発見された。(川上 元)

## 2 出土遺物 (第39図)

検出された遺物がきわめて微量で、かつ住居跡の時期を推定する資料が不十分である。検出された遺物から、土師晩期と推定するがやや問題が残る。(小林幹男)

### (13) H第13号住居跡

#### 1 遺構 (第29図)

Y20号住居跡を切って構築されたもので、グリッド・ルー9に確認された。

西側はさらにH19号住居跡・H20号住居跡によって切断されているため、全容はつかめなかった。南北3.2mで、東西は不明であるが、東西に長い長方形プランであろうか。住居跡内の北壁西寄り部分にカマド(焼土)が確認された。(川上 元)

## 2 出土遺物 (第42図)

検出された遺物は、須恵器の大型の壺形土器と、台付坏形土器である。

大型壺形土器は、上脰部径44.5cmを計る破片(1)と、口縁に鉤状の突起をめぐらし、大きく外反りする口辺部から「く」の字形に強く屈折して、張りのある肩部をつくる破片(2)が出土している。1はタタキ目が顕著で、2はロクロ整形している。

台付坏形土器(4)は、B型の坏部に断面梯形の器台をつけている。A比は1:4・21、B比は1:2・32である。

土師器は壺形土器の小破片が検出されている(3)。国分期前半の時期に比定されるものと考えられる。(小林幹男)

### (14) H第14号住居跡

#### 1 遺構 (第5図)

グリッド・チー8を中心として検出された遺構である。平面プランは、隅丸長方形で、南北3.3m、東西3.8mを計る。北壁ほぼ中央部にカマド(焼土)を検出したが、住居跡内には多量の礫群が流入し、部分的に壁を破壊していた。(川上 元)

## 2 出土遺物

かまどの周辺から国分期の内黒の坏片などを検出したが、いずれも小破片で、器形は判然としない。(小林幹男)

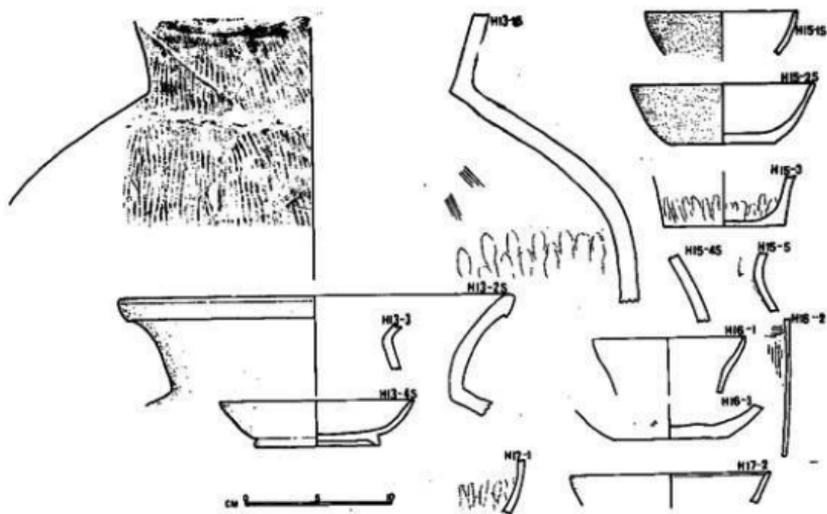
### (15) H第15号住居跡

#### 1 遺構 (第43図)

グリッド・ハー4・5に検出された遺構である。東西4.6m、南北4.8mを計り、

隅丸方形プランをもつ住居跡である。

住居跡内部の北壁に接して、カマド（焼土）が検出された。



第42図 H-13・15・16・17号住居跡出土遺物実測図(1:3)

2 出土遺物 (第42図)

a 土師器 (H15-3・5)

甕形土器の底部と小破片が検出されている。底部は稜角をつくり、下脛でわずかに張り  
を示している。頸部から肩へのカーブはなだらかで、鬲分式に属するものである。

b 須恵器 (H15-1・2・4)

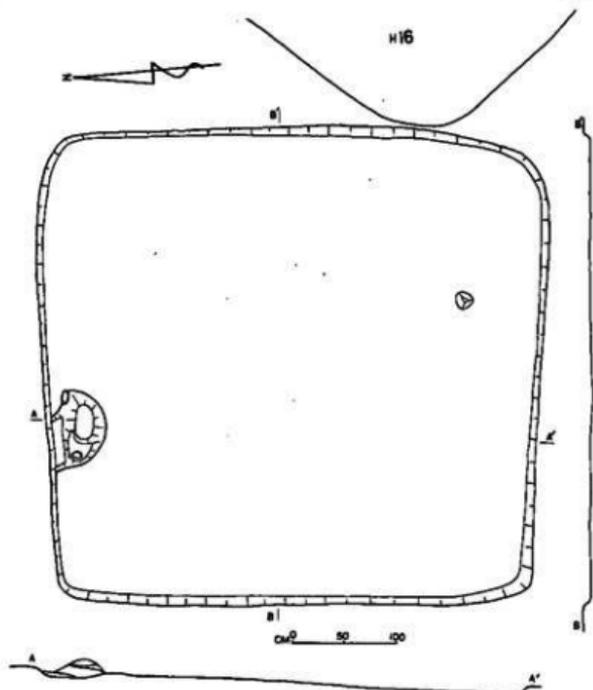
環形土器が検出されており、器形はA型とB2型で、器面はロクロ整形によっている。  
A比は1:3.04、B比は1:1.78である。(小林幹男)

(16) H第16号住居跡

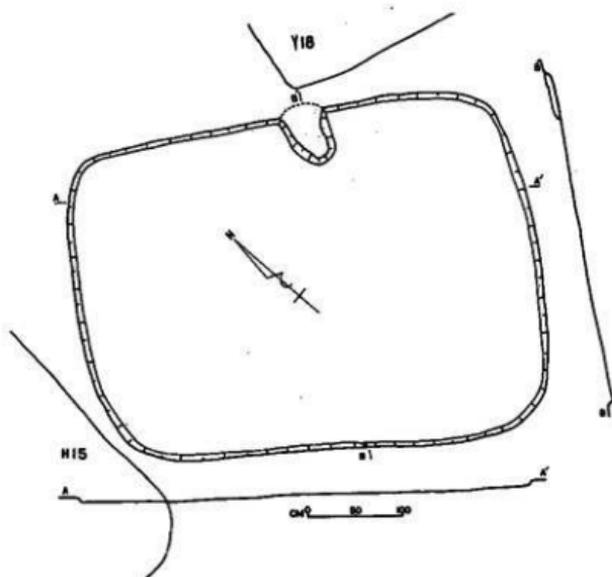
1 遺構 (第44図)

H15号住居跡の東隣に位置する住居跡である。東西4.9m、南北3.5mを計る隅  
丸長方形のプランで、東西に長い遺構である。

北壁に接してカマド(焼土)がみられた。しかし、この焼土層は、きわめて薄いもので  
あった。(川上元)



第43図 天神遺跡H-15号住居跡実測図(1:60)



第44図 天神遺跡H-16号住居跡実測図 (1:60)

## 2 出土遺物 (第42図)

小型鉢形土器・坏・甕形土器などの土師器片が出土している。

小型鉢形土器は、手づくねにより成形し、やや内弯気味の口縁から外反りのカーブを描いて下胴に続いている。この器形の土器は、市川市の須和田遺跡からも検出されており、鬼高期に属するものとされている。

坏形土器は、底部の破片であるが、器面はハケ調整され、底部はヘラ削りである。

甕形土器は、下胴部の破片で、薄手・器面はハケ調整によっている。(小林幹男)

### (17) H第17住居跡

#### 1 遺構 (第45図)

グリッド・トー6・7にまたがって発見された比較的小規模な遺構である。東西3.6m南北3.0mを計る隅丸長方形プランの遺構である。

住居跡内中央に焼土が検出され、この焼土の中から、焼けて変質した凝灰岩質の石3個が出土した。

(川上 元)

## 2 出土遺物 (第42図)

土師器の坏・変形土器の破片が検出されている。坏形土器の口辺部はB型で、器面にロクロ状擦痕が残り、国分期に属するものと考えられる。

(小林幹男)

### (18) H第18号住居跡

#### 1 遺構 (第46図)

グリッド・ホー3を中心として検出された遺構である。東西3.55m、南北4.0mを計る方形プランの住居跡である。(川上元)

#### 2 出土遺物

国分期の内黒の坏片などが微量検出されている。小破片で器形が明らかなものは検出されていない。

(小林幹男)

### (19) H第19号住居跡

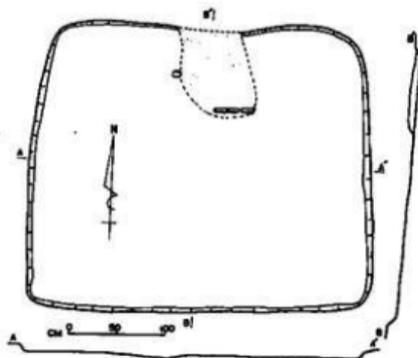
#### 1 遺構 (第47図)

本住居跡は、H12号住居跡を切って構築されたが、南側はH20号跡によって切断されている。東西5.0m、南北6.0mを計る隅丸長方形プランである。

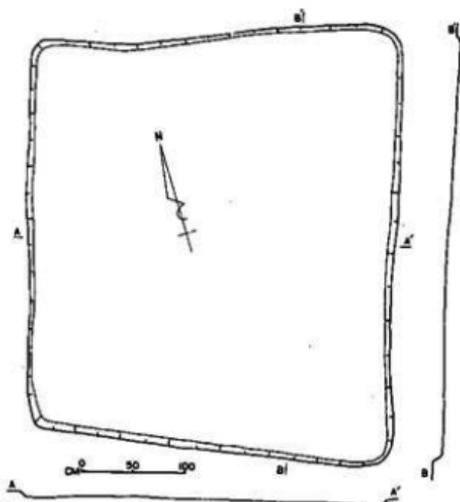
#### 2 出土遺物 (第40図)

##### a 土師器 (H19-2)

変形土器の底部で、脚のあるのが特色である。この器形と類似する遺物が、多摩ニュータウン遺跡から出土している。国分期に伴うものである。



第45図 天神遺跡H-17号住居跡実測図 (1:60)

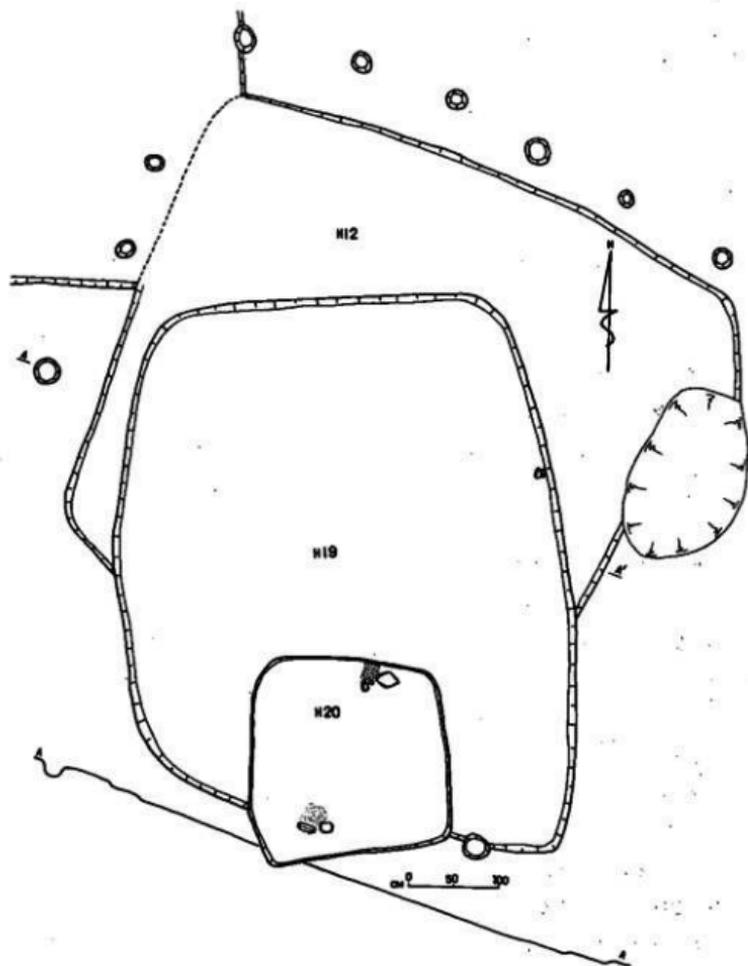


第46図 天神遺跡H-18号住居跡実測図 (1:60)

b 須恵器 (H19-1・3・4)

菱形土器の口辺部と胴部の破片が出土している。1は前述したH10-13と同器形の菱形土器片で、国分式土師器に伴うものである。3は器面にロクロ痕が顕著な厚手の土器片である。

(小林幹男)



第47図 天神遺跡H-12・19・20号住居跡実測図(1:60)

(20) H第20号住居跡

1 遺構 (第47図)

東西2.2m、南北2.2mを計る隅丸方形プランで、他の住居跡に比べて極端に小規模である。

住居跡内には、石組みを伴うカマド状遺構が2か所から検出されている。北側のカマド状遺構は、住居跡内の位置、焼土の状態から、この遺構に関係するものであることは、ほぼ誤りがない。しかし、南西隅寄りに検出されたカマド状遺構は、その位置関係から、H19に伴う遺構が破壊されて、一部が残存したものと考えるのが妥当であろうか。

(川上 元)

2 出土遺物

この住居跡に伴う遺物は、ほとんど検出されていない。しかし、住居跡のプラン、複合するH13号住居跡、およびH19住居跡の層序関係から、国分期の遺構と断定することができる。

(小林幹男)

(21) H第21号住居跡

1 遺構 (第48図)

H22号住居跡を切って構築されたものである。東西3.7m、南北3.8mを有する方形プランである。住居跡の床面部分に礫群が散布しており、遺物もこの中に含まれる。また、東側のH-22号住居跡の複合した部分に、石組を伴う焼土が発見された。

(川上 元)

2 出土遺物 (第40図)

a 土師器 (H21-1・5・6)

変形土器の口辺部と胴部が検出されている。胴部(6)は、内湾型に強く張っているが、多摩ニュータウン遺跡出土の例によれば、前述(H19-2)の脚付変形土器に、この器形がみられる。口辺部は外反りし、頸部でくびれ、肩から胴部への張りがみられる。

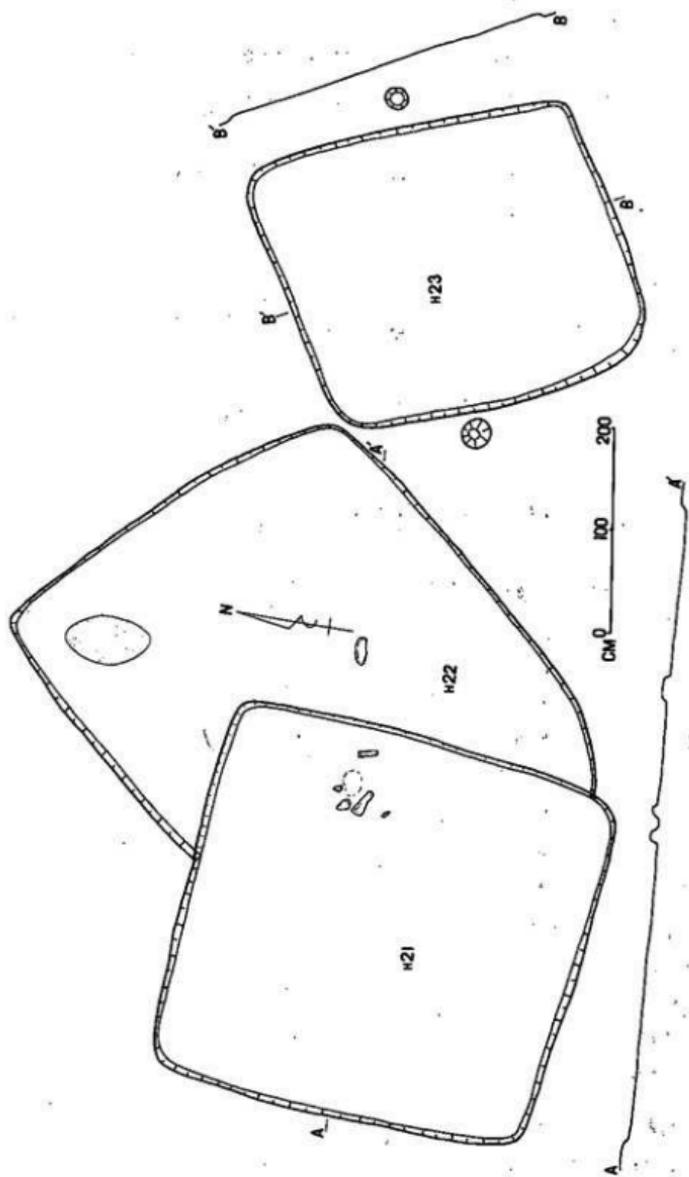
b 須恵器 (H21-2~4・7・8)

甕・坏・台付坏形土器などが出土している。変形土器は、口辺部の破片で、口辺部が外反りし、頸部でくびれ、肩が張る器形(2)と、厚手の口辺部で弱く反り、わずかな張りをもつ胴部に続く器形(4)が認められる。

坏形土器は、口辺部の破片でA型に区分されると、糸切り上げ底の破片8が出土している。台付坏形土器(7)は、底部の小破片で、器形を伺うことができない。これらの遺物は、国分期に伴うものである。

(小林幹男)

(22) H第22号住居跡



第48図 天神遺跡H-21・22・23号住居跡実測図 (1:60)

### 1 遺構 (第48図)

H 21号住居跡によって、西側部分を切られている。短径3.95m、長径約5m ぐらいの平面プランである。住居跡北側隅部分に焼土の痕跡が認められた。(川上 元)

### 2 出土遺跡

出土遺跡はほとんどなく、年代は不明である。しかし、周辺の遺構の分布からみて、土師晩期の可能性が高い。(小林幹男)

#### (23) H 第23号住居跡

### 1 遺構 (第48図)

H 21・22号住居跡の東側にある住居跡である。東西2.9m、南北3.25mを計る隅丸方形に近い平面プランを有する。

東壁と西壁の外側ほぼ中央に、柱穴と思われるピットが確認された。

### 2 出土遺物 (第40図)

#### a 土師器 (H 23-1・3)

甕形土器(1)は、頸部と上胴部の破片で、頸部が「く」の字形に強くカーブし、張りのある上胴部に続いている。

坏形土器(3)は、内黒B 1型で、A比が1:2.61、B比が1:1.52である。

#### b 須恵器 (H 23-3)

やや大型の甕形土器の破片と思われる。タタキ目で整形した後に、櫛状の工具でロクロを回転しながら水平の沈線文をつけている。

これらの遺物は、土師晩期Ⅰの真間式に比定されるものであろう。(小林幹男)

#### (24) H 第24号住居跡

### 1 遺構 (第49図)

グリッド・ヤー14に位置する遺構である。東西3.2m、南北3.4mを有する方形プランで、住居跡内部より、須恵器の遺物が多く認められた。(川上 元)

### 2 出土遺物 (第40図)

#### a 土師器 (H 24-4・6)

甕形土器は、底部の破片が出土し(4)、内部が黒褐色で、底部をヘラ削りしている。

6は器台形の土器片と推考されるが、この時期の遺物ではなく、なんらかの理由によって、他の遺物が住居跡内に搬入されたものであろう。

#### b 須恵器 (H 24-1~3・5)

坏・台付坏の破片・甕形土器片などが出土している。

環の口辺部は、いずれもD型であるが、1は下胴で張って、段落しながら底部に続き、2は下胴が直斜状である。いずれも底部はへら削りによっている。A比は1が1:3.45、2が1:3.11、Bは1が1:1.92、2が1:1.93である。

台付坏形土器の底部は、灰軸が認められ、器台は断面やや内湾する台形である。

変形土器は、下胴部の小破片で器形は判然としないが、器面をタタキ目で整形している。これらは国分期の遺物と考えられる。

(小林幹男)

(25) H第25号住居跡

1 遺構 (第50図)

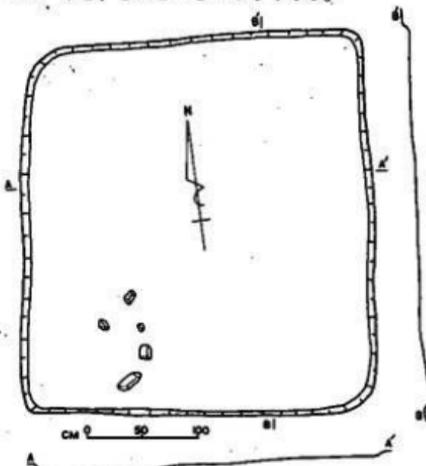
Y22号住居跡に複合した遺構で、東側部分は、畦畔のため不明である。住居跡の平面プランは、東西2.75m、南北2.55mぐらいを計り、小型の隅丸方形プランであることがわかる。住居跡の西壁中央部分から、ガマド跡と思われる焼土と焼石が検出されている。

(川上 元)

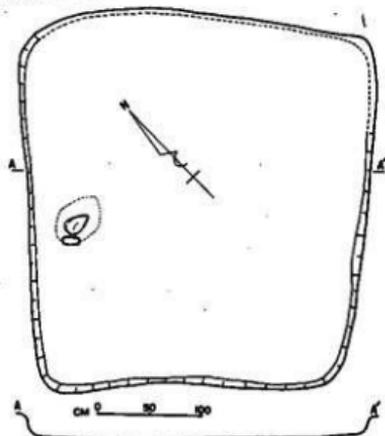
2 出土遺物

検出された遺物は、土師国分期の坏形と変形土器の小破片で、器形を復元できるものはない。

(小林幹男)



第49図 天神遺跡H-24号住居跡実測図(1:60)



第50図 天神遺跡H-25号住居跡実測図(1:60)

註1 八幡一郎他「岡谷市海戸遺跡」長野県考古学会研究報告書2 1967

註2 平出遺跡調査会編「平出」昭和30年

註3 神林淳雄・杉原荘介「武蔵和泉遺跡調査概報」考古学11-5

註4 桐原 健・御子柴泰正「長野県伊那市美笠原堂垣外遺跡調査概報」信濃21-4

- 注5 藤森栄一「信濃下蟹河原おける土師器の様式」考古学10-11
- 注6 植崎彰一「瓷器の道」1 各古屋大学文学部二十周年記念論集 1968
- 注7 小林幹男「明神前遺跡」信濃国分寺本編 昭和49年 古川弘文館
- 注8 杉原莊他「古墳文化～土師時代」市川市史第1巻 昭和46年 古川弘文館
- 注9 谷本鋭次他「多摩ニュータウン№264遺跡の発跡調査」多摩ニュータウン遺跡調査報告書 昭和42年
- 注10 注9に同じ

## C その他の遺構と遺物

### (1) 井戸跡 (第51・52図)

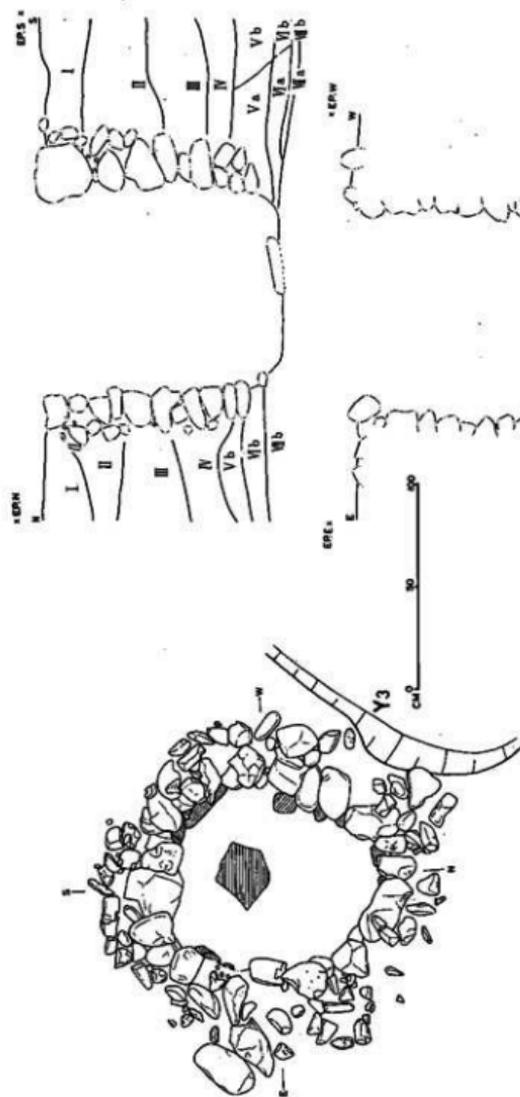
グリッド・ソー9の部分に、石組を環状に並べた遺構が検出された。その後の調査により、石組の中央部には石がなく、黒土が下部まで続いていることが確認され、井戸跡であることがつかめた。

井戸跡の規模は、直径約90cm、深さ1.1mであることがつかめた。こうした井戸跡<sup>(1)</sup>は、同地区の向田Ⅱ遺跡でも発見されている。

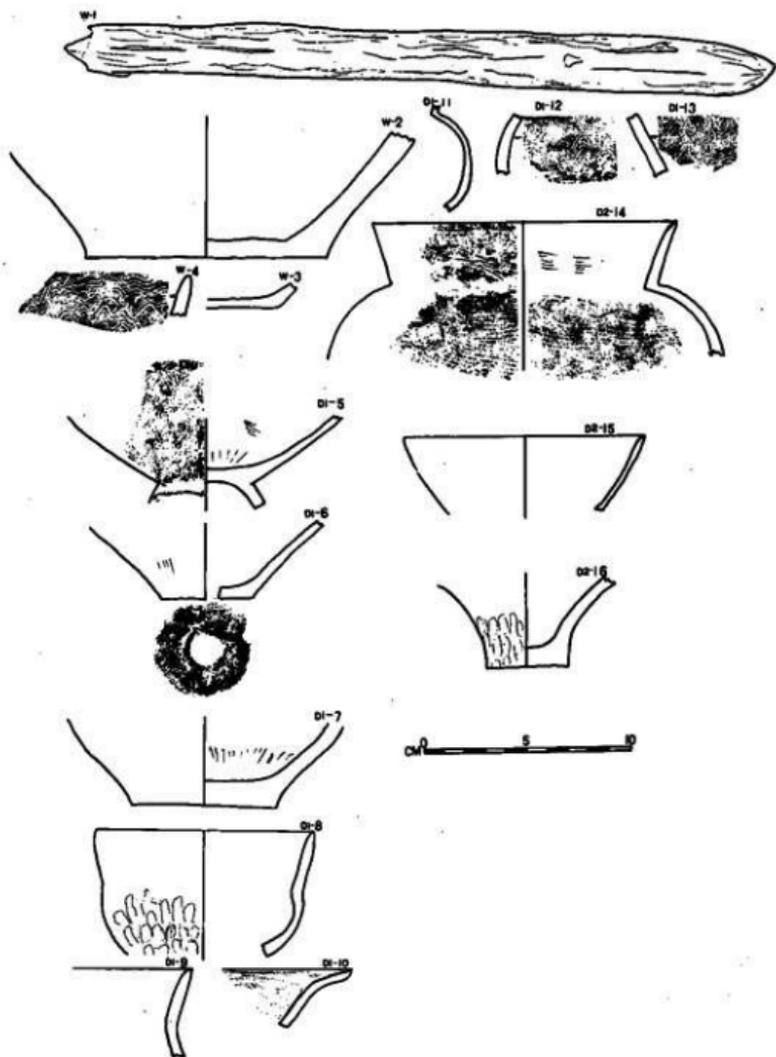
出土遺物は、まず石組の間から、弥生後期の箱清水式土器(第52図W-4)が検出されている。これは井戸跡が隣接するY3・4号住居跡の生活面に伴う包含層を掘り割って、それ以後の時期に構築されたものであることを示している。

井戸跡内の崩土は、20～30cmの間に、多く周壁の積石が崩落して混入し、その下層は、水分を多く含んだ泥沼土となり、その中から(第52図)W-2の内耳質の土器が出土している。従って、この井戸跡がおよそ原型を保っていたのは、鎌倉期ごろまでであろうか。そのころ放棄された井戸跡には、崩土がつまり、やがて周壁の積石が崩落して埋没したと考えられる。周壁の石積は、自然石を乱積状に小口積にしているが、石組は堅固で自然崩落する状況ではない。恐らく落ち込みの危険を防ぐために、人為的に積石を崩し、投入したものであろう。

井戸跡の底部には、凝灰岩質の平石が置かれ(第51図)、現在も湧水がみられた。この面から(第52図)W-3の糸切り底の須恵器片と、W-1の「ちょうな」で削った杭状の木器が出土した。これらを総合して考察すれば、井戸跡の使用された時期は、国分期ごろと推定され、H-1・2・5・10・11、やや広げれば、H-6・13・14・19・20の住居跡が、これらと関係があるのではあるまいか。因に、これらの住居跡の配置は、井戸跡を中心にして、およそ半円形を描くことになる。(川上 元・小林幹男)



第510图 天神道站井产菊类图 (1:30)



第52図 天神遺跡井戸跡、D1・2土坑出土遺物実測図(1:3)

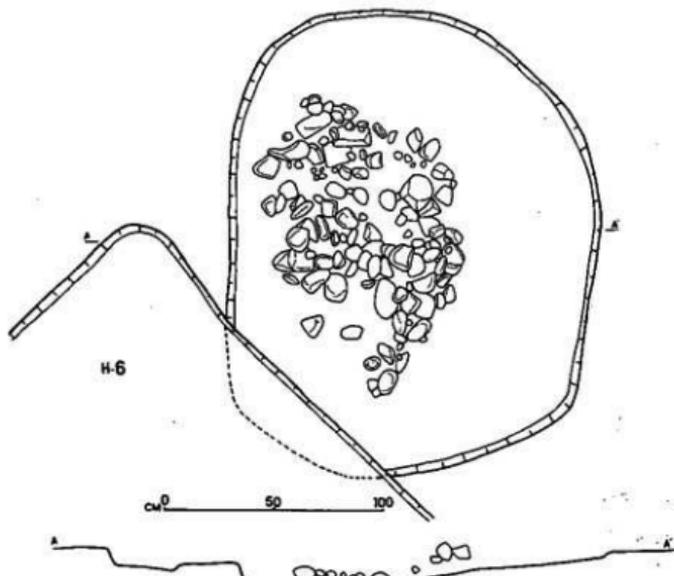
(2) D-1号土坑(第53・52図)

本遺構は、グリッド・ワー7に発見されたもので、長径2.2m、短径1.7mの楕円形プランを有している。H6号の壁とわずかに重複している。

土城の内部は、多数の礫が混入して、遺物もそれらにまじって検出された。

遺物は、すべて土城に伴う礫群の間から出土し(図版3)、その下層からは検出されていない。礫に伴う黒色壤土層は、末端部で薄くなるレンズ状を呈し、中央部が上へふくらんで厚くおよそ20cm前後、その下層に砂質の壤土層が5cmほどあり、さらに中央が深くレンズ状にくぼみ、15cm前後の暗褐色の砂質壤土層が、ピット内に堆積していた。第1層の礫を伴う層から検出された。出土遺物は、弥生後期箱清水Ⅱ式の変形土器片(D1-7・10・12・13)と五領期の台付甕・埴形土器などの破片である。D1-6の極底部は、弥生式土器と考える。

(川上 元・小林幹男)



第53図 天神遺跡D-1土城実測図(1:30)

(3) D-2土城(第54・52図)

Y15号住居跡北壁部分を切って構築された遺構である。長径1.9m、短径1.2mを計る。D-1土城と同様に、多数の礫が敷き詰められていた。

土城内の層序は、およそD-1に準じているが、それよりやや各層位が薄く浅い(第54図)。検出された遺物は、弥生後期箱清水Ⅱ式の変形土器の他、五領期の甕・埴形土器の破片(第52図D2-14~16)などである。五領Ⅰ式土器を伴うY15号住居跡を切っているの、その直後型式とみることができよう。

(川上 元・小林幹男)

(4) 集石遺構 (第55図)

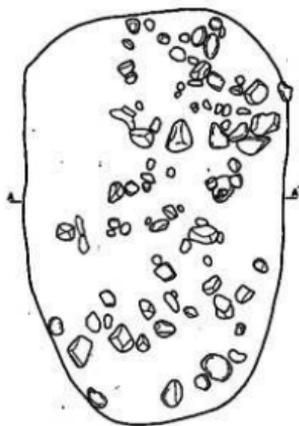
グリッド・ヨー12を中心として検出された遺構で、多量の礫群が規則的に配されている。その意味では、配石遺構と称するのがよいのかも知れない。

この礫群は、直径約1mほどの円形の範囲内に、緑泥変岩系の大小の礫を集めて、意識的に馬蹄状の配列をしている。遺構内の遺物は全くなく、古墳時代のもものと推考されるが、その意図・目的などは全く不明である。

今回の調査グリッド内からは、他にこのような遺構は見されていない。また、この地方の調査でも、寡聞してその報告を知らない。先学諸氏のご示教をいただければ幸いである。

(川上 元・小林幹男)

註1 小林幹男・川上 元「長野県上田市西光坊・向田Ⅱ・石原遺跡緊急発掘調査報告」前掲書



第54図 天神遺跡D-2土壌実測図(1:30)



第55図 天神遺跡集石遺構実測図(1:30)

## 2 山田屋敷遺跡 (第7図)

調査区のはほぼ全域わたって、4m×4mのグリッド220(3520㎡)を設定して、鋭意調査を行なったが、南端部を除いては、弥生式土器と土師器・須恵器、さらには近世の陶片などが混入して、結局成果は期待できなかった。従って、多くのグリッドは、地層の状態と遺跡の範囲を確認する目的で、調査区を減らして発掘した。こうして、発掘したグリッド数は42(672㎡)か所、発見した遺構は弥生期1、土師器2のわずかに計3か所であった。これらの所見から、山田屋敷遺跡の中心は、恐らく南に続く水田地帯に隠されていたものと思われる。(小林幹男)

### A 弥生時代の遺構と遺物

#### (1) Y-01号住居跡

##### 1 遺構 (第7図)

グリッド・ミー23部分に発見された遺構である。本住居跡は、H02号住居跡によって切られている。一辺3.0mほどの隅丸方形を呈するプランである。(川上 元)

##### 2 出土遺物 (第57図)

弥生後期箱溝水Ⅱ式と五領期の甕形土器の破片が少量出土した。しかし、図上で復元できるものはない。

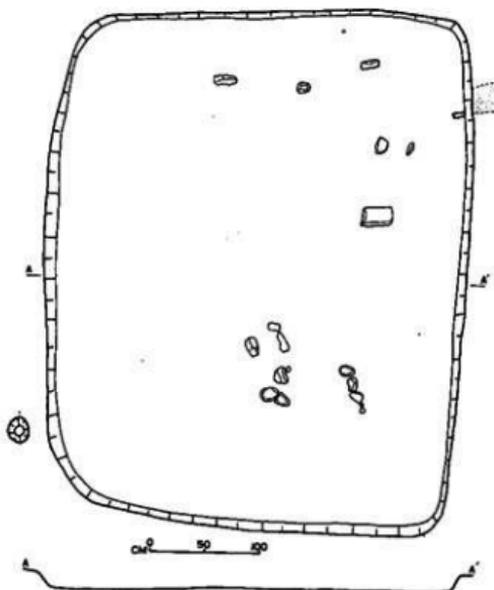
(小林幹男)

### B 古墳時代および

歴史時代の遺構と遺物

#### (1) H-01号住居跡 (第56図)

グリッドC-23・24部分に検出された遺構である。長径4.25m、短径3.9mを計り、隅丸長方形を呈す。



第56図 山田屋敷遺跡H-01号住居跡実測図(1:60)

住居跡の外側壁部分に焼土の跡がみられた。

(川上 元)

## 2 出土遺物 (第57図)

土師器の甕形土器の破片と、須恵器の坏形土器台部などが出土している。国分期の遺物と考えられる。

(小林幹男)

### (2) H-02号住居跡

#### 1 遺構 (第7図)

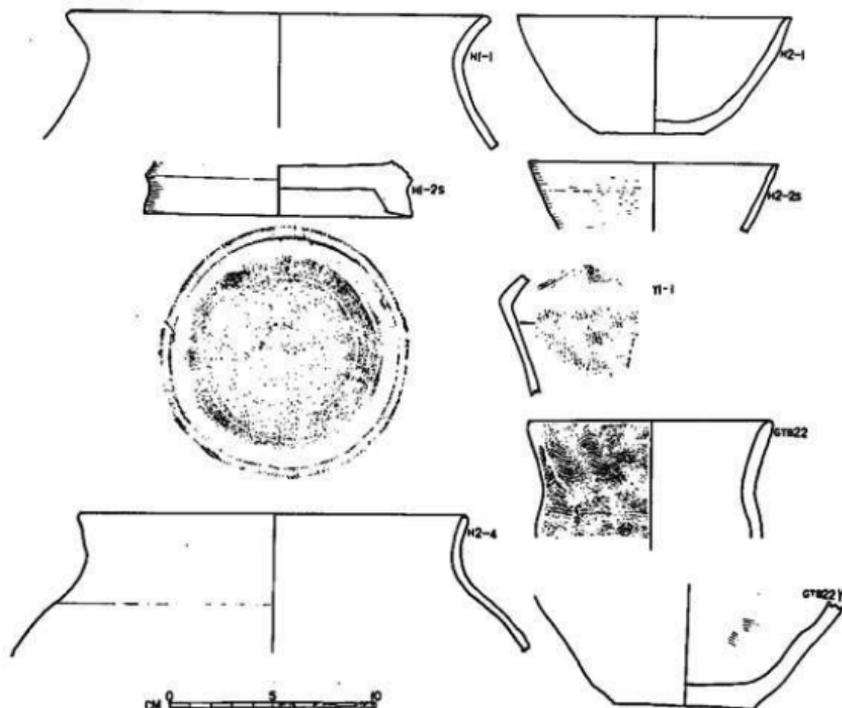
グリッド・ミー22部分に発見された遺構である。本住居跡はY01号住居跡を切って構築されたもので、長径4.0m、短径3.0mほどの長方形プランである。

(川上 元)

#### 2 出土遺物 (第57図)

土師器と須恵器の坏形土器が出土している。H2-1はB1型で、内面暗褐色を呈し、A比は1:2.3、B比は1:0.9である。国分期に属するものと考えられる。

(小林幹男)



第57図 山田屋敷遺跡出土遺物実測図(1:3)

第IV章 考 察

(上) 中天神遺跡  
井戸跡



(下) 天神遺跡  
集石遺構



## 1 遺跡の立地条件と集落の変遷

両遺跡は、今回の調査結果から、弥生後期の箱清水Ⅰ式期にはじまり、同Ⅱ式期、そして、弥生期の遺物に、いわゆるS字口縁を伴う五領Ⅰ式期の土師器が伴出する例を加えながら、同Ⅱ式、中期の和泉式、後期の鬼高式、晩期に至って真間式、さらに、およそ10世紀ごろの国分式中期まで、短期間の断絶はあったとしても、ほぼ継続的に生活の場として利用されたことがわかる。

さらに断片的な井戸跡崩土中出土の内耳土器や、山田屋敷遺跡覆土中で検出された近世陶片などの資料を加えて推考すれば、両遺跡の歴史は、中世から近世へと継続されることになる。恐らく、山田屋敷という地名は、そのことを別な角度から教えているであろうし、また、覆土中から瓦片などが発見されないのは、瓦が一般に普及した時期の屋敷跡ではなく、かや葺か藁葺の古い民家(豪農)の姿を暗示している。

ともあれ、両遺跡は、塩田平の中でも決して規模の大きなものではないが、土に生きた農民の姿を、少くとも数百年にわたって土に記録し、今日のわれわれに教えてくれた貴重な存在である。

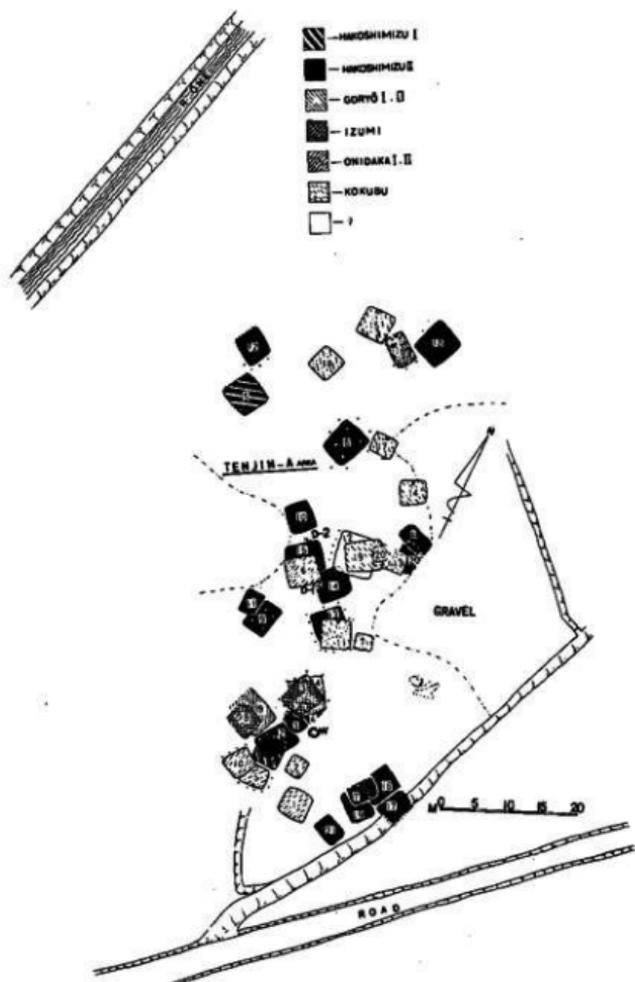
私は調査後約1年を経過した時期に、再びここを訪れ、農地の再開発、農業の近代化のためには、まことにやむを得ないことも知れないが、姿を一変して整然たる水田や流れとなった周辺の地形を目のあたりにして、機械のもつ物的な冷酷さを感じさせられた。すべてを破壊しつつして、また、新しい生活と文化がはじまった。あの敗戦直後の焼け跡に立った感慨に似ている。

自然の窪地を求めて蛇行し、そこに古代の低湿な耕地を育んだであろう駒瀬川(第2図)は、いまやコンクリートの護岸工事が施されて、直線的な農業用水路に生まれかわった。

(87ページ挿入写真)この駒瀬川と西方の尾根川は、いく度となく氾濫し、耕地を流し、家をつぶしてきた。天神遺跡の東方と西南方には、厚い礫層が広がり(第5.8図)、Y56・13などの縁辺の住居跡内にも、礫群が流入し、堆積していた。

弥生時代の集落は、この二つの流れが合流する地点の微高地に、帯状に長く分布し、弥生後期の箱清水Ⅰ式期には、2(Y1・5)~3戸から数戸が散在していたであろうか。これらの住居跡は、いずれもやや尾根川に寄ってつくられている。このころの住居跡のあるものは、西南の礫層の下に、すでに失われたのかも知れない。

住居跡の編年は、次項で考察するが、これに続く箱清水Ⅱ式期の初頭は、駒瀬川に寄った微高地に立地しているようである。この時期も、2(Y18・19)~3戸から数戸程度の戸数であろう。次の時期になって、集落の中心部に、5(Y2・8・9・10・20)~6戸程度が出現し、Y8・9・10は、その後火災で焼失したことが、検出された柱材・



第58図 天神遺跡A区全図

床面の状況から推考される。この地方の風向からみて、火元はY 8住居跡であったように思う。その後に構築された住居跡は、集落のやや南寄りへ、Y 4・6・11・16住居跡などの4～5戸が考えられる。そして、箱清水Ⅱ式期の終末は、ほぼ同じ立地で、Y 3・7・14・17→15住居跡などの数戸が考えられる。この他、Y 12・13・21の編年が、複合関係・遺物の推考からも明確でない。しかし、いずれも、箱清水Ⅱ式期後半のものと考えられるので、天神遺跡の集落は、一時期恐らく数戸を出ない小規模のものであろう。

弥生期の集落が、氾濫の危険を伴う河川の近くに、こうしていく度となく再建されて営まれている理由は、灌溉の容易な河川沿いの低湿地が、稲作のための優良な耕地として選ばれたからであろう。

塩田平における規模の大きい発掘調査は、前述の<sup>(1)</sup> 榊木遺跡・<sup>(2)</sup> 西光坊遺跡・向田Ⅱ遺跡・石原遺跡と今回の2遺跡のみであるが、特に弥生期の集落を発掘した榊木・西光坊の2遺跡は、いずれも産川の氾濫の影響を受けていた。そして、榊木遺跡は、近くに祀られる泥宮周辺の低湿地が、水田稲作を主体とする生産面として、古くから利用されていたことが知られている。

さて、これに続く古墳時代の集落は、Y 15、山田屋敷Y 01号住居跡の弥生式土器に伴う五領Ⅰ式期に続いて、H 4・9の2戸が、集落南端部につくられている。そして、南部の水田地帯、あるいは礫層の下にも、若干同期の遺構が存在していたかも知れない。中期の和泉期の2戸は、奇しくもともに五領期の住居跡に複合している。

そして、後期になると、住居跡の立地は、集落の北端部が選ばれている。発見された鬼高期の住居跡は、H 16ただ1戸であるが、国分期の遺構の上層に流入した礫層の中に、鬼高期の遺物が混入していた事実からも、氾濫によって破壊された北東地区に、この期の住居があったことを推考させる。

土師期の住居跡は、晩期Ⅱの国分期に入って、急激にその数を増してくる。こうした傾向は、昭和46年から行なわれた上田市全域の分布調査の結果でも、遺跡数の増加という形で示されている。これは班田制の崩壊の過程で、寺社・貴族・富農などによる墾田の増加が、集落の分散と発展を招いたためであろう。

しかし、天神遺跡にみられる集落の規模は、決してそれほど大きいものではない。井戸跡をとりまく住居跡の中から複合しているものを除外すれば、次の3例となる。

〔例1〕 H-1・2・5・11(7)・13・6と北西部の14・15・17・18の住居跡10戸、(堅穴遺構1)その他にB地区2～3戸

〔例2〕 H-1・2・10・11(7)・19・6と北西部の14・15・17・18

の住居跡10戸、(堅穴遺構1)、B地区3戸

(3) H-1→11(7)は、例1・例2と同じ、20.6以下例1・例2と同じ、

この間およそ200～300年間の推移を考えれば、例1～例3の間で複合していないために、各例に競合した10～11戸は、2～3+dの形で、いずれかの時期に配列されるであろう。従って、集落の規模は、各期を通じてそれほど大きな変化がなかったことになる。

国分期の遺構の一部は(H7・14)、北東から押してきた厚い礫層を掘り割って、構築されている。このことをみても、古代の人びとが、住なれた土地への愛着、この遺跡周辺の優れた農業生産のための立地条件を知ることができる。

## 2 弥生時代の遺構と遺物

検出された弥生期の遺構は、天神遺跡23、山田屋敷遺跡1の計24である。

平面プランは、隅丸長方形が15(推定1を含む)、隅丸方形が8、不明1である。このうち長径が東西径にあるもの7、南北径にあるもの8で、时期的統一性、时期的な変化は全く認められない。

次に、各遺構の編年を複合関係、出土遺物の類似性から、若干考察する。

(1) 複合関係(第58図)からみた考察

(A)19→16→7～17 (B)1→2→4→3 (C)9→11 (D)20→6

註 ○古→新を示す ○A～B 前後関係未確定

(2) 出土遺物の時間からみた推考

○箱清水Ⅰ式-1・5

○箱清水Ⅱ式A (高坏形土器の口辺部が外反り、肩の稜角がきわめて弱い)-18・19

○箱清水Ⅱ式B-1 (壺形土器の頸部櫛目状文が幅広く、ボタン状粘土円板をつける)  
-2・9

○箱清水Ⅱ式B-2 (丹彩同器形の変形土器を伴う)-8・10

○箱清水Ⅱ式B-3 (変形土器の器面をハケ目で調整した後に、櫛目状文を施し、同器形の高坏を伴出する)-8・20

上記箱清水Ⅱ式Bのうち、8・9・10はともに火災によって焼失し、位置・風向、出土遺物の所見から、同一時期の遺構が、8の火災によって類焼したと考えられる。従って2・8・9・10・20は、同一のものと推論される。

○箱清水Ⅱ式C (五領Ⅰ式土器を伴出する)-15

### (3) その他の所見

○19の時期の後に、19→16→7～17の2時期がある。

○3・14は、土器の形式、複合関係から、15より前で2より後、すなわち2→3・14→15・土壇と考えられる。

従って、上記の推論から、3・7・14・17（仮にDグループとする）をほぼ同時期のものと考え、複合関係から、4・6・11・16（仮にEグループとする）をB・Dの中間に位置づけた。また、A～Bの関係は、壺・甕形土器の編年と併せながら、前述のとおり高坏の肩の稜角の弱い形式をもって、強い形式の前に位置づけて考えた。塩田平の調査結果では前記2・8住居跡から出土したボタン状の粘土円板をつけた壺形土器と、稜角の弱い高坏形土器は、ともにほぼ同器形の器台形土器と伴出しているが、前者は、五領Ⅰ式土器と伴出する場合があるのに対して、後者にはその例が現在までのところ知られていないからである。従って、天神遺跡でみられた2→4→4号住居跡の複合関係は、西光坊遺跡の調査結果と考量するとき、時期的な差が土器の器形変化では捉えられないほど短いものであったことを示している。弥生後期箱清水Ⅰ式期の終末から、同Ⅱ式期にかけては、古代社会の新しい息吹きが胎動し、短い間に激しい社会変化が行なわれたことを物語るものではないだろうか。

なお、B形式の高坏形土器には、稜角の強い坏部と伴出して、全く稜角のない形式が認められる。これらについては、今後十分調査例を待って、検討の余地がある。

その他、壺・甕形土器の編年的研究については、先学諸氏の優れた論考があるので、本稿では論究を略した。

上記諸点の考察から、天神遺跡A地区住居跡の編年を前項で示したとおり、箱清水ⅠⅠ式→箱清水Ⅱ式（A→B→E→D→C）と推考した。なお、残された問題については、今後の調査・研究に期待したい。

注 A・Bの（・）は、ほぼ同時期の遺構を示している。

## 3 古墳時代と歴史時代の遺構と遺物

検出されたこの時期の遺構は、五領期2、和泉期2、鬼高期1、真間期1、国分期19、時期不詳2（晩期と推定）の計27（うち国分期の2が山田屋敷遺跡）である。遺構の平面プランは、隅丸長方形が和泉期1（50%）、鬼高期1、国分期7（36.8%）不詳期1（50%）の計（37.0%）で、やや方形プランが多い。なお、長方形プランの長径の方位は、住居跡の主軸方向とともに弥生期と同様規則性は認められない。このことは、住居跡内のかまどの位置関係にも影響し、特に規則性はなく、概して北壁部が多いという程度である。特にかまどについて、顕著なことは、塩田平の前記調査遺跡の例を含

めても、実に簡単・粗雑で、単に焼土で所在を推考する程度のものが多い。

なお出土物については、第Ⅲ章の報文の中で、他地区の報告を参考にしながら、若干の考察を述べてきた。今回の調査結果は、弥生後期の箱清水Ⅱ式に伴出する五領Ⅰ式をはじめとして、ほぼ各期の遺物を少例ながら検出することができた。これは今後の塩田平の調査の上に、少なからず益することになろう。しかし、時間的制約もあって、まだ遺物の精査に、十分意を尽せないところも多い。今後若干の調査例を加えた上で、塩田平の弥生・土師器の土器集成といったものを、同学の諸氏と検討したいと考えている。

(小林幹男)

註1 川上 元・小林幹男「長野県小県郡塩田町梓木遺跡緊急発掘調査報告」雷濃22—8

註2 小林幹男・川上 元「西光坊・向田Ⅱ・石原遺跡緊急発掘調査報告」昭和47年  
上田市教育委員会・長野県考古学会誌15

註3 小林幹男「女王卑弥呼と倭の五王」若い世代と語る日本の歴史2 昭和47年  
評論社

註4 小林幹男「上田市の原始・古代文化」昭和49年 上田市教育委員会

註5 註2前掲書

註6 註2前掲書

#### 4 その他の遺構と遺物

本項では、井戸跡(87ページ写真)を中心に略述したい。

今回の調査で検出された井戸跡は、垂直型の浅井に区分される石井である。従来考古学的な井戸跡の発掘は、末永雅雄博士による唐古遺跡の井筒発見を端緒として(昭和11年)、すでにかかなりの数にのぼっている。しかし、そのほとんどは板井で、石井の考古学的発掘は、稀有に属する。その意味でも、向田Ⅱ遺跡に続いて、今回また塩田平に井戸跡の発見例を加えたのは、特筆に価する。しかし、いずれも圃場整備によって破壊され、後世に伝えることができなかつたのは、まことに残念といわなければならない。

古来井戸跡は、村落生活の中心であると同時に、祀られる神聖な場所であった。天神遺跡の井戸跡も、土師国分期の集落跡の中心部に所在し、河原石を乱積にし、底部に凝灰岩質の割石を置いている。井壁は底張り型にもみえるが、後世の変形によるゆがみとも推考される。口径は約90cm、深さ約1.1mの丸形の井筒である。しかし、井壁の上部石組が、第Ⅲ章I C(1)で述べたとおり、後世において一部破壊されているから、構築時の深さは、およそ1.3m～1.4mぐらいと推定される。向田Ⅱ遺跡で検出された井戸跡

の構造、規模も、ほぼこれと同様であった。また、これより先に、上田市国分の道場廃寺跡で検出されたいわゆる「比丘尼井戸」は、南北口径125cm、東西口径90cmの楕円形で、深さ約145cm、野面石を乱積状にした肩張り形円形井筒であった。この遺跡は、調査の結果、正明寺（勝妙寺）廃寺跡と推考され、黒笹90号窟式比定の平安末期ごろと考えられる。

およそ井戸跡の編年は、古式が口径1m以下とされ、口径の大小が創掘年代を知る論拠ともされている。天神遺跡出土の須恵器は、およそ下限が10世紀ごろと考えられることから、口径比による比丘尼井戸との関係も、矛盾なく説明される。

塩田平は、全国でも有数の寡雨地帯で、用水に難渋することは、近世になっても牧草にいとまがない。しかし、旱魃になって、河川の流れが枯渇すれば、この浅井戸も村びとの用にはたななかったはずである。従って、この井戸跡は、通常時における用水源であるとともに、集落の中心的な役割、あるいは祀られる井戸跡としての性格をもっていたのではあるまいか。

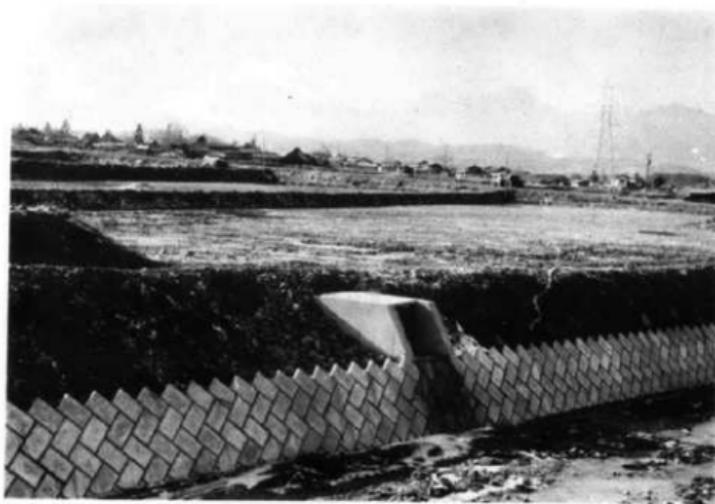
(小林幹男)

註1 国分寺研究グループ「道場廃寺跡の調査」あづまや2 昭和40年

長野県上田染谷丘高等学校歴史班（研究誌）

註 本項の執筆には、山本博「井戸の研究」 昭和45年 綜芸社を参考にした。

あ と が き



上  
整備後の山田屋敷遺跡と駒瀬川  
下  
麻止を採る地元の人びと



本調査は、天神および山田屋敷地籍で、東信土地改良事務所の施工する農耕地の構造改善事業のために、広く削土が行なわれ、遺跡破壊の危険が迫ったので、上田市教育委員会が主体となって、長野県教育委員会文化課の指導のもとに、約20日間を要して行なわれた。

調査期間は、春の作付けまでに工事を完了する必要から、まだ残雪と厳しい寒さの残る時期に、しかも短期間に完了するよう企画し、設定しなければならなかった。緊急調査とはいえ、機械力の導入は、学術的に最もさけなければならないところであるが、2月末の塩田平は、まだまだ20cm余の凍土があり、つるはしをもってしても、鉄板に鍛える状態であった。従って、予め包蔵地の状態を調査し、機械力によって凍土を除去する決断は、事実上さけることができなかった。しかし、機械力の導入は、結果として遺構上部の破壊につながった。

天神遺跡の地層は、およそ25cm前後の表土（耕作土）層の下に、ただちに包含層の黒褐色壤土層が続いていた（第4図）。部分的には、桑株の抜根などによって、表土（攪乱）層が50cmにもおよんで、プライマリーな層序を破壊していた。ブルドーザーによる凍土の除去は、凍土が実際には板状に剥離するため、25～30cmにおよび、遺構の壁面まで削平することになった。そして、削土面は連日の寒さで再び凍付き、解けて泥土となり、多くの調査団によって、一層壁高を低くする結果となった。従って、遺構実測図の壁高は、いずれも5～10cm程度縮小されていることになる。

塩田平の遺跡は、一部の地域を除いて、ほとんどが河川の堆積した壤土層の中に構築されている。黄色粘土層に構築された遺構の調査を頭に描いて、追究を重ねると、しだいに壁高が削られ、場合によっては遺構まで消失する状態を演ずることになる。

こうした悪条件の下で、地元の下之郷自治会の皆さんは、連日20余人の参加者を入選して、協力の労をとらえた。この地元の協力がなかったならば、今回の調査は不可能であったとさえいえる。

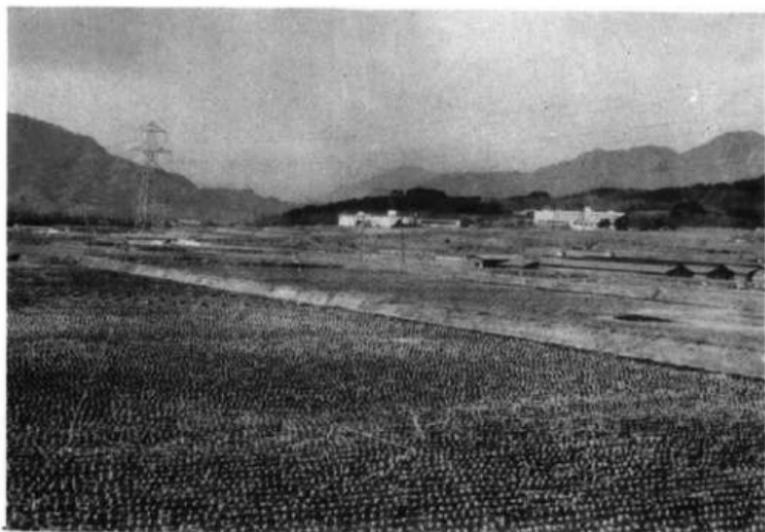
また、11大学にわたる大学生諸君は、調査員に協力して、学問的情熱を傾け、現実の困難と矛盾する問題状況の中で、献身的に自炊生活までして努力された。本書に使用した遺構実測図の原図は、ほとんどこれら諸君の手になるものである。

そして、上小考古学研究会に参加する長野県上田染谷丘高等学校歴史班、同上田高等学校郷土研究班、岡丸子実業高等学校地歴班の高校生諸君は、調査員や大学生諸君に協力して、調査活動の輪を広げてくれた。

そして、報文中に詳述したとおり、調査は予期以上の多大の成果を収めて、無事終了した。これらの皆さんに、併せてここに心から謝意と敬意を表するものである。

小林 幹 男

# 圖 版



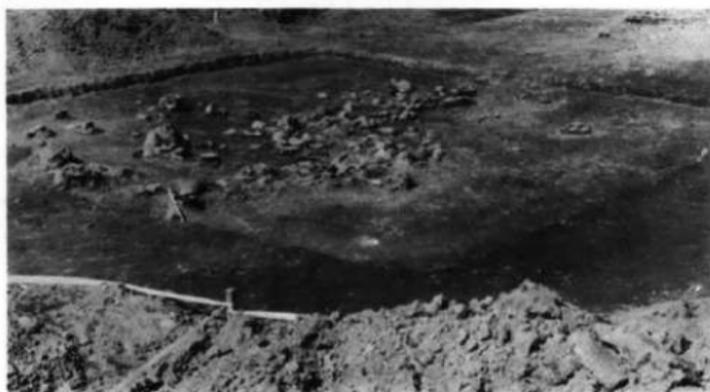
図版1 下之郷付近の自然と環境 (上) 航空写真  
(下) 圃場整備後の山田屋敷遺跡



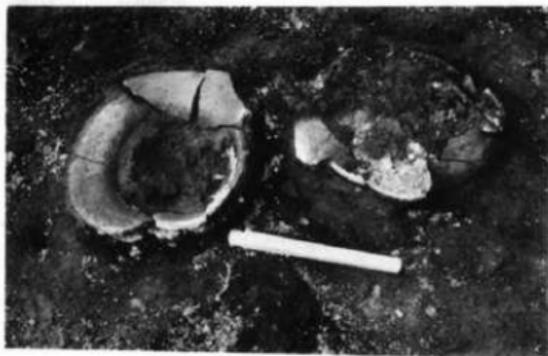
図版 2 天神遺跡全景



图版 3 天神遺跡第 1 号土坛墓



図版4 天神遺跡(1)  
 上 Y5号(上)とY8  
 号住居跡  
 中・下 Y5号住居跡  
 と遺物の出土状態





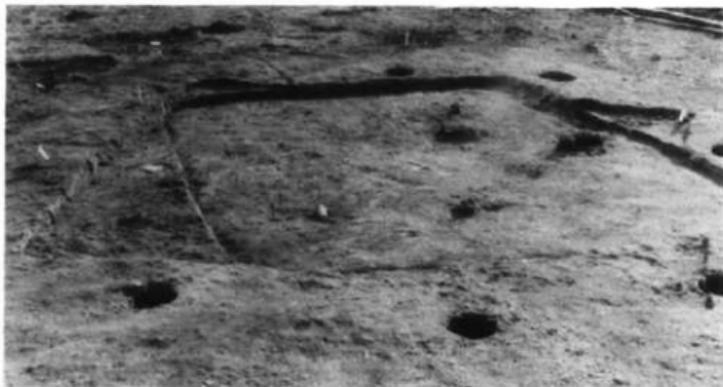
図版 5 天神遺跡(Ⅱ)  
Y 5号住居跡内の  
遺物出土状態



図版 6 天神遺跡 (Ⅲ) Y 8 号住居跡と遺物の出土状態  
(下右は炭化した柱材)



図版7 天神遺跡 (VI)  
 上 北端から遺跡を望む (下Y 18中左H 16・右H 15上H 18号遺構)  
 下 Y 10号住居跡



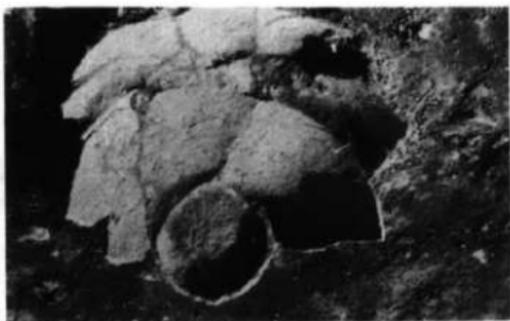
図版 8 天神遺跡 (V) H 3・4 号住居跡と遺物の出土状態



図版 9 天神遺跡 (VI)  
(上遺跡の西北端部を望む(下H 10号—上とH 8号—右下遺構)



Y 2号住居跡内



Y 2号住居跡内



H 11号住居跡内

図版10 天神遺跡遺物の出土状態



図版11 山田屋敷遺跡 H1号住居跡(上)と遺物の出土状態(中・下)



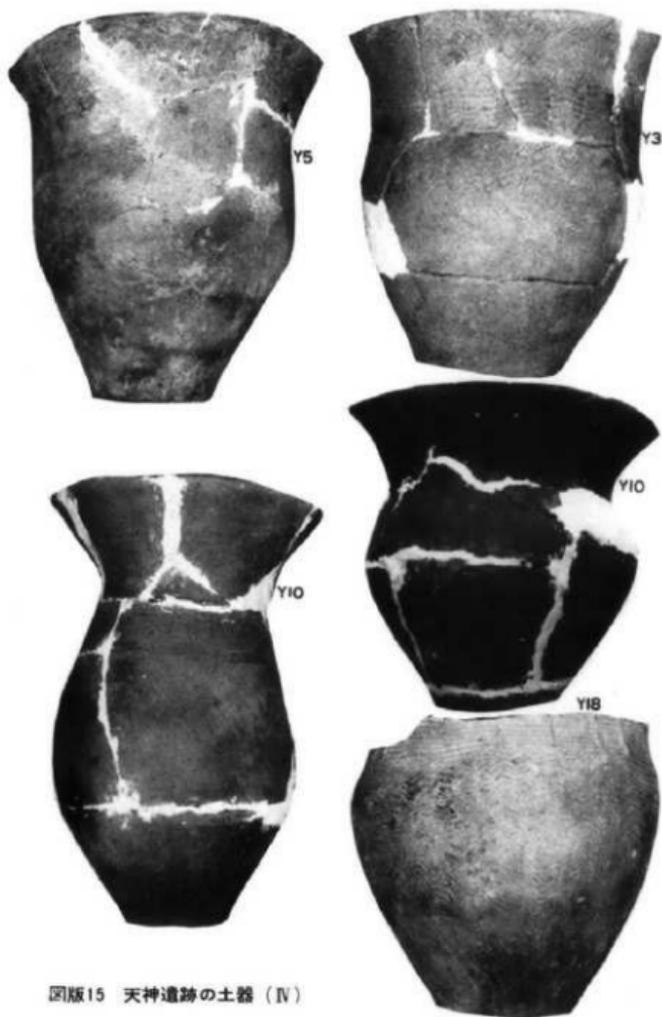
図版12 天神遺跡の土器 (I)



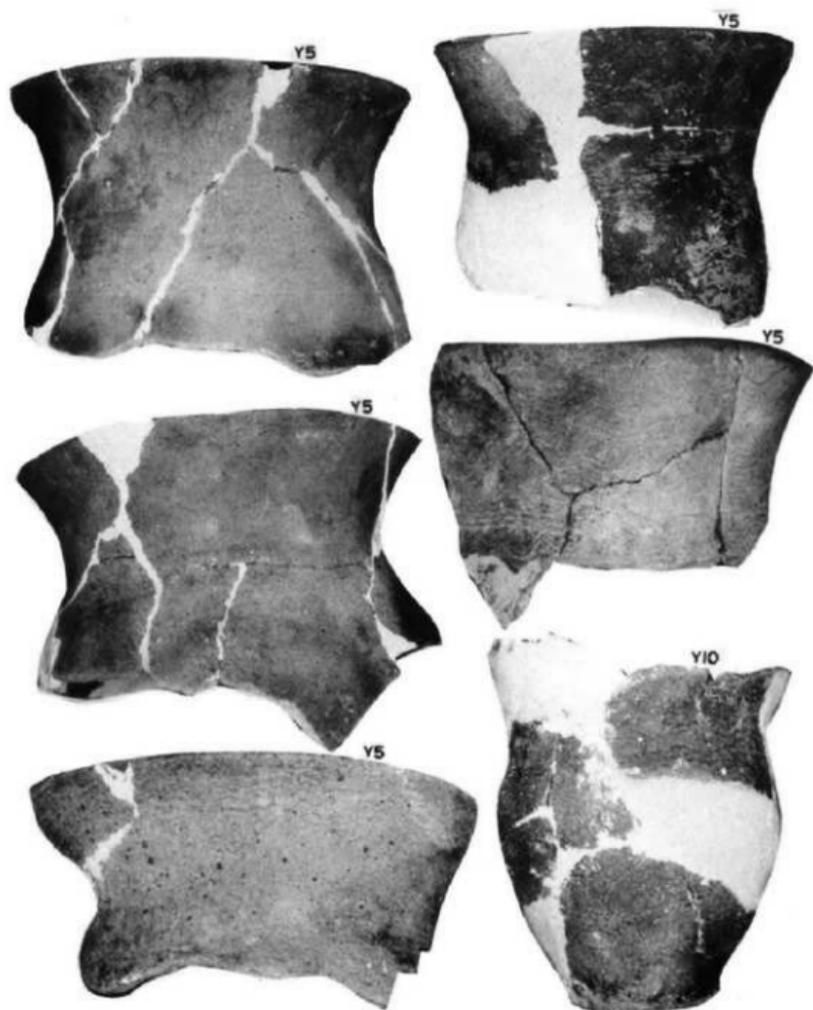
図版13 天神遺跡の土器 (II)



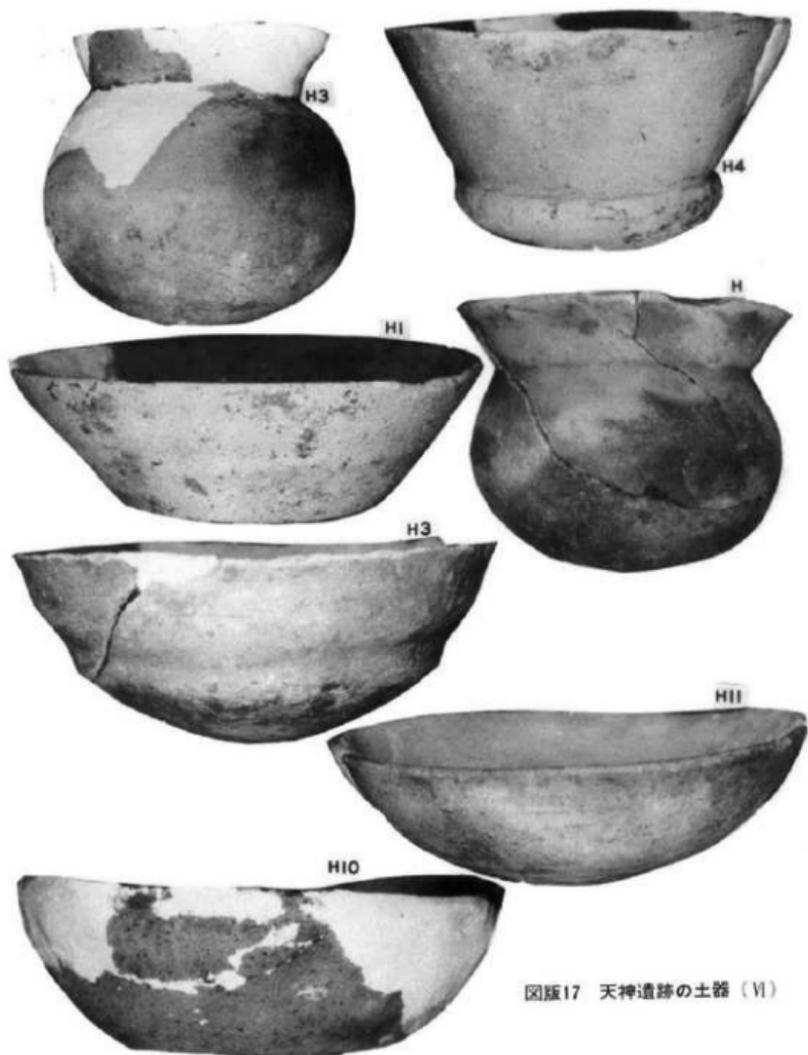
図版14 天神遺跡の土器 (Ⅲ)



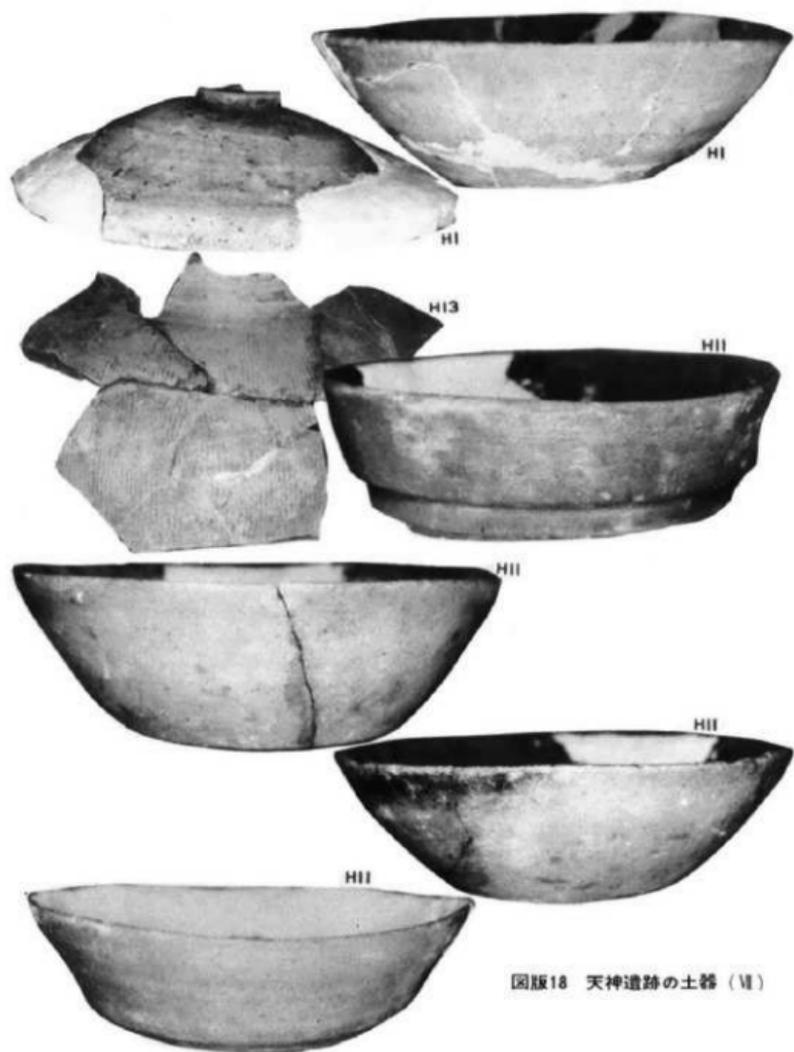
図版15 天神遺跡の土器 (IV)



図版16 天神遺跡の土器 (V)



図版17 天神遺跡の土器 (VI)



図版18 天神遺跡の土器 (Ⅵ)



図版19 天神遺跡と山田屋敷  
 (Yamada) 遺跡の土器

上田市文化財報告書 7

天神遺跡 緊急発掘調査報告書  
山田屋敷遺跡

1975年3月1日 印刷

1975年3月10日 発行

編集者 小林 幹 男

発行者 上田市教育委員会  
上田市大手 1-11-16

印刷所 上田市染谷丘高校下  
(有)双葉印刷  
TEL.③1122(代)

長野県松本市旭3丁目1番1号(平390)

信州大学人文学部

